

平成22年度

第16回日教弘教育賞

教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える



教育振興事業の一層の発展を目指して

— 学校・家庭・地域が力をあわせ、子どもたちを育むために —

財団法人 日本教育公務員弘済会
会長 山田 篤

財団法人 日本教育公務員弘済会は本年創立59年目を迎えます。

この間、教育の振興と教職員の生活、福祉向上への熱き思いを体し本・支部一体となって寄附行為に定める奨学、教育研究助成、福祉の各事業を推進してまいりました。

本年7月以降には、いよいよ公益財団法人認定の申請を行い、一層公益目的事業の充実、拡大に努めていく所存です。

さて、平成7年度より制定した「日教弘教育賞」も本年度で16回を迎えます。

制定の主旨は、子どもたちの未来のためにひたすら努力されている教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励を意図したものであり、21世紀に生きる子どもたちの教育に大きく貢献しようとするものです。

本年度も都道府県支部のご協力を得て全国から多数の論文の応募をいただきました。ご応募いただいた論文は、いずれも、質、量ともに充実したものが多く、教育へのひたむきで旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦の教育論文（学校部門47編、個人部門37編の計84編）を審査、別掲の結果となりました。

審査にあられた皆様とそれまでお力添えをいただいた関係者の皆様に心からの敬意を表し、そのご協力に感謝申し上げます。

さて、本年4月には、いよいよ小学校で、授業時間や教育内容を充実した新学習指導要領が全面実施されます。その内容は、子どもたちの現状をふまえ、「生きる力」を育む理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視しようとしています。次代を担う子どもたちが、これからの社会において必要となる「生きる力」を身に付けてほしいと思います。そのため学校だけでなく、家族や地域など社会全体で子どもたちの教育に取り組むことが一層重要です。

本研究集録も地域支援活動やいのちの教育など変化の激しいこれからの社会を生きるために、学校・家庭・地域が一体となり協力していく感銘深い実践集となっています。日教弘教育賞がこの新しい教育の礎の力になって行く事に期待しています。



教育課題に正面からこたえて

審査委員長

帝京大学名誉教授

亀井 浩 明

研究論文を拝読して、各学校が多様な課題に直面し、その解決を目指して多くの工夫をこらしているということを改めて実感しました。その際の各学校の工夫も、単に限定的な対策というより、全般的に社会の変化を正確に認識し、その新しい社会を人間らしく生きるには学びはどうあったら良いかという課題意識を基盤に、理論的にも実践的にも奥深い研究をし、魅力的な実践を進めていました。

具体的な課題としては、地域と学校の間をどうみるべきかが多く、受賞した12の論文中、研究主題に「地域」という言葉が表現されているのが5論文ありました。5論文の研究の観点・方法の特色を私流に提示してみます。

- ① 地域社会への愛情・誇りを大事にしている。
- ② 歴史的な見方をしている。
- ③ 現在の人々の生活を改善する工夫に着目している。
- ④ 自然と社会の関連に着目して地域を見ている。
- ⑤ 現地に行って直接に観察し時には体験をして考察している。
- ⑥ 文書を読むデータをもとに考えるなどを大事にしている。
- ⑦ 環境維持の観点から課題を追求している。
- ⑧ 温かな人間関係を重視している。
- ⑨ 地域の産業に着目している。

感じたことを列記してみましたが、それぞれが今、教育が課題として着目しているものの解決をめざしていることがよく理解できました。例えば、「地域社会への愛情・誇りを大事にしている」「歴史的な見方をしている」であります。今、長い年月をかけて生活を共にする形で形成された地域が大きく変化してきています。情報化の進行もあり、日常生活での人々の人間関係が次第に希薄化してきています。それにともない、子供の人間形成でもいろいろな歪みが生じてきています。このような現実を、歴史的にも見ながら、特に人々の生活に着目してあらためて新しい地域の在り方を探究するという活動は、人間教育という意味からも極めて有意義であります。

探究方法としては、「文書読むデータをもとに考えるなどを大事にし」つつ、「現地に行って直接に観察し時には体験をして考察している」が、これも重要であります。冷静に事実・データをもとに考えつつ、同時に、人々の生活実態と関連づけて学習しようという発想が有意義であります。

その他の研究でも、「地域」を研究課題として表示してはいないが、毎日の生活に着目しての研究、社会の変化に着目しての学習活動など現実の生活を人間らしく生きていくにはどうあれば良いかに着目して研究を進めていました。

考えてみると、人が学ぶ意味は生きる力の育成にあるが、その生きる力は毎日の生活を人間らしく送ることができる力であり、その意味から、今年の研究はまさに生きる力を育む教育実践の開発ということが出来ます。この研究成果は、全国各学校の教育活動のいっそうの充実・改善に貢献するものとして高く評価します。



講 評

審査委員

文部科学省初等中等教育局主任視学官

田 中 孝 一

第16回日教弘教育賞の受賞者の皆さん、このたびの受賞、まことにおめでとうございます。また、受賞者の皆さんの教育研究論文の収載された『日教弘教育賞教育研究集録第22集』がここに刊行されましたこと、併せてお祝い申し上げます。

本年度の応募論文数は、84編（学校部門47編、個人部門37編）に及びました。また、学校種も、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校と多岐にわたり、加えて、教育委員会からの応募もありました。本年度の審査に当たった者を代表して、応募してくださった学校や先生方から感謝申し上げます。

論文募集の研究課題は、本年度も、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」でした。審査に当たっては、この研究課題に基づき、審査の観点を二つ設定しました。一つは、研究内容の適切性、児童生徒の成長、授業改善へ提案性、研究成果の汎用性等からの観点です。今一つは、論旨の明確性や妥当性、論文としての文章構成法等論文作法に関する観点です。

応募論文は、この研究課題を踏まえ、現今の学校や学校教育の直面する課題を見据え、それに真摯に取り組んだ成果を報告する論文が多くありました。特に、新教育課程の全面実施を目前に控えて、新教育課程のポイントである思考力・判断力・表現力の育成や言語活動の充実に向けた取組が目を見ました。これらの取組を通して、各学校では、新教育課程における学校改善がますます進み、子どもたちの生きる力に培う教育活動が充実していくことが期待されます。

さて、これからの学校教育は、家庭や地域の理解と協力を得ながら、学校全体として組織的にかつ協力的に展開することが強く求められています。教育課程の改訂に伴ういろいろな新しい取組も、学校と家庭・地域との協働の中で一層充実していくものと期待されます。したがって、本教育賞に応募される学校や先生方におかれては、学校部門であれ個人部門であれ、学校全体の教育活動の中でも位置付けや役割を明確にしながら、取組を展開していくことが求められます。

このことを念頭に置いた上で、教育論文として論述する場合、次のような点についてもご留意くださるようお願いいたします。

<学校の教育活動として>

- 教育課程上の位置付け、年間指導計画上の位置付けを明確にすること。特に個人部門の場合、特定の個人の思いつきによる取組ではなく、学校全体の教育活動の一環として位置付けることが大切であること。

<取組の内容として>

- 学校、地域、子どもたちの実態や課題の把握とその解決への道筋を記述すること。
- 子どもたちの姿や変容を具体的に記述すること。

<教育論文として>

- 学校教育における実践論文としてのねらいや論旨を明確にすること。
- 論文として、概念を明確にしての用語の使用、簡潔かつ的確な文章表現、筋の通った構成を心がけること。特に、構想図、構造図などの図表等に頼りすぎる傾向も目立つので、言葉や文章による丁寧な表現で記述すること。（研究発表会等におけるプレゼンテーションとは異なること。）
- 特定の学校としての個別の取組ではあるが、それを超えて、全国の学校においても取組の参考になる点を明確に示すこと。（単なる実践報告ではなく、提案性を重視すること。）

新教育課程は、いよいよ、小学校からスタートします。本教育賞に応募された学校や先生方が、引き続き、地域や学校の実態に根ざした、特色ある教育活動に意欲的に取り組まれ、それが、子どもたち一人一人の学力向上、人間的成長につながるよう心から期待しています。また、その成果を教育論文として本教育賞に報告して、全国の学校や先生方の参考として結実することを併せて期待しています。



「流行」と「不易」の統合

—— 論文審査を終えて ——

第一次審査委員長
北海道支部副支部長
山本 勇

全国から届けられた84編（学校部門47、個人部門37）の論文を、わくわくしながら読ませていただきました。学校や先生方の創意と熱意、子どもたちの躍動、それを支える豊かな地域性がそれぞれに横溢していて、実にたのもしかったです。

現在、わが国の教育は、そのシステムや教育内容、教育予算、学力問題、家庭との関係等々、さまざまな課題に直面していますが、そうした厳しい状況を理論的・実践的にどのように克服していくべきか、どの論文にも確かな方向性が示されていました。そうした中で、今回、教育実践への取り組み方には大きく次の3つの流れがありました。

- 環境、情報、国際理解、食育、キャリア教育など現代の教育課題への取り組み
- 地域素材の新たな視点での教材化など地域連携の可能性を拡充させる取り組み
- 思考力・判断力・表現力を育てるための教育課程改革や授業改善への取り組み

むしろ、各論文ともこれらを単線的に扱うのではなく、複合的な視点で論を展開しているわけですが、その基本姿勢を要約するならば、現代の教育課題（流行）に挑戦しつつ、教育の普遍性（不易）をいかに確立していくか」ということになるでしょうか。

「不易流行」は松尾芭蕉の俳諧の中枢をなす理念です。「常に新しさを求めて変化していく流行性に俳諧の不易の本質がある」というものですが、「流行」と「不易」のこうした統合的なとらえ方が、現在、俳句が世界的な文芸となった要因だとも言われています。

今回の論文には、多様な視点や方法で新しい教育課題に果敢に挑み、そこから教育の普遍的な価値を構築していくといった労作が数多く見られました。そうした統合的な教育実践の根幹をなすものは、各学校・各先生方の創意と熱意とにほかなりません。

ただ、論文として見たとき、いくつか問題点もありました。

まず、表現上の問題としては、これまでも指摘されてきたことですが、写真や図表への依存度が強いことがあげられます。また、イメージ図や構造図が主観的で、読み手にうまく伝わってこない例もありました。まずは「言葉の力」を重視してほしいものです。

また、構成上の問題では、序論・本論・結論のバランスが偏り、序論に力点を置きすぎたり、本論がふくらみすぎたりして、結論が手薄になっているものが散見されました。

さらに、内容上の問題では、実践記録の綿密さに比して、分析・考察など理論面がやや脆弱な傾向が見受けられました。成果の裏付けが情緒に流れている例もありました。

「論」の構築という面では、今回最優秀賞となった個人部門の「地域素材『満濃池』の教材化」に触発される点が多々ありました。空間（地理）・時間（歴史）・公民の3つの内容的視点と、事実に・関係的・概念的の3つの認識パターンとを重層的・有機的にリンクさせていく論理展開は的確で、説得力に富むものでした。

何はともあれ、複雑な課題を抱えて学校がますます繁忙化する中で、多くの素晴らしい成果をお寄せいただいたことに深く敬意を表したいと思います。その根底には各支部に応募された何千もの論文の存在があります。質量ともこれだけのものは「日教弘教育賞」においてはありません。今回ここに収録された論文のみならず、支部に寄せられた各論文が、各地の教育実践や研究等に広く活用され、教育界に不易の価値をもたらすことを熱望してやみません。

第16回日教弘教育賞 審査委員

(順不同一敬称略)

《審査委員》

文部科学省初等中等教育局主任視学官	田中 孝一
帝京大学 名誉教授	亀井 浩明
元埼玉県上尾市立東小学校校長	吉泉 幸枝
第一次審査委員会委員長	山本 勇
財団法人日本教育公務員弘済会常務理事	宮腰 東海

《第一次審査委員》

委員長	北海道・東北ブロック	山本 勇 (北海道)
委員	関東北ブロック	坂本 宏夫 (栃 木)
委員	関東南ブロック	櫻林 俊一 (山 梨)
委員	東海・北陸ブロック	島田 芳文 (福 井)
委員	近畿ブロック	小卷 建一 (兵 庫)
委員	中国ブロック	尾崎 祥彦 (鳥 取)
委員	四国ブロック	松崎 洋 (徳 島)
委員	九州ブロック	森 政文 (大 分)
委員	日教弘常務理事	宮腰 東海 (本 部)

《目 次》

◇あいさつ

教育振興事業の一層の発展を目指して ―学校・家庭・地域が力をあわせ、子どもたちを育むために―
財団法人 日本教育公務員弘済会 会長 山田 篤 …………… 3

教育課題に正面からこたえて

審査委員長 帝京大学名誉教授 亀井 浩明 …………… 4

講 評

文部科学省初等中等教育局 主任視学官 田中 孝一 …………… 5

「流行」と「不易」の統合 ―論文審査を終えて―

第一次審査委員長 北海道支部 支部長 山本 勇 …………… 6

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧 …………… 9

●『最優秀賞』2編

《学校部門》 熊本県阿蘇郡産山村立産山中学校 校長 笹原 照明……………18

《個人部門》 香川県まんのう町立長炭小学校 教諭 川田 真司……………22

●『優秀賞』3編

《学校部門》 奈良県北葛城郡王寺町立王寺北小学校 校長 加藤 守弘……………26

《個人部門》 岡山県津山市教育委員会学校教育課
指導主査 高岡 昌司……………30

鹿児島県薩摩川内市立永利小学校 教諭 米満 康弘……………34

●『優良賞』7編

《学校部門》 新潟県長岡市立希望が丘小学校 校長 古塩 実……………38

新潟県長岡市立与板中学校 校長 遠藤 精一……………42

富山国際大学付属高等学校 校長 中田 正幸……………46

鹿児島県鹿児島市立黒神中学校 校長 塩屋 純隆……………50

《個人部門》 徳島県鳴門市林崎小学校 教諭 楠 茂宣……………54

高知県高知市立昭和小学校 教諭 小川 晶子……………58

高知県立高岡高等学校 教諭 島田 佳幸……………62

平成22年度・第16回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

- 【熊本県】 産山村小中一貫教育の推進
～新教育課程の新たな展開を目指して～
熊本県阿蘇郡産山村立産山中学校 校長 笹原 照明

◆優秀賞

- 【奈良県】 地域と学校を結ぶ公立学校運営の実践的研究
～地域を学校の宝に、そして学校を地域の宝に～
奈良県北葛城郡王寺町立王寺北小学校 校長 加藤 守弘

◆優良賞

- 【新潟県】 「思考力・判断力・表現力」を高める授業改善のあり方
～スタディ・ナビゲーションの開発と活用～
新潟県長岡市立希望が丘小学校 校長 古塩 実

- 【新潟県】 地域のよさを生かし、地域を愛する生徒を育む教育の実践
～全校写真会・街角作品展、観光ボランティア活動～
新潟県長岡市立与板中学校 校長 遠藤 精一

- 【富山県】 国際化による魅力づくり
富山国際大学付属高等学校 校長 中田 正幸

- 【鹿児島県】 地域産業を生かしたコミュニケーション能力の育成
～総合的な学習「椿学習」を通して～
鹿児島県鹿児島市立黒神中学校 校長 塩屋 純隆

◆奨励賞

- 【北海道】 ふるさとの一員として豊かにかかわり合い、生き生きと学ぶ子どもの育成
～ふるさと中頓別の良さに気付き、未来の姿を協同して考え発信する「中頓別探検隊」の取組～
北海道中頓別町立中頓別小学校 校長 橋本 壽子

- 【秋田県】 学びへのシフト・チャレンジプラン
～全国学力・学習状況調査等による学校改革の検証～
秋田県潟上市立天王中学校 校長 齊藤 正博

- 【岩手県】 読書をする喜びを感じ、自ら読み続ける児童の育成
～学校・家庭・地域が連携した読書活動を通して～
岩手県花巻市立八重畑小学校 校長 阿部 幸子

- 【山形県】 『健康づくりは人づくり』自ら健康づくりに取り組む子どもの育成
～学校・家庭・地域との結び愛を通して～
山形県西置賜郡飯豊町立第二小学校 校長 原田 榮藏



- 【山形県】 **生き生きと学び合う子供の育成**
－「教えて考えさせる授業」を通して、すべての子どもに「確かな学力」を－
山形県寒河江市立南部小学校 校長 菊地 宏哉
- 【福島県】 **複式の学びにつながる単式指導、一人一人に学びが成立する複式指導**
福島県福島市立佐原小学校 校長 田村 良江
- 【群馬県】 **米作り体験による食育の推進**
－地域の人々と昔ながらの栽培方法を通して－
群馬県館林市立第九小学校 校長 高柳 悦夫
- 【群馬県】 **「花とえがおと元気のある津久田小」を目指して**
－食育や食農を取り入れた教育活動を通して－
群馬県渋川市立津久田小学校 校長 飯島 仁志
- 【長野県】 **生徒を学校の当事者に！**
－三者協議会と辰高フォーラムをさらに活かしていくために－
長野県立辰野高等学校 校長 上島 清文
- 【茨城県】 **授業研究を中心とした学校改革**
－全教員の公開授業と生徒の様子を語る検討会から情報を共有する取組みを通して－
茨城県立荃崎高等学校 校長 谷田部佳見
- 【茨城県】 **「基礎・基本の確かな定着とその活用を目指す算数科学習指導法の在り方」**
－算数的活動を重視した児童主体の授業づくり－
茨城県常陸太田市立佐竹小学校 校長 古橋 康夫
- 【神奈川県】 **仲間とともに教えあい 助け合い 喜びを分かち合う 楽しい体育学習**
－体育学習における言語活動の充実－
神奈川県川崎市立東橋中学校 校長 金井 由明
- 【神奈川県】 **コミュニティ・スクール川中島小学校の挑戦**
－「参画・協働・共汗・共創」地域と手を携えて創り出す子どもが主役となる教育・コミュニティ活動－
神奈川県川崎市立川中島小学校 校長 榊原 誠
- 【千葉県】 **自分の命を自分で守ることができる児童の育成**
－危険予知能力を高めるには－
千葉県君津市立北子安小学校 校長 藤村 龍一
- 【千葉県】 **自ら考え、他とかかわりながら学ぶ子どもの育成**
－多様な表現力を育て、考えを深め合う算数学習をめざして－
千葉県香取郡多古町立多古第一小学校 校長 岩立 元夫
- 【静岡県】 **「学ぶ術を身につけた生徒」**
－「探究」の時間の実践を通して－
静岡県浜松市立庄内中学校 校長 宮地 幸宏



- 【静岡県】 「自信や誇り」をはぐくむ新たな学校づくり
－『自まん』づくり運動を核として－
静岡県掛川市立城北小学校 校長 鈴木 功一
- 【富山県】 学力向上を支える体験的な学びと道徳教育
富山県氷見市立朝日丘小学校 校長 大嶋 充
- 【岐阜県】 発達障がい児の困り感に寄り添う支援
－かかわり合いからはじまる－
岐阜県郡上市立白鳥小学校 校長 金古のり子
- 【岐阜県】 よりよい人間関係をはぐくみ、共感と和らぎのある学習集団づくりを目指す特別活動の推進
岐阜県羽島市立中央中学校 校長 二村 一洋
- 【愛知県】 確かな学力の基盤となる言語力の育成
－豊かな言語体験活動を通して－
愛知県豊明市立栄小学校 校長 新海 弘康
- 【愛知県】 学び合いの中で、子どもの考えを深める授業づくり
－理科・生活科・生活単元の学習を通して－
愛知県豊橋市立東田小学校 校長 堀田 道夫
- 【三重県】 「学校経営品質」の考え方を取り入れた教育実践
－統合初年度の学校づくりのために－
三重県大紀町立大紀中学校 校長 片山 嘉人
- 【三重県】 こころのつながりを大切にしたい学校づくりをめざして
－保護者・地域の人々との連携による教育活動の推進－
三重県津市立南立誠小学校 校長 東谷 和久
- 【兵庫県】 自閉症の教育で大切にしたいこと
－一人一人のニーズと主体性が尊重される教育をめざして－
兵庫県神戸市立青陽西養護学校 校長 芦田 孔孝
- 【兵庫県】 「蓮池ファミリー」と「チーム蓮池」
－学校再生をめざして－
兵庫県神戸市立蓮池小学校 校長 島本 知弘
- 【鳥取県】 新しい時代の道徳教育を創造する
－しなやかな心を持ち、いのちを大切にする醇風っ子の育成－
鳥取県鳥取市立醇風小学校 校長 浜橋 博
- 【島根県】 学校組織マネジメント機能の活性化による「豊かな心～感じる心」の育成
島根県安来市立伯太中学校 校長 上田 稔枝
- 【島根県】 子どもの育ちの環境を整える「お弁当の日」の実践
－全ての生徒の自立を助け、全ての家庭をもれなく支援することへの挑戦－
島根県雲南市立木次中学校 校長 矢野 英明



- 【山口県】 豊かな心は 確かな学び
－伝え合い、学び合い、高め合うことができる子どもをめざして－
山口県岩国市立装港小学校 校長 林 勉道
- 【香川県】 地域への情報発信
－イルミネーションやかかわら版などを通して－
香川県立多度津高等学校 校長 織田 博
- 【徳島県】 児童の実態と課題を共有し、全校で組織的に取り組む学校改善
－「WILL」を育てる教育を目指して－
徳島県阿波市立大俣小学校 校長 川人 桂子
- 【福岡県】 「行きたい学校」・「帰りたい家庭」・「住みたい地域」をめざして
－福岡中学校コミュニティ・スクール創設への取組－
福岡県福津市立福岡中学校 校長 柴田 幸尚
- 【福岡県】 地域文化の鑑賞による、コミュニケーション能力、創造力の育成を目指して
－連歌教室をとおして－
福岡県立行橋高等学校 校長 満江 寛俊
- 【宮崎県】 学校経営の中核としての授業力向上の研究
－子どもを「育てる」ことのできる教師を目指して－
宮崎県日南市立飫肥小学校 校長 鈴木 健二
- 【宮崎県】 子どもが自ら学び、「生きる力」を育む小中一貫教育の推進
－全教科の学習の基盤となる言語活動の充実を通して－
宮崎県小林市立南小学校 校長 恵利 修二
- 【熊本県】 児童、保護者、教職員が一体となった学力向上の取組
－「組織力」を生かした校内研究の基盤づくりとその実践－
熊本県荒尾市立荒尾第一小学校 校長 太田 恭司
- 【佐賀県】 「確かな学力」を育む国語科学習
－学力の基礎をつくり、自分の考えを伝え合う指導をとおして－
佐賀県鹿島市立鹿島小学校 校長 小柳 政文
- 【佐賀県】 地域の学校として地域と共に育つ学校づくり
－みんな（子ども、教師、保護者、地域の方）が元気になることを目指して－
佐賀県神埼市立千代田西部小学校 校長 古賀 正道
- 【長崎県】 小中高一貫教育における学力向上への取組
－コミュニケーション力の育成と家庭学習の習慣化を通して－
長崎県佐世保市立宇久小学校 校長 古川久美子
- 【沖縄県】 環境緑化活動を通じた「心の教育」実践
－平成21年度全日本学校関係緑化コンクール『準特選』受賞より－
沖縄県立北中城高等学校 校長 城間 冠二

◎個人部門

◆最優秀賞

- 【香川県】 地域を知り、誇りと愛情を持つ子どもをめざして
～地域素材「満濃池」の教材化を通して～
香川県まんのう町立長炭小学校 教諭 川田 真司

◆優秀賞

- 【鹿児島県】 科学的な思考力・判断力・表現力を育む指導のあり方
～理科学習における「言語活動の充実」を目指して～
鹿児島県薩摩川内市立永利小学校 教諭 米満 康弘

- 【岡山県】 社会的思考力を育てる社会科授業の実践的研究
～6年社会科「あなたは未来の裁判員！」を例に～
岡山県津山市教育委員会学校教育課 指導主査 高岡 昌司

◆優良賞

- 【高知県】 地域と共に教材開発「生きる力」を育む教育活動
～坂本龍馬の生き方に学ぶ～
高知県高知市立昭和小学校 教諭 小川 晶子

- 【徳島県】 特別支援教育における「キャリア教育」の実践的研究
～特別支援学級における「『ありがとう』株式会社」の活動を通して～
徳島県鳴門市林崎小学校 教諭 楠 茂宣

- 【高知県】 実生活に「数学を活用する力」を育む数学指導法
～観光ガイドを兼ねた問題集「高知☉数学旅日記」作成の取り組み～
高知県立高岡高等学校 教諭 島田 佳幸

◆奨励賞

- 【青森県】 今も大人になってもずっと健康に!!
～「健康貯金」で生活習慣の確立を目指して～
青森県八戸市立島守小学校 養護教諭 田中 亜紀

- 【青森県】 薬物乱用防止教育への提言
～薬物乱用防止教育の授業プランと乱用防止に向けての取り組み～
青森県立むつ工業高等学校 教諭 南澤 英夫

- 【秋田県】 地域の素材・人材を活用し、社会的思考力・判断力の向上をめざした社会科学習
秋田県南秋田郡五城目町立大川小学校 教諭 小玉 薫

- 【岩手県】 基礎的・基本的な知識・技能を「習得・活用・探究」する国語科指導の実践
岩手県盛岡市立城南小学校 教諭 後藤 良子

- 【宮城県】 火が消えたのは二酸化炭素のせいではない
～6年理科「ものの燃え方と空気」の学習～
宮城県黒川郡富谷町立富ヶ丘小学校 教諭 加藤 幸男



- 【宮城県】 病弱特別支援学校（前任校）における新学習指導要領に対応した中学国語の指導
－ I C Tを活用した古典の指導を中心に－
宮城県立聴覚支援学校 教諭 及川 吉文
- 【福島県】 若い教師よ、常にプロ意識を持ち、地域史の研究者となれ！
－自ら学ぶことの大切さを学ぶ歴史新聞づくり－
福島県立あさか開成高等学校 教諭 庄司 一幸
- 【栃木県】 理科授業の視点を取り入れた学級活動の在り方の研究
栃木県小山市立桑中学校 教諭 佐山 宏章
教諭 早川 俊夫
- 【栃木県】 「ドラマ」を通して「コミュニケーション力」を育む
栃木県日光市立日光小学校 教諭 石川 創未
- 【埼玉県】 魅力的な地域教材の開発・効果的な活用を通して、児童の主体的な学びを生み出す
－秩父地区社会科教育研究会の取組と小学校4年「郷土に伝わる人々の願いやくらし」の実践を通して－
埼玉県秩父市立吉田小学校 教諭 古林 学
- 【埼玉県】 積極的な体験活動を取り入れた中学部段階のキャリア教育
－実際の体験から始まるキャリア教育－
埼玉大学教育学部附属特別支援学校 教諭 島宗 徹
- 【長野県】 明るくにぎやかで多くの人たちが集まる駅周辺を夢見て
－地域の人たちとかかわり合いながら駅周辺の活性化に取り組んだ夏組の子どもたち－
長野県上伊那郡箕輪町立箕輪中部小学校 教諭 浦野 孝文
- 【東京都】 地域研究発表会を核として、基礎学力と自ら学ぶ力の育成する取り組み
東京都大島町立第二中学校研究グループ 代表主任教諭 伊藤 暢博
- 【東京都】 キャリア教育の視点を取り入れた適応指導教室における指導の改革
－不登校生徒の社会的自立を目指して－
東京都墨田区教育委員会適応指導教室ステップ学級 教諭・教育相談員 林 千恵子
- 【福井県】 「ノーテレビ・ノーゲーム」の取り組みから見えてきたもの
福井県吉田郡永平寺町吉野小学校 養護教諭 笠川 圭子
- 【滋賀県】 整数問題の研究
滋賀県立安曇川高等学校 教諭 齊藤 譲
- 【滋賀県】 特別な支援を要する児童を中心とした支え育ち合う集団づくりのために
－特別支援教育の手法を生かした学級指導・学級経営を通して－
滋賀県彦根市立稲枝東小学校 教頭 中村 佳弘
- 【京都府】 退学生徒0を目指す生徒指導の実践
－学級担任としての3年間の取組を通して－
京都府立城陽養護学校 教諭 山本 大助
- 【京都府】 通常の学級における教育的支援
－つまづきを理解し授業改善することによる、クラス全体への相乗効果－
京都府城陽市立古川小学校 教諭 森脇 正博



- 【大阪府】 気持ちを見つめて言葉にしよう
－人と関わり、人と繋がる力を育む国語科学習指導の工夫－
大阪府大阪市立九条南小学校 教諭 山本知恵美
- 【大阪府】 数学を使ってクラスの良いところを主張しよう
－主体的な学びを形成するための統計学習の展開－
大阪教育大学附属池田中学校 教諭 山戸 正啓
- 【奈良県】 言語活動を基盤として、科学的な思考を深める理科学習
－たいま小こん虫図かんの作成・紹介を通して－
奈良県葛城市立當麻小学校 教諭 西川 佳寛
- 【和歌山県】 地域の歴史を素材にしたフィールドワーク学習の取り組み
－報告 第2回附中歴史探訪フィールドワーク ～秀吉の太田城水攻めの遺跡を訪ねて～－
和歌山大学教育学部附属中学校 教諭 山口 康平
- 【鳥取県】 言語を通じた自己形成
－国語の基礎的・基本的な知識・技能の獲得から生きて働く言葉の力へ－
鳥取県鳥取市立逢坂小学校 教諭 岩井 眞保
- 【岡山県】 小学校高学年ボール運動における児童の技能と思考・判断を育成する指導のあり方
－高学年ボール領域ゴール型における『タグラグビー』の実践を通して－
岡山県瀬戸内市立国府小学校 教諭 木村 正徳
- 【広島県】 空間直視力の育成と指導方法の工夫・改善（4）
－空間図形の見方と表現力の育成をめざして－
広島県広島市立祇園中学校 主幹教諭 原田 康宏
- 【広島県】 図画工作科の学力を育てる
－「鑑賞」の授業を通して－
広島県広島市立落合東小学校 校長 市川 博登
- 【山口県】 互いの思いを感じ合いながら、つくる喜びや楽しさを味わう図画工作科学習
－表現と鑑賞をつなぐ支援の工夫－
山口大学教育学部附属山口小学校 教諭 小田佐也加
- 【大分県】 校長の基本的姿勢とは何か
－6年間の実践を振り返って－
大分県立臼杵高等学校 校長 飯沼 基司
- 【長崎県】 心に響く道徳教育をめざして
－他の教育活動とのつながりを生かした、道徳の時間の指導を通して－
長崎県佐世保市道徳教育研究グループ 代表 佐世保市立柚木小学校 校長 中原 弘之
- 【沖縄県】 「数学のよさを実感させ、興味・関心を高める学習指導の工夫」
－数学の不思議・美しさを感じさせる指導を通して－
沖縄県浦添市立浦西中学校 教諭 寺澤与聖夫

日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

産山村小中一貫教育の推進

～新教育課程の新たな展開を目指して～

熊本県阿蘇郡産山村立産山中学校

校長 笹原 照明

1 はじめに

本校は、阿蘇郡の東部に位置し、熊本県の東北端、阿蘇外輪より大分県久住山麓に拓けた台地で、北東に九重の連山を仰ぎ、東西になびく阿蘇の噴煙を望む場所にある。東は、大分県竹田市に接し、北は阿蘇郡南小国町と九州横断道路で境をなし、南及び西は、阿蘇市に接している。大野川上流、山鹿川に沿った一帯に開け、その周辺は山林及び牧草地帯が広がる農村地域であり、校舎の周りを農業用水路が巡る自然豊かな環境の中にある、4学級43名（内、特別支援学級1名）の学校である。

産山村は、深刻な高齢化率の上昇と人口減少という問題を抱えており、これまで「新たな魅力ある村づくりを目指す」という地域自立促進の基本方針を策定し、「人が地域を創る」という視点をもって教育改革に努めてきた。昭和63年に始まったタイ国カセサート大学附属中学校と本校との国際交流「ヒゴタイ交流」は今年で23年目になる。また平成16年度からは県下に先駆け2学期制を導入し、平成19年には産山小学校が新設されるとともに校舎が中学校に併設された。同時に平成19・20年度には構造改革特区（小中一貫教育特区）認定を受け、そして平成21年度からは文部科学省認定教育課程特例校として産山小学校とともに小中一貫教育を推進している。

2 主題設定の理由

(1) 教育の動向から

学校教育法21条で「小学校と中学校でそれぞれ定められていた教育の目標が、9年間を通じた義務教育の目標」として新しく明記された。また同法30条2項において、「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と学習の在り方、学力観が明確に位置づけられた。更に平成20年3月には小・中学校の新しい学習指導要領が告示され、今まさに戦後最大の教育改革が大きいうねりとなって進んでいる。

(2) 産山村教育改革のねらいから

「産山で教育を受けて良かった」という実感を子どもたちがもち、子どもたちが将来、村の豊かな発展に寄与し、あるいは広く国際社会で活躍する有為な人材に育てて欲しいという願いのもと、次の3つの柱で2学期制、小中一貫教育を推進してきた。

- ① 産山村の子どもたちに確かな学力をつける。
- ② 産山を知り、産山を愛する子どもを育てる。
- ③ 小学校と中学校の段差を低くして、教育効果を上げる。

国の教育改革の動向を見据え、産山村の教育改革のキーワードを「ローカルオプティマム（自分の村、学校にとってもっともふさわしい教育効果を上げること）」、「中1ギャップの解消」として、「小中一貫カリキュラムの研究」「小中一貫学習・評価システムの研究」「連携システムの研究」の三点を柱組みとした新たな教育の展開をスタートさせた。

3 研究の仮説

【仮説1】小中一貫カリキュラムについて

新教育課程の趣旨を踏まえ、特色ある教育課程の編成を行えば、スムーズな学びの連続性が図られるであろう。

【仮説2】小中一貫学習・評価システムについて

産山型学習・評価システムによる指導と評価の一体化を行えば、思考力・表現力等の育成が図られるであろう。

【仮説3】小中連携システムについて

小中学校の人的・物的な連携を行えば、細やかな指導や支援が図られるであろう。

4 研究の実際

【仮説1：小中一貫カリキュラムについて】

(1) 5-2-2制の導入

前期（小1～小5）、中期（小6～中1）、後期（中2～中3）の区分による小中の接続をスムーズにし、中1ギャップの解消を図った。とりわけ中期に重点を置き、小中連携の要とした。

(2) 特色ある教育課程の編成（教育課程特例校）

① ヒゴタイイングリッシュ科の創設

英語活動を通して会話や外国文化に対する理解を深めるとともに、人との触れあいを大切にしながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をねらいとする学習である。

ア 英会話科

小学校1年生から中学3年生までの9年間を教科として創設。

イ 英語科

小学校6年生に「中学校」の英語科を先取りして教科として位置づけた。（週1時間）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
英会話	20	20	35	35	35	35	35	35	35
英語						35	105	105	105

② うぶやま学

小学校1年生から中学校3年生までの9年間、地域との連携や地域人材の活用を通して、体験的に産山を学び、自己の生き方を考える学習である。小中学校の枠を越えた義務教育9年間の「学びの連続性」を確保するために「ねらいと系統」を明確にした。

学 年 1年～2年

テーマ うぶやまで学ぶ：うぶやま体験

ねらい 地域や自然との関わりを通して、産山を知り、産山に愛着を持つことができる

活 動 産山村探検 生き物を飼う

学 年 3年～5年

テーマ うぶやまを学ぶ：うぶやまの人と暮らし

ねらい 産山の自然環境の素晴らしさや人びとの産山に対する思いに気づくことを通して、自然と暮らしとの繋がりについて考え、産山を大切にしようとする心情を培うことができる

活 動 玉来川調査 草原学習

学 年 6年～7年

テーマ うぶやまに学ぶ：うぶやまの生き方

ねらい 人と人との温かい交流を通して、人としての生き方の基礎を培うとともにうぶやまを大切にしようとする心情を培うことができる

活 動 ほっと館訪問 介護福祉体験 産山の福祉

学 年 8年～9年

テーマ うぶやまは学ぶ：うぶやまと私たちの未来

ねらい 地域の仕事や勤労の大切さを学び、自分や村の未来像を描くことを通して、うぶやまに誇りを持ち、自己の生き方を考えることのできる力を育てる

活 動 職場体験 産山と沖繩について学習 子ども議会 進路劇

③ チャレンジ学習

国語、算数・数学で、子どもが自らの目標（級）を設定し、基礎的基本的な内容の習熟や発展的な学

習を意図した学習である。黙学を基本とし、分からないことがあれば、辞書で調べたり、隣の上級生に聞いたり、互いに教えあいながら取り組む。うぶやま検定（年3回）を行い、合格者には合格証を渡し、達成感が得られるようにした。また、希望者は学外検定（漢字検定・算数・数学検定）に取り組んでいる。村からの補助もあり、挑戦しやすくなっている。



英会話の授業



子ども議会(うぶやま学)



チャレンジ学習

(3) 日課表の工夫

小学校の休み時間を15分にすることで中学校から小学校6年生への英語、体育、美術、音楽の授業の教科担任制が実現できるようになるとともに、その他、連絡、打ち合わせ等の連携がしやすくなった。

【仮説2：小中一貫学習・評価システムについて】

(1) 産山型学習

中1ギャップの解消を図るためには、小中学校の段差を低くする必要がある。特に授業において、9年間を見通した生きる力をはぐくむ「確かな学力」を育てるために、小中9年間を通して統一的な授業過程（産山型学習）に取り組んだ。

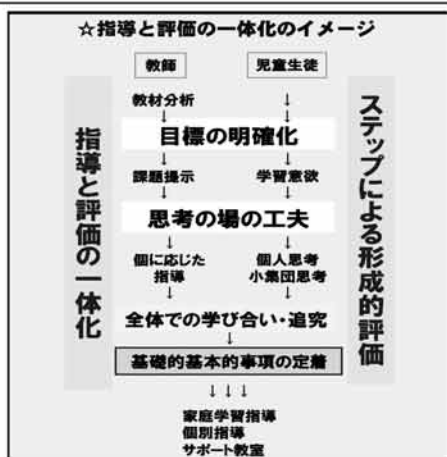
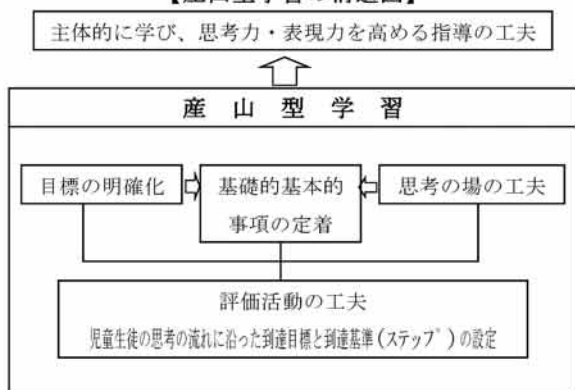
① 産山型学習における指導の3本柱

ア 児童生徒の主体的な学習を促すために課題解決学習を取り入れ、目標の明確化を図る。

イ 思考力、判断力、表現力を養うために、学び合いを共有する思考の場（「書く活動」「話し合い活動」）を設け、相互啓発活動を行う。

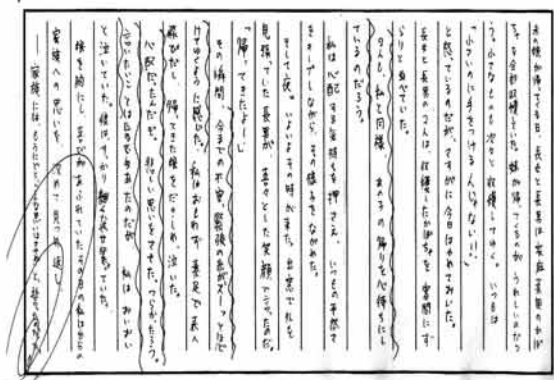
ウ 児童生徒の思考の流れに沿った到達基準を設け、形成的評価を行う。そこで成就感・達成感を持たせ、基礎的基本的事項の定着を図る。

【産山型学習の構造図】



(2) 授業実践の取組 (2年国語 「字のないはがき」)

- 1 本時の目標 「声をあげて泣いた父の心情をとらえることができる。」(読むこと)
- 2 思考の流れに沿った本時のスモールステップ
 - 生徒への課題 泣いた顔を見せたことがなかったが、声をあげて泣いたのはなぜか
 - ステップ 1: 末の娘が帰ったときの父の様子をつかむことができる。(観察発表)
(「この日は何も言わなかった」「はだして表へ」「やせた妹の肩を抱き」に気づく)
 - ステップ 2: 視点を変えて父の心情を読み取って文章を書くことができる。(シート)
(筆者の視点で書かれた文章を父の視点から書き換える)
 - ステップ 3: 作品を発表し合い、父の心情について自分の考えをまとめることができる(発表・シート)



3 授業を終えて

思考の場として書く活動を取り入れ、父の行動や様子を表した言葉に注目させその時の父の心情を考えさせる。例えば「やせた妹の肩を抱き」「声をあげて泣いた」場面では「娘をこんな目にあわせた。すまないと言いたかった」「心配したんだぞ。悪い思いをさせた。言いたいことはたくさんあったが…」などと書き換えることができた。父の視点で書き換えるという一歩の時間を確保することで個々の支援や評価を確実に行うことができた。

(3) 産山型評価システムについて

児童生徒の学力の状況を把握するため、小中学校では「学校カルテ」「学級カルテ」「個人カルテ」を作成している。また、2学期制に伴い通知表の回数が少なくなり、子どもたちの学習の様子が保護者に伝わらないのではないかと懸念があった。そこで「個人カルテ」は「学習のあゆみ」として小学校では年4回、中学校では年5回、保護者に配布し、きめの細かい評価と保護者への説明責任を果たすよう努めている。

【仮説3：小中連携システムについて】

校舎の併設により、小中連携が一層進み、児童生徒の学習や様々な活動が可能になった。

(1) 人的環境

校長以外の全職員に県教育委員会より兼務辞令の発令を得ており、「知・徳・体」の全ての面で指導の充実が図られている。とりわけ、生徒指導面では小学校との連携が密になり、きめ細かな指導に繋がっている。

① 教科担任制、複数指導体制の導入

ア 教科担任制による指導

6年生の音楽、図画工作、体育、英語、英会話の授業については、中学校の教科担当者が専門的な指導を行っている。

イ 複数指導体制による指導

中期(6年7年)のチャレンジ学習の時間には小中合わせて4名から5名の教師による指導が可能となった。また、英会話科は中学校の英語科担当、小学校担任、ALTの3名で指導している。

② 養護教諭、事務職員の連携

緊急時等は養護教諭2名での対応ができ、適切な救急処置を行うことができる。

学校事務の共同実施に伴う管理・経理事務を円滑に遂行することが容易である。また、小中共同で使用する備品等も計画的に購入し、効果的な予算の執行がなされている。

(2) 物的環境

小中学校の施設を相互に活用することで、施設利用の充実を図っている。特に、メディアセンターと呼ば

れる多目的室は、チャレンジ学習の時間に活用したり、児童生徒の集会活動を行ったりと共同利用の拠点となっている。メディアセンター隣の図書室には、学校司書が配置され、読書推進活動の一翼を担っている。

体育館とプールは重複を避け全学年が交代で使用し、中学校の音楽室・家庭科室・美術室及びパソコン室は、5・6年生も授業で使用している。

(3) コミュニティ・スクールの導入

平成22年3月、学校運営協議会が設立されるとともに、学校支援地域本部事業とタイアップし、「我ら学校の応援隊」というコンセプトのもと、地域住民による産山小中コミュニティが立ち上げられた。

① 交流コミュニティー（広げ隊）

国際社会の一員としての自覚と文化や伝統を深く学ぶ場であるヒゴタイ交流などの支援を行う。

② 体験コミュニティー（暮らし隊）

福祉や進路に関心を持ち、自分たちの暮らしや生き方を考えるためのジュニアヘルパー活動や福祉体験、職場体験や農業体験の支援を行う。

③ 文化・安全コミュニティー（伝え隊）

ヒゴタイ太鼓や浦安の舞などの伝統文化を守るとともに伝えていく心を養ったり、産山村の安全を守る「少年消防隊」の支援を行う。

④ 学習支援コミュニティー（学び隊）

環境学習や食育や地域学習の支援を行ったり、読書に親しむ態度を育てるために読み聞かせを行う。

5 研究の成果

(1) 仮説1：小中一貫教育カリキュラム

- 「学びの連続性」をめざした教育カリキュラムの成果が、「児童生徒の可能性（夢）の実現」という形であらわれてきた。〔英語暗唱大会県大会3位入賞、少年の主張コンクール全国大会2年連続出場（内閣総理大臣賞、優秀賞受賞）〕
- 特色ある教育課程（ヒゴタイイングリッシュ・うぶやま学・チャレンジ学習）では小中連携を生かした効果的な学習が展開された。特にチャレンジ学習に有用感を感じている児童生徒は90%を越えている。

H21年度卒業生(24名)の学外検定級取得者内訳	
漢検	準2級4名 3級3名 5級1名 7級1名
数検	3級6名 4級1名 5級1名 6級1名
英検	3級5名 4級7名 5級9名

(2) 仮説2：産山型学習・評価システム

- 産山型学習では、個人思考の場として「書く活動」

等を取り入れたことにより、じっくり学ぶ姿勢が定着してきた。

- 授業中のスモールステップによる形成的評価が、児童生徒の成就感・達成感につながるとともに、教師の授業づくりの視点として効果的に働いた。特に教師の評価が明確になり、児童生徒の踏みに的確な指導ができ、基礎基本の定着が図られてきた。全国学力調査でも、国語・数学いずれもA「知識」B「活用」とともに県及び全国平均を上回った。なお下記の資料は現3年生の標準学力検査の経年比較である。

	1年次(NRT)	2年次(CRT)	3年次(CRT)	
	偏差値	全国正答率との比較	全国正答率との比較	換算偏差値
国語	53.9	+7.6	+6.7	52.4
社会	56.0	+3.6	+5.3	52.3
数学	54.1	+6.2	-0.9	50.4
理科	54.1	+16.2	+9.0	53.8
英語		+4.7	-4.3	51.9

※H21年度(2年次)より個に応じた指導に重点を置くため、CRT検査に変更した。(3年次からは換算偏差値も出るようになった)

(3) 仮説3：小中連携システム

- 人的環境・物的環境ともに、日常的な連携の積み重ねにより、よりスムーズな連携になってきた。
- 人的環境では学校支援地域本部との連携や、昨年度配置された栄養教諭を活用した連携など、新たな取組が生まれてきた。

6 今後の課題

- 思考力・表現力等の育成に向けては、9年間のスパンでの適切な実態把握とともに、「学び方」や「家庭学習のあり方」、言語活動に関する取組など、具体的な実践レベルでの取組に目を向け、小中の段差をなくす小中一貫教育を推進したい。
- 小中連携システムでは、「ICT活用における有効な連携システム」と、「学校支援地域本部事業を含めたコミュニティ・スクールの推進」が今後の課題である。

7 おわりに

産山村教育改革の根底にあるのは「子どもたちに確かな学力をつけたい。産山を知り、産山を愛する子どもたちを育てたい。小中の段差を低くし、教育効果を上げたい。そして、産山で教育を受けて良かったという実感を持ち、将来有為な人材に育てて欲しい。」という願いである。願いを胸に刻み、今後とも産山ならではの小中一貫教育を目指していかねばならない。

地域を知り、誇りと愛情を持つ子どもをめざして

～地域素材「満濃池」の教材化を通して～

香川県まんのう町立長炭小学校

教諭 川田 真司

1 はじめに

まんのう町には、約1300年前に築かれた日本最大の灌漑用のため池「満濃池」がある。空海が改修したことも知られ、度重なる決壊と改修を繰り返し、140年前にできた樋門は国の登録有形文化財に指定されている。また、毎年6月中旬に行われるゆる抜きと金倉川のせせらぎは、環境省の「日本の音風景100選」に選定されている。このように、満濃池は、まんのう町の歴史を語る貴重な文化財であるとともに、ホテルをはじめとした動植物の生息地でもあり、町内外の人たちの生活に欠かせない水を蓄える資源を有するなど「まんのう町のシンボル」となっている。

第3学年及び第4学年の社会科では、自分たちの住んでいる地域の社会生活を総合的に理解できるようにするとともに、地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにすることをねらいとしている。そのための内容の1つに「オ地域の古い道具、文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人の具体的事例」を取り上げるようになっている。

しかし、これまでの本校の取り組みを振り返ってみると、満濃池から約2kmの距離にありながら、開発単元では、教科書の内容（他県の開発の事例）を学習したり、県版のワークブック（社会の基礎）で満濃池について簡単に学習したりすることが多く、貴重な文化財が身近にありながら十分活用できていなかった。

なぜならば、社会科を専門とする教員が本校にいなかったのみならず、豊富にある資料が、活用できるように整理されていなかったことも大きな要因である。

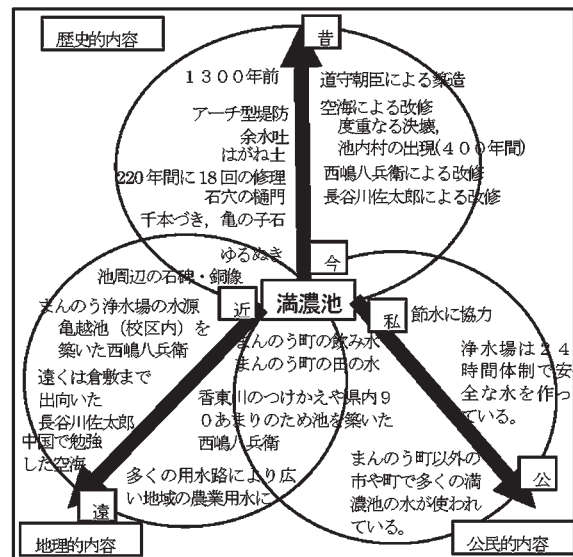
そこで、「満濃池」という身近で、学習する意味のある素材を教材として開発する必要があると考えた。

2 研究の内容と方法

「水はどこから（飲料水確保）」「地域の文化財」「地域の開発」3つの単元で「満濃池」を中心にして扱える。飲料水確保の単元は公民的内容、地域の開発の単元は歴史的内容と単純に見られがちであるが、これまでの固定化した見方を打破したいと考え、研究を進めた。

本研究では、まず、学習内容を中心に図1のように「地理（空間）的内容」「歴史（時間）的内容」「公民的内容」と多様な視点から分析し、よりよい教材を選定していくことにした。

図1 地理的・歴史的・公民的内容の分析



そして、図1であげられた内容から、表1のように「事実的認識」「関係的認識」「概念的認識」に分析・整理し、とらえさせるべき事実は何か、事実をどのように結びつけて考えを高めていくかという学びを深める学習指導の展開に留意した。

表1 事実的認識、関係的認識、概念的認識の分析

事実的認識	<ul style="list-style-type: none"> まんのう浄水場は満濃池から1日2,400tの水を取り入れている。 満濃池から金倉川が北に向かって2市2町に水が流れている。 ゆるぬきで1日30万t放水している。 ゆるぬきの水で田植えをはじめます。 まんのう町以外に2市2町が満濃池の水を利用している。 多くの用水路がある。
関係的認識	<ul style="list-style-type: none"> 丸亀市は、まんのう町の約7倍に相当する満濃池の水を水道用水で使っている。 満濃池は、水道用水よりも多くの農業用水を金倉川や用水路を通して広い範囲に水を供給している。

概念的認識	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの町を流れる水は、他の町にも流れ、多くの人に「命の水」として活用されている。 ・水の確保は、組織的、計画的に協力して行われている。
-------	---

表1のような分析を基に、どのような教材や学習活動を位置付ければ、事実的認識が定着し、関係の認識へ高まり、さらに概念的認識へと高まっていくか考えて教材・授業開発に取り組むことにした。

教材開発では、以下の点を考慮すれば効果的な学習ができると考えた。

- ① 本物との出会いを大切にする。
- ② 多様なメディアを効果的に活用する。
- ③ 子どもの既存概念とのズレから興味・関心を高めやすい教材を発掘する。
- ④ 教材の精選と提示の配列を工夫する。

3 研究の実際

(1) 「水はどこから」

本単元での満濃池に関する学習のポイントは、先の表1のとおりである。

まず、学校で使用している水をきれいにしているまんのう浄水場へ見学に行き、満濃池から1日2,400tの水を取り入れているという事実的認識をした。その際、「2,400t=学校のプール8杯分」と身近なものや子どもたちの知っているものに置き換えたことで、具体的なイメージをもった認識ができた。

① ゆるぬきの見学

写真1



写真2



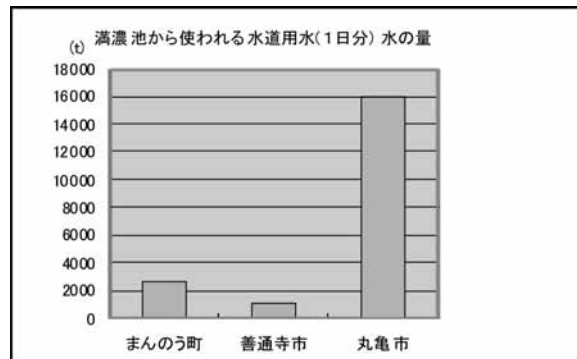
6月中旬に行われる「ゆるぬき」(写真1)の瞬間を見学に行き、迫力ある放流の様子を視覚だけでなく、響き渡る重低音を聴覚や身体で、流れ出した瞬間の池の水においを嗅覚で、一瞬で水がいっぱいになった樋門周辺の涼しさを肌でとまさに五感を使って学習することができた。また、ゆるぬき当日しか開放されていない取水塔の内部(写真2)に実際入って見ることもできた。

② グラフを使って、疑問や驚きを

その後、満濃池の水がまんのう町以外の市町で意外と多く使われているという事実を「満濃池から送られ

る水道用水量」(図2)を通して認識した。子どもたちは、満濃池のない丸亀市が、まんのう町の約7倍の水を使っていることに驚きと疑問をもった。そこで、この事実についてどう思うか意見交換をさせた。

図2



その後、ゆるぬきの水の流れから水の使われ方を考える活動の際、長いテープ(写真3)を使って、ゆるぬき1日分の放水量30万tをまんのう町の水道用水量と視覚で実感できるように比較する活動を取り入れた。

写真3



続いて、「満濃池の水をまんのう町の水道だけに使った場合6,400日使えるが、他の市町に水道用水・農業用水として供給した場合、2か月で空っぽになってしまう。まんのう町にある水だが、他の市町に供給すべきかどうか。」を話し合う場面では、様々な事実をいろいろな角度で見つめ、細かく分析したり、関係づけたりしていく中で、自分なりの理由や根拠をもって考えを交流することができた。

(2) 「きょう土につたわるねがい」

本単元での学習のポイントは、表2のとおりである。

表2

事 実 的 認 識	<ul style="list-style-type: none"> ・満濃池のまわりに銅像や石碑がある。 ・821年、空海が修理する。 ・1631年、西嶋八兵衛が修理する。 ・木製の底樋 ・はがね土 ・1870年、長谷川佐太郎らが修理する。 ・底樋の代わりに岩山にトンネルを掘る。 ・千本づき、亀の子石
-----------------------	--

関係的認識	<ul style="list-style-type: none"> • アーチ型堤防は、中国で勉強した空海が取り入れたもので、水に対する力が強く後の堤防でも取り入れられている。 • 土を盛るだけでは、水で削られてしまうので西嶋八兵衛ははがね入りの堤防にし、崩れにくくした。 • 底樋が腐ってくるので取り換える工事を十数年に一度行ったので、220年間壊れることがなかった。 • 底樋を取り換える工事の手間がこれからないよう、長谷川佐太郎は岩山にトンネルを掘りそれを底樋の代わりにした。 • 土を運ぶのもっこ、土を固めるのに杵亀の子石などを使い、人力による手作業で大変だった。
概念的認識	<ul style="list-style-type: none"> • 満濃池は、空海、西嶋八兵衛、長谷川佐太郎をはじめ多くの先人が満濃池を直そうという願い、苦労や努力、知恵、工夫を積み重ね、思いを受け継ぎながらつくり上げたものである。 • 私たちの今の生活の向上は地域の先人たちの様々な工夫や苦心の上に成り立っている。

① 満濃池の周辺に残る遺物の見学

まず、満濃池の開発の歴史に関心をもたせるため、満濃池に出向き、池周辺に残る石碑・銅像・遺跡等の見学させたところ、子どもたちは、空海、西嶋八兵衛、長谷川佐太郎などの人物が関わっていることを見つけた。名前を聞いた程度も含めて空海について知っている子どもが多い反面、西嶋八兵衛、長谷川佐太郎についてはほとんど知られていない状態だった。「長谷川佐太郎の石碑があるけど誰？」という反応が出たり、満濃池の開発の年表を調べたときも「西嶋八兵衛、長谷川佐太郎も修理に関わっているのにどうして空海だけが有名なの？」という疑問が子どもたちから出された。

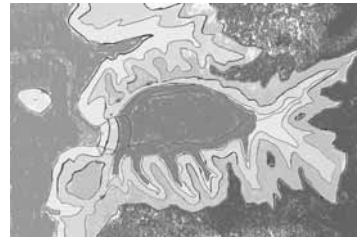
このことに留意し、比較的知られている空海について最初に取り上げ、その学習を土台に西嶋八兵衛、長谷川佐太郎の開発の様子についてスポットを当て、空海と比較しながら学習するのが適当であると考えた。

② 空海と西嶋八兵衛を比較して考える

空海について詳しく調べた後、西嶋八兵衛について詳しく調べる前に、満濃池の開発の年表を改めて見直した。一般的に有名な空海の修理の後と児童にはなじみの薄かった西嶋八兵衛の修理の後で、修理完成から池が壊れるまでの期間が大幅に違っていることに注目させ、何か秘密があるのではないかと気づかせた。

次に、既習の空海の作った堤防の地形図(図3)を提示し、西嶋八兵衛の作った堤防を予想させた。

図3 空海の作った堤防の地形図



その後、実際に西嶋八兵衛が作った堤防の地形図を提示し、堤防の形や大きさは空海の時とほとんど変わっていないことに気づかせた。

外見では、ほとんど同じであるのに、西嶋八兵衛の堤防が長い間壊れなかったことに興味・関心をもたせ調べ活動を行った。

③ 立体模型を活用して

西嶋八兵衛は、堤防の内部に「はがね土」とよばれる粘土を入れて、水圧で壊れたり水などで削られないようにしたことが調べて分かった。しかし、副読本の平面図では、はがね土の意味や効果が今ひとつ子どもには理解しにくい傾向があった。そこで、2色の粘土ではがね土入りの立体の堤防模型(写真4)を実際に作り、その断面を見せることではがね土の役割が理解しやすくなると考えた。

写真4 立体の堤防模型



その結果、子どもたちは、立体の堤防模型を興味深く観察し、はがね土の役割について認識を深めることができた。

④ 実物に触れる機会の重視

近年、写真・動画等様々なメディア教材が進歩し、実物がそこになくても疑似体験ができるようになってきている。しかし、実物に触れさせる機会がとれる場合は、できるだけそれを近くで見せたり触らせたりしたいと考えている。

堤防の土を固める亀の子石、きね等は、町の副読本に写真があるが、写真だけでは、実際の大きさ、重さを想像することが難しい。亀の子石の重さが35kg以上と知っていても、バーチャルの世界では作業での大変さが実感しにくい。

そこで、県の「ため池出前授業」(写真5)を活用した。県の土地政策課の方が、杵や亀の子石を学校に

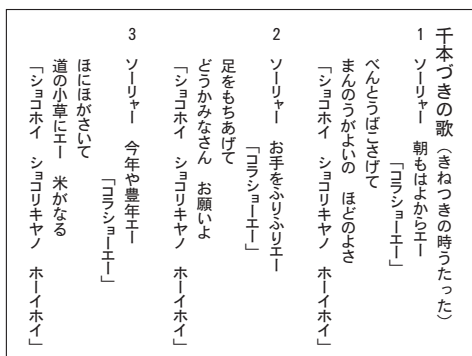
持ってきてくれ、子どもたち一人一人がそれらに触れたり、先人の作業の疑似体験をしたりと生きた体験ができた。

写真5 ため池出前授業



また、杵で堤防を踏み固める作業で先人が口ずさんでいた「千本づきの歌」(図4)を取り扱った。歌詞だけでも先人の思い等が想像できるが、先人の思いや作業の様子が更によくイメージできるように、約80年前の堤防のかさ上げ工事に参加した人が歌った肉声を録音したCDを用意した。このCDは、昔からの満濃池周辺の変遷を調べている町内の文化財専門委員の方から借りて授業に活用した。

図4



録音当時80歳を超える人とは思えない、張りのある力づよい歌声に、子どもたちは耳を澄まして先人のパワーを実感したようだ。

⑤ 子どもの視点に立った読み物資料の作成

先人の働きを読み物資料を使って読み取らせていくことも重要なことである。空海、西嶋八兵衛については、子ども向けの読み物資料が多くあるが、長谷川佐太郎については、大人向けの難しい言葉づかいの資料がほとんどで、唯一町の副読本にある資料に頼るくらいしかなかった。その副読本の資料も、授業で活用しにくい状態だった。

そこで、副読本の資料をベースに、大人向けの様々な資料を子ども向けの文章に修正して補足していった。まず、読み物資料と年表(写真6)を併用して学習ができるように、長谷川佐太郎の業績が、何歳の時のこ

とかを資料に入れた。また、ポイントとなる業績ごとに、章立てやフォントを太くするなどして、子どもたちが文章の読み取りをしやすくなる工夫をした。

写真6



4 成果と課題

(1) 成果

- 4年生で地域の身近な素材「満濃池」を核にして、飲料水確保の単元、地域の文化財や開発の単元を流していくことは、自分たちの地域に誇りと愛着をもたせることになり、社会科がねらう我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てるうえで重要な基礎となった。
- 地理的内容、歴史的内容、公民的内容の分析から、「満濃池」という教材を多様な視点で考え、教材のもつ新たな可能性を見つけることができました。この分析を通して教材を見る教師の目を広げることができた。
- 事実的認識、関係的認識、概念的認識の分析から、初期に資料などから習得させること、交流などで深めることのできることで、ノートにまとめたり活用したりする内容などを教師自身明確に意識して単元構成ができた。
- 実物、メディア教材、文章資料、年表等を組み合わせることにより、子どもが具体的にイメージして考えることができる学習につながった。

(2) 課題

- 教材研究を深めれば深めるほど、子どもたちに教えたいたってほしいことがらが増えて資料があふれかえってくる。しかし、授業時間は限られている。どれも捨てがたい宝のような素材を、精選・整理して、時間内に概念的認識のレベルに高めていく研究を今後も継続していきたい。
- 県の学習状況調査の結果から、文章資料(国語・算数・理科)の読み取りの力が、本校の子どもたちは十分でない。社会科においても同様の傾向が見られる。全教科にわたって個に応じた支援をさらに充実させ、国語力の向上を図っていきたい。

地域と学校を結ぶ公立学校運営の実践的研究

— 地域を学校の宝に、そして学校を地域の宝に —

奈良県北葛城郡王寺町立王寺北小学校

校長 加藤 守弘

1 はじめに

本校のある王寺町は、奈良県の北西部、奈良県と大阪府の県境に位置し、大阪市内や県内への通勤・通学に便利な交通の要所として奈良県の西の玄関口ともいわれている。学校は町の北東、舟戸山の高台にあり、JR王寺駅周辺の街並みや大和川が一望でき、静かで恵まれた環境にあるといえる。昭和51年（1976年）に開校し、今年で35年目を迎える。児童数は352名、15学級、教職員は非常勤職員なども含めて27名である。

校区内には大きな商業施設があり、通勤・通学に便利なこともあってマンションなどの集合住宅が多い。また駅周辺には大手進学塾や学習塾がいくつもあり、近年特に中学受験熱が高まりを見せる中、学校の学習指導や学級経営にもその影響が見え隠れしている。また、共働き夫婦の子どもたちが多く、学校が終わると学童保育に通う児童も年々増えている。

2 主題設定の理由

本校は、平成20年度より文部科学省の学校支援地域本部事業の委託を受け、本年度最終年度の3年目を迎えている。この事業は学校と地域の連携体制を整え、地域全体で学校教育を支援していく体制づくりをその目的としている。また本校は「北小PLAN22」（平成20年度から3年間の中期目標）（下図）のもと、この学校支援地域本部事業により地域や保護者との連携を図り、様々な取組を実践し、地域に誇れる学校づくりをめざしている。



とかく学校教育に対する世間の風当たりの強さばかりを感じる昨今、学校現場に疲労や焦燥の種は尽きず、憂慮すべき状況が見られる。そのような中で、公立学校の価値ある「含み資産」ともいふべき「地域」を教育的資源として有効活用していくことが、多くの課題や問題の克服と解決につながっていくと考えている。

そこで、地域人材を活用した特色ある学校運営を目指して実践研究してきた本校の取組をふまえて、「地域」をキーワードとする学校運営の成果と課題を検討し、これからの公立学校の在り方や地域との関係の重要性を考えていきたい。

3 実践研究の仮説

「地域」と「学校」の相互有効活用的な信頼関係こそが、これからの公立学校運営の基礎になると考え、以下の仮説をもとに実践研究した。

〈仮説1〉「地域」を公立学校の教育的資源とした特色ある教育活動を展開することで、公立学校は、信頼され期待される地域の学校となり得る。

〈仮説2〉地域人材を活用した授業や活動を展開していくことで、学習環境が整備され、児童の学習意欲や学習効果が高まる。

4 実践研究の概要

「仮説1：特色ある教育活動の展開に向けて」

(1) 児童の理科学力の向上を目指す取組

①「北小科学教室」の活動

本校では平成19年度より児童の理科学力の向上を目指した取組の1つとして「北小科学教室」を実施している。校区在住の大学や高校の先生、保護者、また企業などで研究・技術開発に携わっていた方々などがボランティアとしてコーディネーターや講師となり、関係機関と連携しながら、ほぼ毎月1回、4年生以上の児童を対象に科学工作や科学に関する実験や体験などを行っている。

- 平成19年度 科学教室
「ものづくり体験教室」(発明協会との連携) など全4回実施 →
- 平成20年度 科学教室
「ロボットづくりにチャレンジ」(JSTのSPP事業で奈良高専との連携) など全13回実施 →
- 平成21年度 科学教室
「望遠鏡づくり」と「天体観望会」(大阪市立科学館との連携) など → 全11回実施
- 平成22年度 科学教室
「空気とあそぼうーウォークアロンググライダーの製作ー」→ (奈良女子大学との連携) など4回実施 全11回実施予定



②「ガリレオクラブ」の活動

平成21年度からは「北小科学教室」の内容をさらに充実発展させた活動を目指して「ガリレオクラブ」が発足した。本校の3年生～6年生児童の希望者を対象として、現在27名の児童が所属している。このクラブは地域の科学ボランティアが運営の中心となり、毎月第2、第4水曜日の午後5時から7時まで本校理科室において科学実験や観察を中心に (ガリレオクラブの活動) 毎回様々なテーマで活動している。(H21年度9回実施、H22年度19回予定)



③教員の理科指導力の向上を目指して

本校の「北小PLAN22」ー平成20年度から3年間の中期目標ーの大きな柱の1つは「授業力の向上」である。その目標達成のため本校では平成20年度より特に理科を中心とした授業研究と校内研修に取り組んでいる。ここでも地域人材を生かして、校区在住で本校の科学ボランティアでもあり、また長年にわたり理科教育研究と教員養成にあたってこられた大学名誉教授の方に研修の指導をお願いしている。各学年の理科と生活科の研究授業とそれに伴う教材研究や授業検討会、また授業後の反省会などの一連の研修をトータルに指導していただき、いつでも学校に来てもらって丁寧に指導助言していただけることもあって、充実した授業研究や教材研究ができ、教員の理科指導力の向上につながっている。

「仮説2：学習意欲や学習効果の向上に向けて」

(2) 地域人材を活用した授業や活動の様子

本校の学校支援ボランティアは「学習指導サポート」「図書室運営サポート」「科学教室運営サポート」「花と緑の環境整備と登校付添」の4部門で組織されている。平成20年度に王寺町の全戸(校区内外の約9,000世帯)に本校の学校支援ボランティア募集チラシを配布し、また関係機関や団体にも支援を要請した。その後も自治体広報誌でボランティアを募集したり、個々に直接交渉したりして学校を支援していただける地域人材の発掘に努めた。その結果、平成22年度現在本校単独での学校支援ボランティア登録者数は4部門で117名である。

①学習指導のサポート

本校ではほぼ全教科・領域でボランティアによる学習指導のサポートを行っている。平成21年度にボランティアの入った授業時間(コマ)数は全学年で1,361時間になる。その内訳は外国語活動555時間(1～6年生)、算数科225時間、音楽科105時間、家庭科104時間、生活科74時間、国語科(書写)47時間、図工科26時間、社会科22時間、体育科(学習指導サポートの様子)16時間、理科12時間、総合他175時間である。



特に外国語活動では、平成20年度より全学年を対象に、生活科や総合的な学習の時間を利用して年間に各クラス単位で低学年20時間、中学年30時間、高学年34時間実施してきた。その指導に地域在住の英語ボランティア8名がサポートとして入っている。全員が英語指導講師の資格を持つ民間の英会話教室の現役講師であり、外国生活を経験している方々で指導経験も豊富であるため、平成23年度からの外国語活動完全実施に向けて本校教員も非常に有益な研修の機会となっている。



また算数科などの教科指導ではボランティアの補助が入ることで指導内容の理解と定着が高まるとともに、児童の基本的な学習習慣の向上にもつながっている。実技系の家庭科・図工科・音楽科などの指導ではボランティアの活躍によって有効な時間活用と指導内容の充実による効果的な授業展開が可能となっている。

②図書室の運営サポートと読み聞かせ活動

平成20年度より本校の図書室運営はボランティアの方々にサポートしてもらっている。「信頼される、生き生きとした、魅力ある図書室」を目指して、図書室環境整備、本の整理や修理と廃棄、貸出補助、町立図書館との連携による図書学校貸出（平成21年度は町立図書館より1,000冊の貸出を受け（図書ボランティアの活動））などに取り組んでいる。活動は月1～2回の通常活動と長期休業中の整理作業などである。読書環境の整備にともない一昨年度からは毎週水曜日の全校一斉朝の読書活動も実施している。



（図書ボランティアの活動）

また本校には「おはなし読み聞かせ隊」という読み聞かせの地域ボランティアグループがあり、図書室の運営サポートの活動とは別に毎月1回、童話、詩、民話などの「全校おはなし会」を実施（読み聞かせ活動の様子）している。児童と本との豊かな出合いを演出し、児童の読書意欲の向上を図る取組となっている。



（読み聞かせ活動の様子）

③花と緑の環境整備と登校付添

学校園や学年園での耕作や栽培、運動場や中庭の整備などの環境整備のサポートと、毎朝の登校付添は「緑のおじさん・おばさん」というボランティアグループに担当してもらっている。毎朝登校付添の後に学校園・学年園の管理作業をお願いしたり、教師に作物の栽培方法を指導していただいたり、また児童や教師と一緒に栽培や収穫の作業をしていただいたりしている。さらには長期休業中の大規模な環境整備作業などにも大勢の方々に参加していただき、学校環境の整備と登校の安全確保に貢献していただいている。毎朝の登校付添と栽培や環境整備活動の年間のべ時間数（実働時間×のべ人数）は平成21年度で約1,500時間になる。



（学校園での栽培活動の様子）

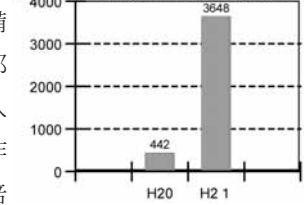


（毎朝の登校付添）

色ある教育活動を展開することで、公立学校は、信頼され期待される地域の学校となり得る。

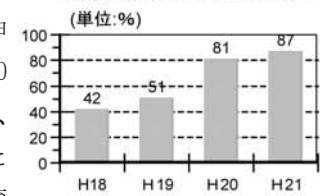
① 平成21年度の学校支援ボランティア活動人数は「学習指導のサポート」「図書室運営サポート」「科学教室運営サポート」以上の活動のべ人数である。（図1 H22.3月末現在）その活動時間は3,000時間を超えた。これは本校が地域に支えられ信頼され期待されていればこそこの数字であると考えられる。

図1 北小ボランティア年間活動のべ人数



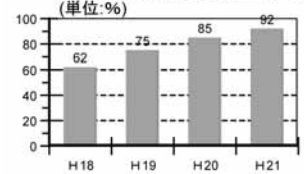
② 昨年度12月に王寺北小学校の全保護者を対象に行った学校評価のためのアンケート調査（対象者376名回収率99%）の結果、87%の保護者から、「学校は特色ある教育活動を行っている」という支持を得た。4年前の同項目の調査では42%だったので、4年間にその数値は倍増したことになる。特にこの学校支援地域本部事業の活動を開始した平成20年度からの数値の伸びは顕著で一気に30ポイント増となって、地域人材を活用した本校の特色ある教育活動の推進が認知されていることがはっきりと表れている。（図2）

図2 「学校は特色ある教育活動を行っている」と答えた保護者の割合（北小H18～21）（単位：%）



③ また、「学校は地域と協力して教育を進めている」と答えた保護者も昨年度は90%を超えてきた。これもまたこの実践研究の成果として、地域に開かれ、地域に支えられ、地域と共に学校づくりを進める本校の姿を如実に表すものであると言える。（図3）

図3 「学校は地域と協力して教育を進めている」と答えた保護者の割合（北小H18～21）（単位：%）



(2) 仮説2についての成果④～⑥

〈仮説2〉地域人材を活用した授業や活動を展開していくことで、学習環境が整備され、児童の学習意欲や学習効果が高まる。

④ 学習の面では、ほぼ全教科とその他の領域の活動

5 実践研究の成果①～⑥

(1) 仮説1についての成果①～③

〈仮説1〉「地域」を公立学校の教育的資源とした特

に学習指導のサポー

トが入ったことに

よる効果は大きく、

「子どもは授業が

わかりやすく楽し

いと感じている」

と答えた保護者の

割合が昨年度は85%になり、過去3年間の数値に比

べ明らかに有意な増加を見せている。(図4)

- ⑤ また、平成21年度の児童アンケート(全児童376名対象)では前年度に比べ「学校の勉強はわかりやすい」「授業中は先生の話をよく聞いている」「授業中は姿勢を正しくしようとしている」などの項目で顕著なポイントの増加を見せている。このことは平成21年度に長期欠席者(不登校児童)が0名になったことと密接に関係していると考えられる。

- ⑥ さらに教職員アンケート結果でも、特に「先生の話をしっかり聞いている」(図5)「あいさつと返事がよくできるようになった」(図6)の項目で昨年度に比べ40ポイント以上増加し、児童の学習規律や生活規律の向上がよくうかがえ、学習指導サポートの効果がよく出ていると考えられる。

図5 「子どもは先生の話をしっかり聞いている」(北小H20~21)
(単位:%)

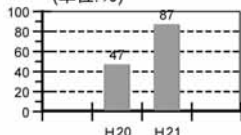
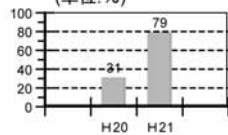


図6 「子どもはあいさつと返事がよくできるようになった」
(単位:%)



6 今後の課題 —継続と発展のために—

(課題1) 検証・改善・広報

全国学力・学習状況調査や全国体力・運動能力、運動習慣等調査のデータをもとに比較検討したり、学校評価の内容を工夫改善したりすることで成果の検証精度を高め、その結果をもとに取組の改善を図っていくこと。そしてそれらの成果を様々な機会や手段で地域や保護者、関係機関等に広報していき、さらなる理解や支援を得られるよう一層努力をしていきたい。

(課題2) 組織と人材の育成

地域や保護者のボランティア支援によって、かえって教員の負担が増えるようなことは避けなければならない。その前提条件の下でボランティア支援が効率的かつ有機的に学校の教育活動に作用するということが

この実践の継続・発展には欠かせない。そのために今後さらにボランティア組織を強化し、教員とボランティアを結ぶ地域コーディネーターの人材育成や資質向上を図っていかねばならない。また教員もボランティア人材を活用していくために、どの部分でどのように協働していけるのかを考えた計画的な学習活動の組み立てが求められる。

(課題3) 活動を広げていくための連携

本校のボランティア登録者は豊富な経験とキャリアを有し多才である。その方々を教育的資源として活用し、今後は地域の他の小中学校や関係機関と連携した活動の展開が考えられる。また、この取組は学校教育と社会教育の双方に関係するだけでなく、広く地域づくりに関わる部分が大きく、したがって単に教育委員会のみにとどまらず、今後は他の関係行政部局とも連携協力して事業を推進することも重要になってくると考えている。

7 おわりに

この取組を始めた頃は、ボランティアの方々に「ありがとうございます。」と申し上げるばかりだった。しかし最近では、逆にボランティアの方々から「ありがとう」と言ってもらえることが多くなってきた。またその頃から学校が変わり、具体的な成果が現れてきていると感じるようになってきた。地域の方々に支援していただいて学校が感謝し、同時に地域の方々が、学校を自己実現や生涯学習の場として活動できることを感謝して、地域文化の向上や活性化につながっていくこと。つまり学校と地域が互いに支援・貢献し、そして感謝しあえる関係を築き上げることが、公立学校運営の要であり、経営戦略の重要な要素であることをこの取組を通して実感確認することができた。

今後も王寺北小学校は、児童・教職員・保護者と地域やボランティアの方々の「ありがとう」の声が響きあう学校であり続けたいと思う。そして地域を教育的資源にした「地域を学校の宝」にする学校運営で、地域に誇れる学校をつくり「学校を地域の宝」に育てていきたい。

参考文献

・平成20年度 平成21年度 本校研究紀要

学校支援地域本部事業活動報告 No.1、No.2

「みんなで支える学校づくり—楽しく 明るく たくましく—」

社会的思考力を育てる社会科授業の実践的研究

～6年社会科「あなたは未来の裁判員！」を例に～

岡山県津山市教育委員会学校教育課

指導主査 高岡 昌司

1 はじめに

PISA調査から日本の子どもは主体性や自己の確立、他者に的確に伝える表現力等が十分でないことが明らかになった。特に、根拠をもって自分の言葉で考えを述べる問題などの無解答率が高かった。この結果は、今回の学習指導要領の改訂にも大きな影響を与えた。今後の授業改善の視点において、主体的に学ぶ意欲や、自己の考えを集団で練り上げる学び合いの場がより重視されるであろう。

これらの課題は日々の授業の中でも実感しているところである。社会科の授業においては、情報の取り出しや理解にとどまらず、社会を形成する一員として主体的に社会にかかわる力¹⁾の育成が求められていると私は解釈している。

本稿でいう「社会的思考力」とは、社会事象や資料などの知識、理解をもとに、思考力や判断力、表現力を使って問題解決する力と定義する。まさしく、今求められるPISA型読解力を包含する力と捉えている。

本実践では、タイムリーな社会事象をもとに、その社会的意味（解釈）を議論する学習を通して、本稿でいう社会的思考力を育てたいと考えた。

2 社会的思考力を育てる授業の方略

社会的思考力を育てるためには、対話が不可欠である。特に、事象に対する意味や価値について交換したり共有したりする学び合いの場を重視している。子ども同士や教師と子どもで批判、検討し合い、共同で意味形成を行っていく場である。社会的意味は、子ども自身によって発見、創造されることで、実感をともなった深い理解に結びつく。

社会的思考力を育てる具体的な方略として、

方略Ⅰ「事実・根拠」と「考え(解釈)」を区別する。

手立て：ツールミン図式の活用を通して、子どもたち自身に根拠と考えの違いを意識させる

方略Ⅱ 考え・意見（立場）を比較、検討する。

手立て：価値判断場面や対立場面など議論の場の

設定を行う

方略Ⅲ「考え」を自己モニタリングする。

手立て：イメージマップを活用して、自分の考えをメタ認知できるようにする。

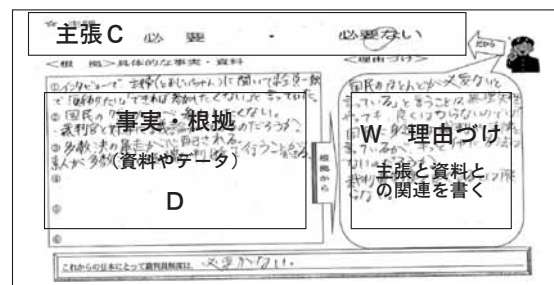
以上、方略Ⅰ～Ⅲを意図的に学習活動に組み込む。

方略Ⅰ、Ⅱは特に、学び合いの中心となる議論の場に仕組む。方略Ⅲは、単元を通して数回設定する。

いずれも、漠然と考え（意見）を発表させるのではなく、社会的思考力を育成する視点を教師と子どもが共有化し、意識化することがポイントである。

方略Ⅰのツールミン図式²⁾とは、「事実」と「主張」との間に「理由づけ」をおいて構造化したものである。議題に対して、主張（C）とその事実・根拠（D）を2～3例挙げる。そして、主張（C）と事実・根拠（D）を関係づける理由（W）を書く。ここに、その子なりの社会的意味づけ（解釈）が表現される。

子どもたちにとってツールミン図式はやや難しい面がある。しかしながら、年間を通して、繰り返し活用することで身につけていく。中学年の場合はワークシートを吹き出しにするなど書きやすい工夫をしている。（下図：ツールミン図式の例）



3 実践の概要³⁾（6年社会科政治単元）

(1) 単元（社会科11時間+道徳2時間）

「あなたは未来の裁判員！～裁判員制度を考える～」
授業者 兵庫教育大学附属小学校教諭 高岡昌司

(2) 単元目標

○ 裁判員制度をもとに法や裁判に関心を持ち、国民主権や民主主義につながる考え方について、意欲的

に調べ、自分の考えを主張できる。

○裁判員制度を例に司法の現状や課題に対して、調べてきた社会的事象を根拠にして討論する中で、客観的で公正な価値判断ができる。

○裁判のしくみや、選挙権と同様に全国民が司法へ参加していくことの意味を理解できる。

(3) 授業づくりと実際の展開

本教材の中心である裁判員制度は平成21年5月から実施される司法制度改革の一つである。法律の専門家ではない一般国民の感覚が裁判の内容に反映され、その結果として国民の司法に対する理解と信頼がより深まることが期待されている。裁判員制度は国民主権や民主主義につながる考え方がその本質であり、これまでの三権に対する委託民主主義から参加民主主義への転換が目的であると言われている。

本単元では、裁判員制度を中心に、個人と社会のかかわりや日本国憲法をもとにした社会の仕組みを学習することを通して、ルールや法、司法制度など法教育を学ぶ機会とする。

法教育とは「法律専門家ではない一般の人々が、法や司法制度、これらの基礎になっている価値を理解し、法的なものの考え方を身につけるための教育⁴⁾」と定義されている。つまり、法律の条文や制度の理解を目的にするのではなく、法やルールの背景にある考え方や価値観、司法制度の働きや意義についての理解を深めることがねらいである。

指導にあたっては、テーマを第一次「裁判員制度について知ろう」3時間－(道徳)「オオカミなんてこわくない(模擬裁判)」2時間－第二次「裁判員制度の必要性について考えよう」5時間－第三次「裁判員制度小学生版ポスターを法務省に提案しよう」3時間と設定した。

① 第一次の実際の展開(3時間)

裁判員制度を知っている子はほとんどいなかったのので、ここ数年の新聞記事を紹介し、近い将来自分たちも裁判員になる可能性があることを知らせた。裁判は裁判官や弁護士など司法試験を合格した頭のいい人がやるものだというイメージが強かったようでおおいに驚いていた。すぐに興味を持った子どもも多く裁判員制度の仕組みや役割(被告や検察官等)、裁判の進め方などについて調べることにした。ここでは法務省が作成しているHP「裁判員制度 for キッズ」やインターネット動画、子ども向けのパンフレットなどを活用して進

んで調べた。わかったことをイメージマップに図式化しながら、テレビドラマ等での裁判風景を想起させ、裁判や裁判員制度の概略をまとめた。

② 道徳〈模擬裁判〉の実際の展開(2時間)

裁判の様子は見たことがあっても子どもたちにとって実感がわかない。そこで道徳を活用し、模擬裁判をすることにした。実際の弁護士(茨城弁護士会:後藤直樹氏)がつくったシナリオ「オオカミなんてこわくない」をもとにロールプレイを行った。宿題で保護者の考えも聞いてくことで、家庭も巻き込んでの裁判員制度の議論へとつなげることをねらった。実際、子どもと保護者の意見が食い違い対立するケースもみられた。最終的には子どもと保護者の判決が真反対になり盛り上がった。

③ 第二次の実際の展開(5時間)

模擬裁判を行った感想から裁判員制度について疑問点を出し合った。「実際の裁判は難しい」「本当に正しい判決が出せるか不安」「なぜ全員が参加しなければいけないのか」「仕事があるので忙しい」等、裁判員制度に対する導入の意味や不安な声がたくさん出された。さらに、世論調査から75%以上の人を選ばれたくない実態があることを確認した。

そこで、学級の共通の疑問として、「裁判員制度は必要か」について調べることにした。教科書や資料集などの資料は少なかつたため、実際に裁判所や法務局へ電話をかけたたり出かけたり、町の人へインタビューしたりするなど似た意見の者同士でグループをつくり追究活動を行った。その上で、裁判員制度に対する自分の立場を明確にさせた。必要派と必要でない派がほぼ半数に分かれて議論を行った。議論の中で世論や国民主権の視点も出てくるなど裁判員制度を通して日本の社会に対する考えも出された。これからは社会をつくっていく一員として、社会の仕組みや制度について、主体的にかかわること、その有効性や影響を考えることが大切であるとまとめた。

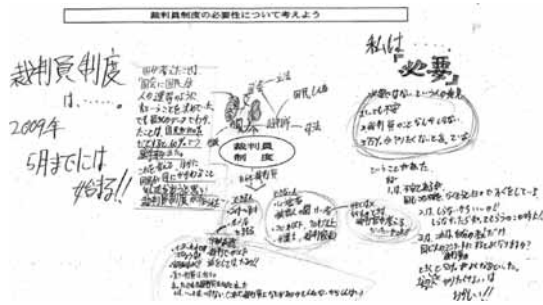
④ 第三次の実際の展開(3時間)

子どもたちなりに議論した内容を振り返り、裁判員制度のねらいを裁判員制度小学生版としてパワーポイントでポスターにまとめ、裁判所へ送付した。裁判員制度について考えたことが社会の一員として、周辺的ではあるが社会参画できるという実感をつかんだようであった。

(2) 方略Ⅲについての考察

単元前と第一次、第二次の終了時イメージマップを書く活動を取り入れた。A児のイメージマップでは、裁判員制度は必要の立場からその根拠や理由、必要ない派の意見などを整理してまとめている。A児のイメージマップから友達の見解と比較したり、相手を納得させようとしたりする客観的な捉え方がうかがえる。

(第二次終了時のA児イメージマップ)



また、複数回書いたイメージマップを比べて、「前に比べて情報が増えた。例えばどうして裁判員制度をするのかとか、どうやって選ばれるのか、メリットやデメリットなどがわかった。他にも必要でない派の意見に対して答えられるようにしたい」と感想が書かれていた。自分の考えを整理し、認識の広がりや変容についてメタ認知することにつながっている。

さらに、イメージマップをもとに振り返りカードに記述された立場の違う2人のまとめを以下に示す。

最後まで、合意にはいたらなかったが、それぞれに議論を踏まえての社会的意味づけがなされている。

<p>必要派：裁判員制度のメリットは今の社会で起っていることが知れる。デメリットは「必要ない」の人が言っているように国民の75%がやりたくないと言っているということがあること。裁判員制度はみんなで社会をつくるということだからやっぱり必要だと思った。</p> <p>不要派：私は迷っていてどちらとも言いにくい、メリットは世論調査から53%の人は裁判員制度をやって社会がよくなると答えている。デメリットは仕事が忙しい人や裁くのに自信がない人がインタビューで多かった。こんなにたくさん嫌がっているのに社会がよくなるのかわからないから</p>

5 おわりに (研究の成果と課題)

裁判員制度は現在タイムリーな話題であり、近い将来子どもたちも関係することから必然性を感じながら主体的に学習を進めることができた。

議論場面では、ツールミン図式で自分の考えを整理した上で、根拠を示した主張となり、論点を絞るこ

とができた。また、単元を通して、複数のイメージマップで考えを整理したことや、それらを比べたことが、自己モニタリングにつながる活動として有効であった。認識の変容を子ども自ら分析したり意識したりする力が高いほど、社会的思考力も高まるという手ごたえを感じている。

終盤の議論では同じ立場同士(小グループ等)での自由交流を取り入れたことで、白熱した議論になった。対話のタイミングも重要な要素であると思われる。

課題としては、感情と事実との判断の区別が難しい面があること。感情的に話している子に対して、客観的に納得できるような資料や働きかけの工夫が十分とは言えない。今後は実際の体験談や裁判事例などを取り入れることで、裁判員制度の解釈が広がるだろう。



神戸新聞2007年2月19日付

PISA型読解力を包含する力である社会的思考力の育成と、知的好奇心を刺激する教材の開発が表裏一体の関係にあると感じている。

本稿の社会的思考力は社会科を想定しての思考力であるが、他教科においても、3つの方略は活用できる。例えば、国語や算数でも資料と考えを意識する手だてとしてツールミン図式等が十分活用可能である。今後も様々な教科領域で検証してみたい。

6 引用・参考文献

- 1) ケネスJガーゲン著「あなたへの社会構成主義」ナカニシヤ出版2004。
 - 2) 福澤一吉著「議論のレッスン」(生活人新書) 2002。
 - 3) 高岡昌司「兵庫教育大学附属小学校提案要項」2006。
 - 4) 大杉昭英著「法教育実践の指導テキスト」明治図書
- 橋本康弘編著「“法”を教える身近な題材で基礎基本を授業する」明治図書2006
- 兵庫教育大学附属小学校著「学び合いわかりあう授業づくり」(明治図書) 高岡昌司：拙稿5年情報単元2007。

科学的な思考力・判断力・表現力を育む指導のあり方

～理科学習における「言語活動の充実」を目指して～

鹿児島県薩摩川内市立永利小学校

教諭 米満 康弘

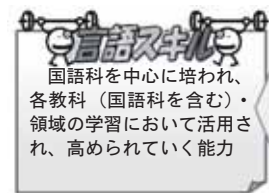
1 研究主題設定の理由

学習指導要領総則（第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2-(1)）では、「各教科の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等を育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」とし、言語活動の充実を図る教科指導のあり方を強調している。

また、言語に関する能力を育成する中核的な役割を担う教科である国語科においても、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれに、記録、要約、説明、論述等の具体的な言語活動を例示し、それらを通じた指導の必要性についても強調している。

学習指導要領の趣旨をふまえ、教科指導においてその具現化を図るために、本校では「言語活動」を次のようにとらえ、共通実践するようになった。

言語活動
国語科で育まれる「言語スキル（「話す・聞く」「書く」「読む」力を構成する11の要素 ※本校の研究において設定）」の具体的な活用の場。これらを意図的・計画的に導入していくことで、各教科の本時のねらいは効果的に達成される。



国語科3領域＝「話す・聞く」「書く」「読む」力を形成しているのが11の「言語スキル」ととらえた。これらは国語科の学習において培われ、各教科（国語科を含む）領域等の学習を通して活用され、高められていく。言語活動を支える能力である。

音読力	多読力	読む力	想像力	取材・記録力	選択力
声に出して資料をすらすらと読む力	目的に応じて読書活動を広げていく力	目的に応じて資料の内容の大切なことや中心・要旨をとらえる力	資料から読み取ったこととイメージする力	集めた情報を、使える形にして記録する力	集められた情報から、自分に必要な情報を選び出す力
構成力	説明力	感想・意見力	対話力	推敲力	
相手に分かりやすく伝えるために、内容を組み替えたり、まとめる力	伝えたいことを相手に分かりやすく話したり、書いたりする力	自分の感想や意見をもつ力	コミュニケーションをとりながら話し合う力	作品を見直し必要があれば訂正する力	

国語科の学習で育成された11の「言語スキル」を、「言語活動」という具体的な形として、各教科の学習

に意図的・計画的に導入していくことによって、本時の学習のねらいは効果的に達成されると同時に、導入された「言語活動」によって活用された「言語スキル」も高められると考える。

このような本校のテーマ研究における基礎理論のもとに、理科学習の立場から「科学的な思考力・判断力・表現力」を育成していくために、どのように指導方法を改善していけばよいか講じていくことにした。

2 目指す子ども像

テーマを追究していくことで、その成果として期待される子ども像を以下のように設定した。

- 1 読書の楽しみを自分なりに実感でき、学校でも家庭でも進んで読書に取り組むことができる子ども
- 2 自分の考えを作り出すために、正しく（または批判的に）読み取ろうとすることができる子ども
- 3 読み取ったことと、自分の知識・経験とを結び付けて、自分の考えを書いたり話したりすることができる子ども
- 4 自分の考えを適切に表現したり、相手の考えを正しく理解したりするために、言葉を選び活用できる子ども
- 5 言語環境に興味をもち、言葉を進んで調べたり、新たな言葉に出会おうとしたりする子ども
- 6 既習漢字や文字、表記法、文法を、自分の表現活動の中で活用できる子ども

これらは教育活動全体を通して具現化される内容であるが、子どもたちにとって身近な「自然の事物・現象」を主な教材として扱い、多様な言語活動を通して問題解決的な学習を展開していくというその特性から、理科では特に「3」の内容を重点目標に設定した。

また、この「読み取ったことと、自分の知識・経験とを結び付けて、自分の考えを書いたり話したりすることができる子ども」とは、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、…（略）」（学習指導要領「第1章『総則』～第1『教育課程編成の一般方針』～第1項」）の箇所を具現化した姿であり、理科学習において習得した理科にかかわる基礎的・基本的な知識及び技能を、よりよく活用させながら課題を解決していくために必要な科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けた子どもでもあるととらえた。

3 研究の仮説

理科学習における基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図り、それらを活用していくための言語活動を意図的・計画的に導入していけば、科学的な思考力・判断力・表現力も高まり、本時の学習の目標も効果的に達成されるのではないかと。

(1) 理科学習における基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図るための手立ての考案

観察・実験を通して、その基礎的・基本的な知識及び技能を習得させていく理科学習であるが、本研究では、特にICT利活用のあり方を中心に追究していくことにした。

(2) 習得したことの具体的な活用となる言語活動の意図的・計画的導入

「記録」する活動、「説明（論述）」する活動を意図的・計画的に導入していきながら、その有効性について検証していくことにした。

4 研究の実際

(1) 習得の場におけるICT利活用

平成21年度末、スクールニューディール構想を受け、本市においてもICTの更なる充実が図られ、電子黒板（各学校1台）を始めとし、50inデジタルテレビ（全教室）、書画カメラ（普通教室）やPCの増設が実現した。

これまでは、観察・実験のポイントを示す際、デジタルコンテンツやVTRを活用し、それらを提示するのみのシンプルな方法であったが、電子黒板を利用すれば、提示資料にリアルタイムに加工を施すこと（描画、拡大、回転等…）ができるようになり、資料提示を工夫して行えるようになった。



ア ICT導入の意図

「電子黒板が創る学びの未来」（中川一史 著）には、「電子黒板やデジタルコンテンツ等の利活用の4つの意図」が以下のように示されている。

- I 知識・理解の補完・定着
 - ・なかなか体験できないことを疑似体験する。
 - ・繰り返し練習する。
- II イメージや意欲の拡充
 - ・見ることで想像力を刺激する。
 - ・実際の体験の意欲を促す。
- III 学び方の補完
 - ・うまくいくポイントをつかみやすい。
 - ・実験の手順が分かる。
- IV 課題や疑問への発展
 - ・見ることで様々な疑問がわいてくる。
 - ・学習課題に収束するようなきっかけになる。

これらの4つの意図のどれにも当てはまらなければ、「その利活用の効果はない」と考えてもよい。習得の場におけるICT利活用においては、特に「I」と「III」の意図を大切にするようにする。

イ 実践例（主なもの）

(ア) 知識・理解の補完・定着

<p>「アルコールランプの用法」</p>	<p>教科書の該当箇所をスキャンし、ポイントとなるところを予め塗りつぶしておく。</p> <p>電子黒板の「消しゴム」機能を使い、塗りつぶしを消しながら、ポイントを確認していく。</p>
<p>「乾電池のつなぎ方」</p>	<p>直列、並列それぞれのつなぎ方を習得させるために、タッチペンを使って繰り返し指導する。</p> <p>子どもたちにも描画させることで、学習意欲も高まる。</p>
<p>「振り子の振れ幅」</p> <p>NO IMAGE...</p>	<p>録画機能を使い、振り子が往復している動画を撮影する。描画機能も使いながら、振れ幅をとらえさせる。</p>

イ) 学び方の補完



教科書に提示されてある実験手順を、事前に撮影した画像を活用しながら補足説明していく。

ポイントは、描画機能及び拡大機能を使い、効果的に提示するようにする。

(2) 活用の場における言語活動の充実

ア 「言語スキル」との関連性

学習指導要領の趣旨（習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用しながら、思考力、判断力、表現力、その他の能力の育成）を踏まえ、理科学習における言語活動の充実を図っていくために、また、理科学習の目標を効果的に達成していくために、言語活動を意図的・計画的に導入していくことにした。

それぞれの言語活動と「言語スキル」との関連性は以下の通りである。

言語活動	活動のとらえ方	活動を支える主な言語スキル
記録	①情報の取り出し、解釈 ②書き記す	読む力 取材・記録力
要約	文章などの要点をとりまとめること。	読む力、構成力
説明	ある事柄が、よく分かるように述べること。	説明力、構成力、対話力
論述	筋道を立てて述べること。	説明力、構成力、対話力

※ 「要約」とは、観察・実験において、結果を表やグラフに整理したり、予想や仮説と関連づけながら、その考察を言語化したりする過程で働く言語活動である。したがって要約した内容は、記録、説明、論述する際に、結果として表出するため、「要約」という言語活動は、理科学習においては取り立てて導入しない。

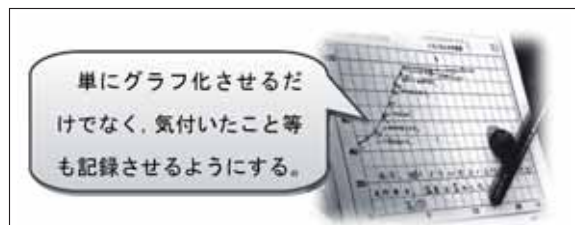
※ 「説明」と「論述」は、同義であると解釈した。「説明」として意図的・計画的に導入していく。

イ 意図的・計画的に導入していく言語活動

ア 「記録」すること

具体物を観察（見たり、聞いたり、触ったり、…）しながら、**取り出した情報を正確に言語化（または図式化）**していく活動の積極的導入

記録した内容（取り出した情報）は、後の話し合い活動で生かすようにさせる。



イ 「説明（論述）」すること

- ①グループ全員で、**合意したものへと練り上げていく話し合い活動**の積極的導入
- ②話し合いの結果を、**全体の場で説明（発表）する活動**の積極的導入

一人一人の意見や考えを、グループ内で交流し合い、グループとしての合意したものへと練り上げていけるよう、話し合わせるようにする。話し合いの結果として合意した内容は、フリップに書き表し、後の全体発表で活用できるようにする。



ウ 「学習のまとめ」と「自己評価」

a 「学習のまとめ」

- ① 板書したまとめを、正確に視写する。
- ② キーワードを抜いて板書し、穴埋めする。
- ③ キーワードを示し、自由に記述する。
- ④ キーワードを示し、制限字数内で記述する。
- ⑤ 自由記述する。
- ▼ ⑥ 制限字数内で自由記述する。

本時の学習のまとめを、子どもの実態に応じて、上記のように行うようにする。

最終的には⑥「制限字数内で自由記述する」をめざす。

b 「自己評価」

メタ認知させるための手立てとして、終末に自己評価を行わせるようにする。

- ① 本時の学習の成果（学習のめあてに対する自分なりの達成度）を「◎」「○」「△」で記入する。
- ② ◎○△の根拠および次時の授業では（までには）、「何を」「どのようにしていきたい」のかを記述する。

これらはノートに記入させ、次時の初めに再度確認させるようにする。

ウ 実践の検証

(ア)「記録」すること

成 果	記録したこと（取り出した情報）をもとに、後の話し合いでそれらを説明し合う活動（表現活動）を重ねていくことで、目的意識（自然の事物・現象に見られる規則性や関係等を推論すること）と相手意識（グループ全員に対して）をもって記録できるようになってきた。
	観察・実験以外の学習活動（「教師の説明を聞く」、「VTRを視聴する」、「インターネットで調べる」、「教科書や資料等を読む」等）で得た情報も、ノートに自主的に記録していく姿が見られるようになってきた。
課 題	自然の事物・現象を観察する際、細部にわたってスケッチしたり正確に記録したりすることはできているが、単にそれらを書き写すことだけに留まり、様々な変化や規則性等には、なかなか気づけない子どもがいる。数量や色、大きさ等の変化にも気づいていけるよう、観察の視点を与えていく必要がある。



(ウ)「学習のまとめ」と「自己評価」

成 果	当初は、教師が板書した学習のまとめを視写するだけの子どもが多かったが、キーワードにこだわり、穴埋め形式や自由記述にさせていくことで、一人一人の「書く」意欲の向上にもつながってきているように感じる。 自己評価も習慣化が図られ、家庭学習においても自主的に取り組む姿が見られるようになった。
	それまでの学習活動（特に観察・実験）に時間が取られてしまい、「学習のまとめ」を書く時間及び「自己評価」の時間を確保できないときがあった。
課 題	

(イ)「説明（論述）」すること

成 果	実験結果から、事象の規則性や関係等を推論することができない子どもでも、グループでの話し合いに参加していくことで、推論するヒントを得ることができ、主体的に活動に取り組むことができているようである。
	話し合いの後に、結論を全体へ発表する場を設定することで、それまでの一連の活動に対して、目的意識をもつことができた。
	理科では、（授業内容にもよるが）毎時、観察・実験結果から話し合い活動を通して推論したことを全体の場で発表する場（ゴールとなる表現活動）を設定することが可能である。 「自然の事物・事象との出会い」→「学習課題設定」→「予想」→「観察・実験」→「推論」→「発表」→「まとめと自己評価」という学習過程をパターン化していくことで、ゴールとなる表現活動への目的意識をもって、主体的に学習活動に取り組めるようになってきている。
	発表する機会を重ねていくことで、全体の場で説明することに対する抵抗感が少なくなってきた。
課 題	発言力のある子どもの意見に収束してしまいがちである。一人一人の意見に耳を傾けさせる必要があるのと同時に、一人一人が根拠を明らかにさせながら説明できるよう、説明し合う場（説明力の活用）を各教科の学習活動において積極的に設定していく必要がある。

5 研究のまとめ

電子黒板や書画カメラ、PC等の機器及びデジタルコンテンツを使用した授業について、6年生32名の全てが「分かりやすい」「楽しい」と答えた。さらに、グループで話し合ったことを発表する際にも、電子黒板を使うと「説明しやすい」という感想も挙がってきており、様々な情報を収集したり、コミュニケーションをとったりするためのツールとして、今後もICTの利活用を期待したい。

また、新しい知識や技能を子どもたちに伝達する効率をできる限り高めることが教師の役割であり、ICTを利活用していくことで、教師が『見せたいこと』を間違いなく『見せる』ことができるという点からも、基礎的・基本的な知識及び技能の習得の場におけるICT利活用は大いに効果があると考えられる。

子どもたちは理科学習において、自然の事物・現象等に触れながら、そこに見られる様々な規則性や関係等を、言葉というフィルターを通して、新たな知識として習得していく。その中で、望ましい言語活動を展開させていくことができれば、科学的な思考力・判断力・表現力も高まり、本時の学習の目標も効果的に達成されていくものと考えられる。

学習指導要領の趣旨をふまえ、教育活動全体を通して「言語活動の充実」のさらなる具現化を図っていくことが、今後の課題である。

「思考力・判断力・表現力」を高める授業改善のあり方

～スタディ・ナビゲーションの開発と活用～

新潟県長岡市立希望が丘小学校

校長 古塩 実

1 はじめに

本校は、平成20年に文部科学省『全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善に係る実践研究』、平成21・22年には、新潟県小学校教育研究会『学習指導改善調査事業 調査活用協力校』の指定を受けた。具体的には、「全国学力・学習状況調査」、並びに新潟県小学校教育研究会が実施する「学習指導改善調査」における本校児童の結果から見えてきた課題を分析し、それをもとにこれまでの授業をどう改善すればよいのか検討、提案することである。本年度3年目となる。

2 調査から見えてきたこと（研究の目標）

平成21年度「全国学力・学習状況調査」「県学習指導改善調査」から、次のような実態が浮き彫りとなってきた。

- ▲言葉一つ一つに関心をもち、文脈や前後の言葉とのつながりに注意してその意味を探るとともに、文意を的確につかむ力に弱さがある。
- ▲資料から分かることを読み取ったり複数の事実をつなげたりして考えをつくったり、その考えを効果的に表現したりする力に弱さがある。
- ▲さまざまな情報の中から解決に向けて必要な情報を取り出し、既習事項を活用しながら解き進めていく力に弱さがある。

いずれも、学習内容に対して、「それまでに身に付けてきたさまざまな既習事項を駆使しながら思考し、そこから自分なりの結論を導き出し、表現する力」に弱さがあることが明らかとなった。そこで、わたしたちは、児童の「思考力・判断力・表現力」を高めるために、授業改善のあり方を探り希望が丘小プランを創造することをめざして取り組むこととした。

3 研究仮説

スタディ・ナビゲーションを授業に取り入れ、児童に学習の見通しをもたせることで、児童の学習に対する主体者意識、及び思考力・判断力・表現力が高まるであろう。

4 研究の内容

(1) スタディ・ナビゲーションとは

本校では、授業改善の柱に「スタディ・ナビゲーションの開発と活用」を据えている。スタディ・ナビゲーション（以下、〈ナビ〉）を開発し、授業に生かすことで、児童が学習に見通しをもって臨む姿、主体的に取り組む姿をイメージしている。

〈ナビ〉による見通しを重視した背景には、新学習指導要領「総則編」(H20.8)の次の記述がある。

(4) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。(第1章第4の2(4))

(前略) 児童が学習している事項について、事前に見通しを立てたり、事後に振り返ったりすることで学習内容の確実な定着が図られ、思考力・判断力・表現力等の育成にも資するものと考えられる。

わたしたちが考える〈ナビ〉とはどのようなものか。

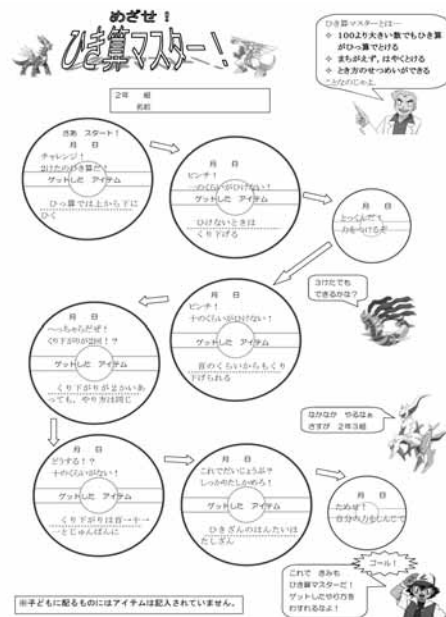


図1 2年算数『めざせ！ひきざんマスター』ナビ
〈ナビ〉は、これまで授業をするわたしたち教師だ

けがもっていた単元の指導計画を、児童にも分かるように作成したものである。そして、児童にも〈ナビ〉を示し、教師と児童とが指導計画を共有しながら授業が進められることを想定している。いわば、指導計画の子ども版である。指導計画であるから、そこには、学習内容や進度に関する計画も含まれるし、今後に生きて働かせられるよう獲得してほしいと願う学び方や表現の仕方含まれる。指導計画を共有することで、児童が見通しをもって学習に臨めることを意図したのである。同時に、学習に見通しをもつことによって、児童が自ら学習を進める姿も意図しているのである。

(2) 児童にもたせたい「見通し」とは

〈ナビ〉を活用することで、児童にどのような「見通し」をもたせようとしているのか。

それは、次の3点に整理される。

①学習の進み方やゴールに対する「見通し」(内容への「見通し」)

- ・これからりもうとする学習がどのように進んでいくのか。
- ・これからりもうとする学習のゴールがどのようなものなのか。

②学習に取り組むことによって、どのような高まりをもつ自分を目指せばよいのかについての「見通し」(目標への「見通し」)

- ・学習のめあては何か。
- ・学習することによって、どのような自分へと高まっていけそうなのか。

③課題解決に向けて必要となりそうな着眼点やものの見方・考え方、学び方、表現の仕方に対する「見通し」(方法への「見通し」)

- ・何を、どのように考えていけばよいのか。
- ・既習事項の中で、活用できるものはないか。
- ・どのような表現の仕方考えをまとめればよいのか。

このような「見通し」を児童にもたせることで、学習に対して次のような姿が期待できる。

①学習のゴールや進み方が分かるという安心感につながる

学習のゴールや学習がどのように進んでいくのか見通せることにより、「今日、何するの?」といった不安感から児童が解放され、安心感を得るとともに学習意欲も高まる。

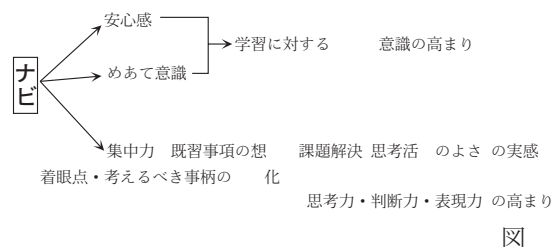
②どのような自分を目指せばよいのかははっきりする

ことによる、めあて意識の高揚

学習を通じて目指す自分がはっきりすることにより、児童の学習に対するめあて意識も高まる。同時に、学習を終えた後の振り返りも可能となる。めあてに基づいた振り返りにより、自分の成長も実感できる。自分の成長が実感できることは、次へのさらなる学習意欲の高まりにつながる。

③既習事項を想起し考えをつくらうとすることによる集中力の醸成

着眼点をはっきりさせたり、考えるべき事柄を焦点化したりすることで、じっくり考えるようになったり、鋭く深く考えたりするようになる。いわゆる思考に対する集中力の高まりが生まれる。また、表現の手順や方法を示すことで、活用できる既習事項はないか思考を巡らせるようになり、既習事項との結びつきや考え方の定着も強化される。そして、課題が解決されることにより、駆使した思考力・判断力・表現力のよさや価値を実感することができる。このことにより、知識・技能を活用する力、すなわち「思考力・判断力・表現力」が児童自ら使える力として高まっていく。図。



5 研究の実際

(1) 実践1 学習方法への見通しをもち、課題解決に向かう授業～4年算数『三角形』より～

の授業。教師は、学習指導から、児童の図に対する識にさがあることを感じていた。そして、そのを、図の知識を習得させることけにりていたこれまでの自分の実のあり方に着目した。

教師は、単元について、「習得」とそれを用いて課題をする「活用」とをにけることをに、単元化を図った。そのに着目したのが、作図活を「活用」としてどう生かすかということであった。これまでどちらかとうと、作図活は、や定、分度といったの使い方

に重きが置かれ、その前に学習した正三角形や二等辺三角形、一般の三角形の特徴や性質を生かす場がなかったからである。そこで、教師は、

道具を選ぶ時に、児童がそれぞれに何をするためにその道具を選んだのか考えさせる

ことにした。そして、作成した〈ナビ〉が以下のものである。(図3参照)



図3 4年算数『三角形』ナビ

教師は、「作図するために、したいことは何で、そのためにどの道具を使えばその思いを実現できるのか」を考えるべき事柄とすることで、学習してきた三角形の性質と結んで課題解決がなされるとプランした。つまり、これが学習を進めていく上での方法への「見通し」となる。

A夫は、学習の手順に従って分度器を選択。そして、以下のように理由を書いた。(資料1参照)

課題：「1つの辺の長さが4cmで、2つの角が50°の二等辺三角形をかこう。」

使う用具…分度器

理由…角の大きさが50°と書いてあるから、両はしに50°の角をかくため。

資料1 〈A夫のプリント記述と作図〉

A夫は、「両はしに50°の角をかく」ことを理由に

挙げる。A夫の頭の中には、二等辺三角形の形がイメージされたのだろう。だから、底辺の両端の角の大きさが等しいことを想起し、「両はしに…」と記述。作図において自分がやりたいこと(分度器で両端の角を測ってかく)を述べたのである。

(2) 実践2 考え方に見通しをもち、課題に向かう
授業～4年社会『ゴミはどこへ』より～

4年社会『ゴミはどこへ』の授業。教師は、「見学して分かったことをまとめよう」といった曖昧な指示が、児童の思考を停滞させていたことに着目。見学して知り得た事実を仲間分けしたり、その仲間をくくる名前を付けたりすることで、事実をさらに深く理解できると考えた。そこで、その方法を明記したナビを作成。児童に提示した。(図4参照)

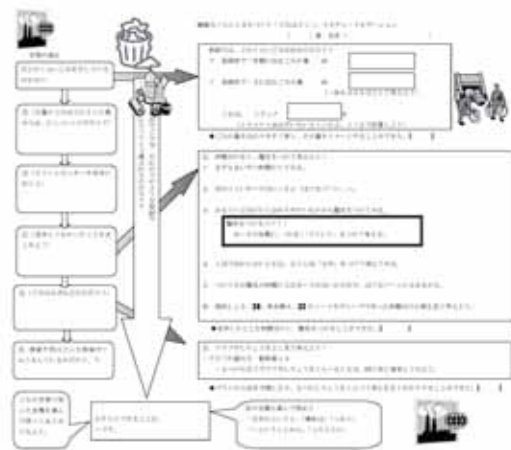


図4 4年社会『ゴミはどこへ』ナビ

教師は、26個出された事実を仲間分けするにあたり、「なぜ？」と常に問い、その答えを導き出しながら学習を進める方法を学び方として位置付けた。

B子は、一見つながりのない3つのカードを集め、仲間だと主張する。

B子：「ろか式集じんそうちでガスの中の灰やダイオキシンを取り除き、水じょう気にしてえんとつから出す」と「埋め立て地にふった雨は、集めて薬品を入れ、きれいにしてから川に流す」と「埋め立て地の底には、黒いゴムのシートがはってある」は、仲間。なぜ？と考えたら、どれも公害をふせぐ目的があると分かったから。

C夫：「灰はセメントとまぜて、固めて埋める」も、その仲間に入るんじゃない？

B子：なぜセメントとまぜるのかな？埋め立て地がいっぱいにならないための工夫のような気がするけど…。

B子：なぜセメントとまぜるのか分からないと、決められ

ないね。分かる人に質問してみよう。

B子は、常に事実に対して「なぜ？」と問い、その背後にある意味を探りながら、追求を続けた。「分かったことをまとめる」だけでは、到底行き着くことができなかつた内容を検討することができたのである。

考えていく方法を明記した〈ナビ〉により、自ら学習を進め、思考が深まっていったのである。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

○〈ナビ〉の導入により、学習に対する児童の主体者意識が高まった。

児童アンケートの結果、全体の92.5%の児童が、〈ナビ〉による学習を『学習しやすい』『学習が分かりやすくなった』『学習をがんばれた』などと肯定的にとらえていた。

以下は、〈ナビ〉を使って学習した児童の感想(一部)である。

D夫：ナビがすごく勉強に役立ちました。わけは、めざす姿が分かりやすく、その日めざす姿をクリアしようという気持ちが出てきたからです。少しくらいできなくても、がむしゃらに頑張るようになりました。(4年生)

E子：とても勉強がしやすかったです。理由は、ナビで今日は何をすることがよく分かったからです。だから、粘り強く頑張れたと思います。(3年生)

H夫：ぼくは、勉強が楽しくなりました。わけは、ナビを見て、何を勉強するか分かったし、ひき算マスターをめざそうっていう気持ちになれたからです。(2年生)

〈ナビ〉のもつ目標と内容の見通しにより、D夫、E子、H夫は、めあて意識が高まり、進んで学習することができたのである。

○〈ナビ〉の導入により、児童の思考が鋭敏になり、既習事項を想起しながら考えがつけられるようになった。

F子：ナビは考える時にとっても役に立ちました。なぜなら、忘れてたり分からなかったりすればヒントが出ていて、とても分かりやすかったからです。(5年生)

G子：ナビで考える力がつきました。「だから」「そして」を使うのは初め難しかったけど、だんだんできるようになって、「ということは」「～と

分かる」も使って書けるようになりました。

(6年生)

F子、G子は、「何を、どのように考えるのか」「何を、どのように表現するのか」具体的に明記した〈ナビ〉により、方法の見通しをもち、「思考力・判断力・表現力」を伸ばすことができたのである。

(2) 課題

○「思考力・判断力・表現力」を高めていくためには、「〈ナビ〉により自ら課題解決できたという実感」「〈ナビ〉により、考えが深まったという実感」が欠かせない。同時に、〈ナビ〉を継続的に使用しながら、そのよさに慣れ親しんでいくことも重要である。さらに、〈ナビ〉の精神が児童に浸透していきよう、実践を積み重ねていく必要がある。

○学年の発達段階に応じて、重点を当てた〈ナビ〉の取組が必要。

低学年では…〈ナビ〉が学習に役立つという実感をもたせることが大切。したがって、学習の流れやヒントなどを中心とした構成が適当。

中学年では…低学年の構成を含みつつ、「自らの考えが深まった」「学び方が伸びた」といった実感をもたせるような構成が大切。

高学年では…〈ナビ〉により自ら課題解決ができ、自分が成長できたと実感できるような構成が大切。

これら、6年間を見通した児童の成長、及び教科の特性を踏まえ、具体的な〈ナビ〉のあり方を、さらに研究していきたい。

7 終わりに

〈ナビ〉を作成することは容易ではない。しかし、教材から何を教え何を考えさせたいのか、身に付けさせたい学び方は何なのか…〈ナビ〉を作成することで、教師の眼力は磨かれる。

本研究は、ようやく3年目を迎えたところである。決して〈ナビ〉を万能のツールとは考えていない。むしろ、自分で〈ナビ〉をつくれる、やがては〈ナビ〉がなくても自分で学習をつくれる児童へと成長を促していきたい。それが、私たちのめざすゴールである。そのためにも、さらに全校体制で研究を継続していきたい。

地域のよさを生かし、地域を愛する生徒を育む教育の実践

— 全校写生会・街角作品展、観光ボランティア活動 —

新潟県長岡市立与板中学校

校長 遠藤 精一

1 はじめに

与板地域は、平成21年NHK大河ドラマ「天地人」の主人公、直江兼続公が城主を務めた城下町である。江戸時代までは河川交通の要所として栄え、往時をしのぶ建造物も多く残っている。与板城の外堀、内堀の役目を果たした信濃川と黒川沿いに本校がある。与板町は平成18年1月に長岡市と合併し、本校は長岡市の学校となった。現在の生徒数は232名・8学級である。

長岡市では各学校が企画・提案し、市教委が選考・特別予算を配当する「夢企画事業」が平成18年度からスタートしている。そして、本校は5年連続で採用されている。全校写生会・街角作品展は平成19・20年度に採用され、その後も継続して今年度で4年目、観光ボランティアは平成21・22年度に採用された教育活動である。

2 主題設定の理由

「はじめに」で述べたように、与板地域は直江家、牧野家、井伊家など由緒ある城主によって栄えた城下町であり、重要な流通拠点として繁栄し、大坂屋三輪家などの豪商が活躍するなどの歴史をもった町である。また、日本人として初めてビール醸造を成功させた「中川清兵衛」など多くの人物を輩出している。しかし、多くの生徒は与板に住みながら、そのことを詳しく知らない。また、現在の与板地域はメインストリートが閑散としており、地域に対する生徒の印象もあまり良いものではなかった。平成19年4月実施全国学力・学習状況調査「今住んでいる地域が好きですか」で肯定的な回答は47.3%と、県平均71.8%や全国平均73.1%と比較してかなり低い状況であった。

このような生徒の実態から、ふるさと与板への誇りをもたせ、地域を愛する生徒を育てることが本校の教育課題として浮上した。その解決のためには、与板のよさを学ぶことができ、また、地域の方から喜んでもらえるような教育活動を工夫し、実践することが有効

であると考えた。このような時に、「子どもたちに自信と夢をもたせ、やる気と学ぶ意欲を引き出すことにつながる事業」を目指した長岡市夢企画事業に応募し、採用されたのが表題の教育活動である。

3 取組の実際

取組A 全校写生会・街角作品展

(1) 活動のねらい

身近で見慣れた風景の中に、郷土の宝を見つけ出し、それを水彩画で表現する活動を通して、「郷土に自信と誇りをもつ生徒」「自分の考えや気持ちを豊かに表現できる生徒」を育てる。

(2) 事前学習会の開催と全校写生会

全校生徒が自分なりの思いをもって写生地を選ぶように、次のような学習を行う。

- ①地域の元学芸員（現長岡市与板支所所属）が与板の歴史・見所を講義する。
- ②美術教師が美術の授業で、写生画の描き方・水彩画法の指導をする。
- ③全校写生会（午前は現地で、午後は学校で）
毎年、5月下旬に実施している。



全校写生会：徳昌寺

(3) 長岡市名誉市民大矢紀画伯による絵画教室

6月の約1ヶ月間を使い、美術の授業を中心に作品を仕上げるのだが、その途中に絵画教室を実施する。大矢画伯は、旧与板町出身であり、10年前から6月下旬に与板小学校6年生の実技指導に来町している。全校写生会をスタートした平成19年度から、本校でも絵

画指導をお願いした。全校生徒が体育館で写生画の仕上げをしている所に個別指導に入ってもらう。後半には、ピックアップした作品を大きく映写しながら、「自分が描きたい主題を大切にすること」や「主題を的確に表現する技法」などについて指導してもらっている。



新潟日報掲載記事（平成20年6月）

(4) 生徒・地域・職員代表約30名による作品審査会
学校賞や入選作品は生徒と大人の合議により選出し、大人の審査員からは各々審査員特別賞を選出してもらう。生徒各クラス3名合計21名と大人（事前学習会講師・絵を展示する地区の町内会長・保護者代表・教員）が、「どの作品が優れた写生画なのか」ワイワイガヤガヤ言いながら選出することに意義がある。

(5) 全校生徒の写生画を展示する街角作品展

町の中心にアーケード街がある。町内会や商工会等に「街角



展示作業

作品展」開催をお願いをした。シャッター街になりつつあるアーケード街からは「町が元気づく」と快諾を得た。展示・撤去作業は生徒が行い、事前に依頼や展示方法、お礼の仕方等の指導会を実施している。今年の展示期間は、アーケード街が最も賑わう十五夜まつりがある9月1ヶ月とした。

取組B 観光ボランティア活動

これまで他地域から与板への観光客はほとんどなかったが、平成21年度はNHKの「天地人」放映の年で、「兼続お船ミュージアム」（長岡市与板歴史民族資料館、以下ミュージアム）や「まちの駅よいた」を訪れる観光客が激増していた。そこで、3年生全員が総合学習で準備をして、夏休み中にミュージアムで2回、また、希望者がまちの駅での1回の観光ボランティアにチャレンジした。生徒たちにとって貴重な体験となったが、初めての試みで課題も多く残った。

今年度は、1年生の総合学習で取り組むことにした。昨年度の反省を踏まえて、小学校6年生での総合学習で取り組んだ成果（直江兼続の生涯を調べ、創作劇を発表）を生かし、以下のように実施した。

(1) 活動のねらい

- ・小学校6年生の総合学習を生かし、地域に貢献する。
- ・地域のよさを伝える活動を通して表現力を養う。
- ・一致団結して困難を乗り越える爽快感を味わう。

(2) 関係機関との連携を丁寧に行う。

ミュージアムを管理する与板支所地域新興課教育支援係、まちの駅の駅長、与板町歴史ボランティアガイド协会会长等、関係機関との連携を、校長がコーディネートして丁寧に行う。

(3) 事前学習の概要

小学校6年生時の演劇の班編成（8班、その内1班は音楽隊）をそのまま活用する。

①観光ボランティア活動の計画・準備

活動の内容を理解する。ミュージアムとまちの駅のどちらで実施するか、また、活動のアイデアを班で相談する。役割分担、練習を進める（4～7月、計8時間の授業）。

②ガイド协会会长の指導

ミュージアムで実際にガイドのリハーサルを行い、ガイド协会会长から指導してもらう（6/22放課後）。

(4) 夏休みのボランティア活動

計画の概要：地域のコミュニティ誌に掲載

①ミュージアムでの活動

2つの班（1班8～9人）が、それぞれ2日間、展示物の説明を行う。説明の中で、短い劇を観てもら



寸劇を披露

う。13:00～大人のガイドが実際に説明するのを見て学習する。14:00～と15:00～は生徒だけで行う。音楽隊の班は5～6人の2つに分かれ、それぞれ2日間ずつ分担する。ミュージアムの入口付近の外で待機し、「天地人」のテーマ曲などを演奏してお客を迎える。また、帰られる際にも音楽で送る。

②まちの駅での活動

5つの班（1班7～11人）が1回ずつ半日を担当し、清掃活動、お茶だし、道案内などを行



道案内をする生徒

う。また、紙芝居を上演したり、自分たちで作った与板の観光案内をお客に配るなど班で考えた活動を行う。

地域で観光ガイドに挑戦したII写真II。このうち、兼続お船ミュージアムでは直江兼続の活躍ぶりを演劇で紹介した。

同校はNHK大河ドラマ「天地人」が放映された昨年からは、総合学習の一環で夏休みにガイド実習をしている。同ミュージアムでは観光客を前に関ヶ原の戦いに至る経緯を演じた。陣羽織で直江兼続や徳川家康に扮し、両者の複雑な駆け引きを懸命に表現した。

また、事前に展示物について勉強し、兼続の愛の前立ての由来などを緊張しながらも解説した。「まちの駅よいた」でも来訪者で自作の紙芝居やお茶でもてなした。

演劇で兼続役となった鈴木健太郎(13)は「緊張してせりふを忘れてしまった。お客さんの前で話すのは難しいけど、与板にすごい人がいたと自慢したい」と話した。与板中学生のガイドは10日間で両所で行われる。

新潟日報掲載記事（平成22年8月）

(5) まとめの活動

- ① 「観光ボランティア活動振り返りレポート」を夏休み中の課題とする。
- ② 班ごとに集まり、活動振り返りレポートをもとに、「活動から学んだこと」「ボランティアとは」「今後の生活（学校・家庭・地域）で活かさなければならないと思うこと」を大きな用紙にまとめ、1年ホールに掲示する（9月2時間の授業）。

4 取組の成果と課題

取組A 全校写生会・街角作品展

「与板の繁栄を写すIV」と名付けた今年で4年目の全校写生会・街角作品展が終了した。本校の特色ある教育活動として定着し、教育活動としてなくてはならないものになったのは、以下のような要因からだと言える。

(1) 生徒が主体的に取り組んでいる。

取り組む前は、「生徒が開放的になる野外で写生にしっかり取り組めるだろうか」という不安があった。しかし、生徒の中にも「来年もやりたい」という声が出るなど、毎年、生徒は写生会を楽しみにしており、熱心に取り組んでいる。次の3点が有効であった。

- ①事前学習で与板の歴史や史跡の学習を行い、11の活動エリアの中から、「今年は〇〇を画く」という目的をもって、画く場所を選択させている。
 - ②写生画の描き方等の基本を学習している。
 - ③全員の作品を街角に展示するという目標がある。
- (2) 与板出身の日本画家から直接指導していただける。

小学校6年時に絵画指導を受け、中学校でも毎年指導していただくことは、生徒の大きな励みになっている。今年、全体指導の際に絵をピックアップされた生徒は、次のように感想を書いている。「僕は、徳昌寺の絵をかきました。点ぬりで色を変えるのが得意で、大矢先生からほめられました。とてもうれしかったです。中学校に入ってから2回連続で大矢先生から指導してもらいました・・・」

(3) 街角作品展は地域の方から大変喜ばれている。

1年目の年は、街角作品展開催の直前に中越沖地震が起き、「作品展を延期する」という考えもあったが、地域の方から「大変な時だからこそ実施して」という賛同を得て、「中越沖地震復興記念」と名付けて実施した。地域の方から「町が明るくなっていい。子ども

たちのおかげで復興への気持ちもわいてきた」「展示期間をもっと伸ばしてほしい。毎年続けてほしい」という声を聞くなど、地域の反響には素晴らしいものがあつた。現在は恒例の取組として、アーケード街の方から積極的に支援してもらっている。

※どんな取組もながくなるとマンネリズムに陥るのが常である。これからも特色ある教育活動として継続していくことが最大の課題であると考えている。

取組B 観光ボランティア活動

(1)「ボランティア活動振り返りレポート」から
〔4：すごく 3：まあまあ 2：あまり 1：まったく %〕

アンケート	4	3	2	1
① 活動への興味や意欲はどのくらいありましたか。	39	51	10	0
② 活動の始めと終わりで取組の意識は変わりましたか。	43	57	0	0
③ 観光ボランティアをやってよかったですか。	86	14	0	0

〈「アンケート回答の理由」から〉

・昨年、1年もかけて学んだ兼続のことをガイドとしてみんなに伝えられると知り、嬉しかった。新たに家で調べたり、とにかく自分から進んで取り組めた。毎回の総合が楽しみだった。(①で4を選択)

・小学校の時やった劇を取り入れてやることになったので楽しみだった。人前でしゃべるのは苦手だから、練習をいっぱいした。(①で4を選択)

・行ったことのないまちの駅は不安。(①で2を選択)

・最初は緊張していたけれど、だんだんガイドをするのがとても楽しく感じて、終わった時は、もっとやりたいと思うくらいに変わった。(②で4を選択)

・最初は人に説明したりするのが苦手なのでいややだったが、この活動を終えて誰かに伝えることが好きになった。(②で3を選択)

・作ったパンフレットを配って読んでもらい、「すごいね」と言われてうれしかった。(②で3を選択)

〈「今回のボランティアで学んだこと」から〉

・2日間で4回のガイドをさせてもらい、たくさんの方に聞いてもらいました。とても真剣に聞いてもらいうれしくなりました。「これで終わります」と言い終えた後の拍手は忘れられません。聞いてくださるほとんどが与板の方で、与板の人っていいな～と思いました。中学1年生の説明は分かりづらかったかも知れないのに、「へえー」「そーなんだ」と言ってもらえて、真剣に聞いてもらえて、私たちは幸せ者だと、そして、地域の方は兼続のように優しく、愛のある方ばかりだ

と気付きました。

(2)(1)の生徒レポートの結果から、「活動のねらい」は十分に達成できたと言える。その要因を次のように考えている。

① 事前準備に当てられる授業時数の制約を考慮し、小学校6年時の学習内容を生かせる中学1年生での活動としたこと。

② 活動内容が異なる「ミュージアム」と「まちの駅」の2つから自由に選択させたこと。

③ 関係機関との事前打ち合わせを丁寧に行い、生徒がやり遂げることができる活動内容としたこと。

(3) ミュージアムの平成21年来館者は13万人で、それまでの50年分の来館者に相当した。平成22年度の来館者は前年の十分の一となっている。来年はさらに減少すると思われる。今年度のような観光ボランティア活動が可能かどうかを検討することが今後の課題である。

5 おわりに

A・B2つの教育活動を企画するきっかけは「ふるさと与板を愛する生徒を増やしたい」という思いであった。今年の9月に3年生を対象に、「今住んでいる地域(与板)が好きですか」「今住んでいる地域(与板)の歴史や自然について関心がありますか」というアンケート調査を行った。「今住んでいる地域(与板)が好きですか」で肯定的な回答は77.8%で、平成19年4月実施全国学力・学習状況調査の47.3%から大きく増加している。また、「今住んでいる地域(与板)の歴史や自然について関心がありますか」(H19～21の数値は全国学力・学習状況調査の結果による)では、平成19年4月：17.6%→平成20年4月：31.5%→平成21年4月：52.9%→平成22年9月：65.5%と年々向上している。

このように、ふるさと与板の歴史に関心をもち、与板を愛する生徒が大きく増加した要因は、「地域のよさを生かし、地域の方に喜んでもらえる教育活動」の展開にあると考える。また、NHK大河ドラマ「天地人」放映や関連する地域の様々なイベントも大きく作用しているものとする。天地人ブームが薄れていくこれからは、本実践の正念場である。生徒の実態からスタートして、地域のよさを生かし、地域を愛する生徒を育む教育の実践に努めていきたい。

国際化による魅力づくり

富山国際大学附属高等学校
校長 中田 正幸

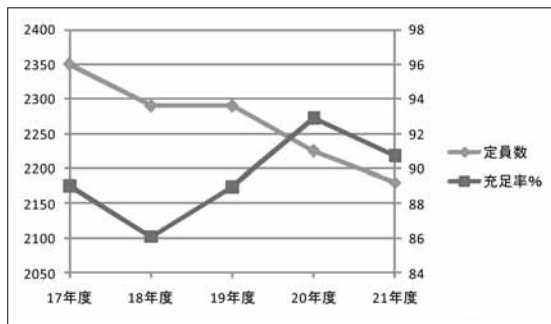
1 県内私学の現状

価値観の多様化により、消費者の要求が高まり、名門ということに胡座をかいた企業や経営者は、即刻、市場から退場を命じられることが珍しくない。私立学校も例外ではない。

富山県の私学は、概して独自性に乏しく、その主たる役割は公立学校の補完であり、その目指すものも公立高校と似通ったものになっている。県立高校の優劣を決める一番のファクターは国公立大学への入学者数であり、私学も同様に考え、この競争に参加している。本校も大学付属であるにもかかわらず、富山国際大学よりも国公立大学の合格者を増やすために、必死に努力している。

こうした努力も空しく、県内私学の定員も入学者数も減る一方である。県内の県立高校と私立高校の定員の公私比率は話し合いで決められている。率はほとんど変わっていないが、生徒の絶対数が減れば、定員も減少するのは当然である。全国の私立高校の70%以上が定員を割り込んでいる現状は、県内私立も例外ではない。加えて、公立高校授業料無償化制度が実施され、無料の公立高校と有料の私立高校のカテゴリーができ、私立を取り巻く環境は益々厳しくなっている。

今後は、「公立では出来ない付加価値」＝「私学らしさ」を提供し、その報酬として、保護者から授業料をいただく学校に変わらなければならない。



県内私立高校の定員充足率

2 私学らしさとは？

今までの富山県内の私立は、「県立高校と同じ価値観を共有すること」＝「魅力」＝「私学らしさ」と考え、特に国公立大学の合格者数を伸ばすこと、また、部活動では甲子園（運動部の全国大会）に出場することに莫大な労力とお金をかけてきた。例えば、どの私立も持っている特進コースと学力特待制度、部活動の特待制度等で、学校独自の奨学金支給の名の下に多くの特待生をかかえ、学校の財務を圧迫してきた。また、特進コースの増加単位による教員の増員、部活動の指導者確保のための無理な採用等が、人件費の増大につながっていた。それに加えて、“県立化”政策による私学教員の私学マインドや愛校心の喪失が大きな問題となった。入試問題を県立高校の入試問題と全く同じ構成で作成し、高校説明会の席上で、「県立の模擬試験のつもりで受験してください。」と中学生に訴えている私立高校さえあった。

この不景気の中でも、割高なハイブリッド車が売れているように、私学らしい魅力ある学校を作れば、授業料が少々割高の私立高校でも中学生が選んでくれることは間違いない。今こそ公立後追いからの脱却の最大のチャンスである。

3 キーワードは国際化

(1) 質的国際化

本校は、国際英語コース・特進コース・フロンティアコースの3コース制を敷いている。このうち、国際英語コースの内容を再検討し、本校の質的国際化の核になるようカリキュラム等を再検討した。具体的には、「英語授業のさらなる充実＝英語重視」と「国際理解講座＝文化的側面の国際化の充実」である。

(2) 量的国際化

本校では2年次に研修旅行を実施している。内容は国内、国外の各3コースの中から生徒が自由に選

ぶ形式をとっている。英語のオールイングリッシュ授業を始めてから、国外コースを選ぶ生徒が増え、校内のパスポート所持率は60%にまで上昇し、引率する側の教員については100%を達成した。

また、学校生活の中で生徒が英語を話す機会を増やすために、留学生の派遣、及び受け入れを増やすと同時に、特別入試を実施し外国籍生徒の受け入れも始めた。現在16名の外国籍生徒が、本校生として在籍している。こうした生徒には、1年次週4時間の日本語の特別授業を実施している。

4 セルハイ再申請

(1) 本校とセルハイの歴史

セルハイとは、"Super English Language High School"の略で、文部科学省が指定する「英語教育推進校」のことである。これは、文部科学省が平成15年度から『英語が使える日本人』育成のための行動計画のもとに始めた事業で、先進的な英語教育を推進し、優れた授業実践を普及させること等を目的としている。

本校は、平成16年～18年、平成19年～21年と二期連続でセルハイに指定された。第一期は国際英語コース対象の研究だった。対象コースの生徒が、英語好きだということを追い風に、好結果を生むことができた。進学実績も、国公立合格者も増えたが、超難関の私立に多数合格者を出し、また、英語検定では3年生30名中5名が準1級に合格、24名が2級に合格した。

平成19年～21年の第二期セルハイでは、全校を対象にして、Project Based Learning (PBL) とオールイングリッシュ授業の効果的な進め方を研究することにした。PBLとは生徒が主役の授業で、設定したテーマに対し、生徒自身がリサーチし、発表しながら内容理解を深めていく授業手法である。特に3つのコースの中で一番人数の多いフロンティアコースは、英語嫌いがほとんどという生徒で構成されている。「日本語でもわからないのに、オールイングリッシュ授業なんて。」という冷やかな視線が、こと英語や国際化には寛容なはずの校内でも多く感じられた。

(2) 全校オールイングリッシュの英語授業

① 得意分野を伸ばし、不得意分野を克服する

苦手なことをやる時、一番得意な分野から始めて、成功体験を積み重ねることにより、苦手意識が克服できる。入試結果ではリスニングの分野については、3つのコース間であまり点数の開きがない。英語を耳に入れる機会が多くなり、リスニングは得意とまではいなくても、4技能（読む・書く・聞く・話す）の中では、少なくとも苦手意識が少ない唯一の技能になっていると推測される。

② カッコいい！ 憧れをモチベーションアップに

教師の英語シャワーで、耳から英語の知識を習得させるという意味で、オールイングリッシュ授業が最適と判断した。しかし、リスニングさせる側の教師の英語が問題になる。生徒から見て、「発音きれい!!先生みたいになりたい。」となるように、教員全員発音の矯正に努力した。

(3) 苦手な英語で成功体験を

フロンティアコースの生徒は、英語の授業での成功体験は経験がない。成功体験の得やすい授業といえば、第一期セルハイ研究の経験で Project Based Learning の手法が最適と考えた。

教員はどちらかと言えば、ファシリテーター的な役割でしかない。したがって、授業中英語を使うのは生徒であり、教員の話す機会が少なければ少ないほど良い授業になる。



—ペアワーク—

毎時間、ペアで内容確認のためのQ&Aや、構文の定着のためのロールプレイをおこなっている

(4) オールイングリッシュ授業を受け入れやすい

環境づくり

① 簡単な教科書

セルハイ第一期では、研究対象コースは英語が得意な国際英語コースであり、三省堂で一番難しい「Crown I・II」を使用した。英語好きな生徒には通用したが、英文を理解すること自体にかなりの時間を費やし、内容を深めるためのプロジェクトの設定やハンドアウトの制作にかなり手間取った経験がある。英語が苦手な生徒の場合、理解状況をこまめに観察しながら、プロジェクトの設定やハンドアウトの内容・レベルを調整する必要があり、英文自体が簡単な教科書の方が教員でコントロールしやすいし、補助教材の量や程度を調整しやすいので、フロンティアコース用に同じ三省堂の一番簡単な「Vista I・II」を選んだ。



PBLの授業風景 II

—Power Pointを使ったプレゼンテーション—

② 定期テストを積極的に利用

定期テストは理解度テストという概念を完全に捨て去った。生徒が一番真剣に学問に取り組む授業の一環であると考え、生徒自身が授業中に行った発表や他のグループが行った発表の内容についての質問を多く取り入れ、授業のまとめとして位置づけている。

③ 学校行事でも成功体験を

英語の授業での成功体験を、学校生活でも体験できるように学校行事に工夫を加え、国際交流の機会をさらに増やした。

現在、長期・短期併せて、年間50名前後の留学生を受け入れている。身につけた英語を実際の生活で試す機会が飛躍的に増え、体育大会等の学校

行事でも留学生と協力しあう姿を多く目にするようになった。

5 教師も変わった

(1) 公開授業

英語では、年3回の公開授業を実施している。公開授業を目標に、出来るだけ互いの授業を見学し、英語科会議で批評会を開くことにしている。また、学内では1週間の授業見学週間を設けたり、保護者参観日を設けたりと授業に対する取り組みが変わってきた。

(2) 指定教科制度

平成19年度より、学校独自の研究として英語以外の教科にも研究予算を付け、セルハイ的な研究活動を実施することにし、まず保健体育科を指定した。授業時間内に会議の時間を設け、これまでの決められた種目で授業を消化する教師中心型授業から、本校の生徒の運動能力を考慮し、生徒中心型授業をめざす、質的変換を図る努力を始めている。

6 名実ともに国際化

学校の国際化については、ねらい通り、質的にも、量的にもほぼ成功した。留学生のホームステイ先はすべて、生徒宅である。全校でオールイングリッシュ授業を展開し始めてからは、ホストファミリーを探す苦労がなくなった。

また、研修旅行の海外コース選択者が70%に増えた。英語を使ってみたいというのが主な理由である。生徒達は留学生や外国籍の生徒達とも違和感なく接することができるようになった。もはや本校では「国際」ということばに特別の意味がなくなりつつある。これこそ本校が目指した国際化である。

7 私学らしさへの第一ステップ

セルハイ等による教員集団の意識の変化によって、改革の歯車がゆっくり、ゆっくりと噛みあい始め、学校が変わり始めた。同じキャンパス内の富山国際大学や富山短期大学の教員や、事務職員から「数年前とは別の学校みたい。」と声をかけられるようになった。

(1) 教師の意識の変化

- ① 生徒は我々を選んでくれた大切な存在
 - ・問題ある生徒でも今まで以上に丁寧に対応し退学者を減らそうという意識が強くなった。
- ② 生徒中心の授業
 - ・授業法に対する研究心が旺盛になり、研修にも積極的に参加するようになった。
- ③ 生徒を大切に育て、本校ならではの付加価値をつけて卒業
 - ・各教科で「本校ならではの付加価値」＝「どんな生徒に育てたいか」に基づいたシラバス作りを始めた。

(2) 生徒の意識の変化

- ① 愛校心とプライドの芽生え
 - ・式等で校歌をしっかりと歌うようになった。
- ② 入学生の40%は第一志望で本校に入学
 - ・入試で本校を専願とする受験生が入学者の40%近くになった。

8 具体的な成果

入学者数の低迷から始まった学校改革の核としてのセルハイが機能し始め、スピードは遅いが変化の流れは確かなものになりつつある。平成21年度入学生は、9年ぶりに定員を大幅に上回った。22年度入試も受験生は前年より増加した。入学生は定員を若干下回ったが健闘した数字と言える人数である。

9 生徒の変化

しかし何よりもうれしいことは、第一志望であれ第二志望であれ、自らが本校を選び、受験し、入学した生徒が増え、愛校心が芽生え、プライドを持ち、笑顔が増えたこと。つまり生徒が変わったことである。

先日の卒業式に来賓として出席いただいた中学校の先生から「8年ぶりに卒業式に出席させていただいたが、何故、大勢の本校生（中学生）が貴校を受験するようになったのか、その理由がわかった。8年前とは雰囲気が全く変わりましたね。」といううれしい言葉をいただいた。

10 他教科の変化「個からチームへ」

また、英語科教員が、教科指導のために頻繁に互見授業（相互に授業チェックを行うこと）を行い、

週3時間の検討会では足りずに、放課後もミーティングを重ねている姿は、他の教科に対し大きな影響を与えた。

まず、互見授業が学校行事の公開授業週間として定着した。まだまだ、批評会を開くほどではないが、他の教員の授業を意識し始めたことは大きな変化である。

また、セルハイの目的そのものである「自分の学校の生徒に合った、新しい教授法の研究開発」についても、個人ではなく教科として、チームとして取り組む姿勢がみられるようになってきた。新年度の各教科のシラバス作成では、今までは前年度授業担当者が個人で担当していたが、教科会議で検討し、考え方をシェアする教科も出てきた。

こうした変化は、教員の入れ替わりが少なく、変化を好まない風土になりがちな私学にとっては、組織内変革を促す、一種の血液循環促進のような効果がある。

11 最後に

最近、本校の教員希望者の履歴書に、「御校の特徴である英語教育や、国際交流に興味があり、その教育の一端を担い貢献したい。」というような一文が必ず見受けられる。ホームページを見て適当に書いたのかは定かではないが、いずれにしろセルハイの効果は、外部に対し確実に浸透してきていることが窺える。

また、前述の通り、学内改革の起爆剤ほど強力ではないにしろ、変化のきっかけになったことは否定できない事実である。

しかし、私立にとっての最終的な外部評価である入学者数が2年連続で増えたことが一番の薬で、職員室は今日も活気が漲っているように感じられる。

先日、校内研修で、各教科でPBL的授業手法を取り入れることについて提案したが、どの教科もコンセプトチャート（シラバス作成の基本的考え方と各科目の役割・関係を図式化したもの）をしっかりと書き上げてきた。多くの教員が、同じベクトルで生徒を育てようという共通意識が芽生えてきたように思う。この成果をベースに、さらなる「私学らしさ」を目指し、教員・生徒両方のレベルアップを図っていききたい。

地域産業を生かしたコミュニケーション能力の育成

～総合的な学習「椿学習」を通して～

鹿児島県鹿児島市立黒神中学校

校長 塩屋 純隆

1 はじめに

黒神中学校は、鹿児島のシンボル桜島の東部（鹿児島市黒神町）に位置している。全校生徒9名（1～3年生各3名、男子5名、女子4名）のへき地小規模校である。生徒たちは人数が少ないため、「1人で10人分」を合い言葉に、様々な活動を分担し、協力して行っている。本校に隣接している「埋没鳥居」は大正の噴火によって鳥居が地上約1メートルのみを残して溶岩に埋もれたもので、鹿児島県の天然記念物に指定されている。毎朝、ボランティア活動として鳥居周辺の降灰除去や落ち葉清掃を生徒と教職員とが行うことで、学校の1日をスタートさせている。この活動は開校以来の伝統として六十数年以上続けられており、生徒の奉仕の心を育てている。

生徒は、噴火活動の活発な桜島の麓で、大自然の恵みと脅威との両面を体感しながら、地域とのつながりの中で生まれ、それぞれの個性を発揮しながら成長している。

2 主題設定の理由

本校区の生徒たちは、小学校では複式学級での学びを経験し、中学校では少人数学級での学習と、少人数で固定化された人間関係の中で育っている。

生徒たちは常に教師（地域の大人を含む）から声を掛けられ、安心して学校生活を送っている。

その一方で、自分の意見や考えをことばにしなくても、相手が汲んでくれるだろうという考えや固定化された人間関係を受け入れ、自分の新たな可能性や思いを抑えながらその中に居場所を見つけて生活する消極的な様子が見られる。

総合的な学習の時間に設定されている「椿の実拾い」行事（地域の特産物である椿の実を製油する）に工夫を加え、生徒のコミュニケーション能力を高めることを目標として、研究、実践を行うことにした。

3 研究の仮説

地域の特性を生かした販売体験的な学習を通して、自己有用感が高まり、表現する力が向上することで、自らの課題を探究し、社会で生きていくための力の基本が身につくのではないかと考えた。

4 研究の内容

(1) 教育課程全体における位置づけ

椿の実拾い行事は、平成16年以前は学校行事としてPTA活動と抱き合わせで行われていた。平成17年度より、総合的な学習の時間に「椿学習」を設定。年度を追うごとに内容に工夫と改善を加えて実施している。

(2) 本校が目指すコミュニケーション能力の育成

本校では、生徒の社会性を培い、自ら表現することを通して、話す・聞く・書く力が高められ、コミュニケーション能力が育成できるのではないかと考えた。

本校は小規模校であるため、体験活動を多く取り入れた学習が進められており、非常に多くの経験をすることができるのだが、地域外で個々の生徒がコミュニケーションを図る場が少ない。講師招へいの機会に質疑応答などの場面になると、急に黙り込んでしまうなど、地域の中では活躍できるが、地域の外の世界に出ると消極的な面が色濃く表れてしまう。

このような生活から、本校を卒業した生徒たちは、少人数学級で過ごしてきた小・中学校生活から一変して、1学級40名程度のクラスメイトのいる高校に、たった1人で進学することになる。生徒たちが中学校卒業に向けて抱えている一番の不安は、「高校に進学してからの人間関係を作っていけるかどうか」ということである。

たとえ生徒が一人で進学しても、新しい世界に自信を持って進み、自分らしさを発揮しながら可能性を模索できるようになってほしい。

(3) 椿学習の歴史

桜島は活火山である。噴火に伴い、降灰や火山ガスが発生する。これらの悪条件のなかで、桜島に住む人は、桜島大根、桜島小みかん、ピワなどを生産して生活を支えてきた。また、桜島では昔から秋を迎えると、各家庭で椿油を作り、自家用として利用したり、個人で販売したりしている家庭も少なくなかった。

本校では、生徒数の減少に伴い（資料1参照）修学旅行などの校外行事にかかる経費が高くなった。そこで、PTAの話し合いの中で、小・中学校の修学旅行費や諸活動の補助として椿油の収益金を積み立てることになったのが発端である。

椿の実収穫は、平成15年度ごろまでは、鍋山（桜島南岳付近）に「青年の山」と称する椿の木が植樹された場所を中心に、1日がかりのPTA行事として行われていた。



生徒数の多い頃は、親子で1日行事として実拾いと種の取り出しを行っていた。

平成16年からは桜島の活動が活発化し、入山規制が敷かれたため、地域の方の好意で土地を提供していただき、椿の実を拾わせてもらっている状態である。

しかし、地元に住んで椿の木を管理されていた方々も、高齢化により黒神地区を離れて生活される方が増えてきた。このことから、椿の実収穫の場所の確保が大変難しくなってきた。

そこで、平成18年度から20年度までエネルギー経済産業庁主催の「エネルギー教育実践校」として環境教育に取り組む中で実践費や「ローソン緑の基金」を利用して、学校で管理できる場所を学校椿園として開墾、植樹を行い、緑化活動と合わせて椿学習が存続できるように環境整備を行った。



緑の基金による椿園の開墾と、PTA奉仕作業

椿園の確保ができたが、それに伴い、管理について

の問題が生じている。生徒数減少でP個数が大変少なくなり、学校行事も小学校と重複するなかで、保護者の方々に協力をいただきながら、椿園の管理を行っていかねばならず、今後の運用に課題となってくると考えられる。

資料1. 生徒数の変遷

年度	5	6	7	8	9	10	11	12	13
人数	21	17	16	15	10	8	5	8	10
年度	14	15	16	17	18	19	20	21	22
人数	9	8	8	7	6	7	9	8	9

〔平成10年度から一桁台の人数となっている。教職員の子ども転出入を除けば、地元の子どもの数は、さらに少ない。〕

(4) 椿学習を通したコミュニケーション能力の育成

「椿学習」では、各活動に「話す・聞く・書く」場を設定した。

【話す・聞く】

- ・実拾い時…収穫の際、農園の方の講話を聞く。収穫後地域の方へのお礼を述べる。
- ・製油所搬入時…製油所でのインタビューをする。
- ・販売時…接客、メディア取材への応答をする。
- ・テレビ会議システムを利用した活動紹介と意見交換（平成21年度：市来中学校、口之島小中学校）

【書く】

- ・販売…販売用メッセージカード、椿油説明書など
- ・テレビ会議等への発表原稿作成
- ・各所へのお礼の手紙



メッセージカード作成

(5) 椿学習の変容

「椿の実拾い」はその名の示すとおり、学校行事とPTA活動として「椿の実を拾うこと」のみが生徒の参加できる部分として扱われ、製油と販売活動については保護者の方に任せて行われてきた。

平成18年度より、本校の課題である社会性およびコミュニケーション能力を身につけるために、PTAの方が行ってきた椿油販売を生徒の活動として取り組むことにした。初年度（平成18年度）は、鹿児島市内中心地のデパート前と、桜島側「道の駅」との2か所で販売したが、次のような問題点が挙げられた。

- ①生徒が二手に分かれることで、人数が少なくなり、大人（教師・保護者）任せな面がみられたこと

②場所による集客数の差があるため、生徒の販売経験に差が見られ、社会性を育むための経験が十分に得られなかったこと

以上の点を反省し、2年目から販売場所を1か所に絞った。また、販売活動をより充実させるためにも、年を重ねるごとにすべての工程に生徒が関わるように工夫していった。

資料 2. 活動の変化

	生徒の活動	教師活動	保護者活動
H17以前	収穫・天日干し	収穫 天日干し	収 穫 販 売
H18年度 ） H19年度	収穫・天日干し 瓶詰め 販売	製油所搬入 瓶詰め 販売	収 穫
H20年度 ） 現在	収穫 天日干し・種の選別 製油所搬入 瓶詰め・ラベル張り 販売		

〔平成17年度までは、生徒が関わる部分は2つの行程だけであった。その他の行程については、保護者や教職員が行っていた。〕

(6) 椿学習の過程

①椿の実拾い：9月から10月にかけて

総合的な学習の時間とPTA活動と連携して行う。生徒たちは午前中の4時間行い、PTA会員は引き続き午後東桜島方面まで足を伸ばして収穫する。

椿の木に登って、木に生っている実をもらい、実からはじけて落ちた種を一粒一粒拾ったりする。

休日や登下校時道路に落ちている椿の種を拾ってくるなどして、出来る限り椿の種を集める。



椿の実拾いの様子と、椿の実・種



毎日天日干しと、実の選別の様子



瓶詰めと、ラベル張りの様子

②種を取り出す・天日干し：収穫時から毎日

油になるのは種子の部分である。休み時間を利用して、実を割って種を取り出す。種は天日干しをし、十分に乾かす。種の余分な水分を飛ばし、油を搾りやすくするため毎日天日干しをし、乾かした種を選別する。

③製油所搬入・製油：11月中旬

土のう袋に詰め、精油所に搬入する。製油の説明を聞き、油を作る過程を見学したり、インタビューをしたりする。

④瓶詰め：12月中旬

- ・瓶を熱湯で洗い、乾かす。
- ・椿油を瓶に注入する。
- ・手作りのラベルシールを貼る。
- ・メッセージカードを添える。
- ・チラシ作成



製油所の見学

(椿油の説明、花鉢の説明などを記す)

⑤販売：12月(年1回)

販売当日は保護者も活動の支援をしてくださる。午前中は小学校の販売、午後は中学校の販売として分担して行っている。

5 生徒の変容

「桜島黒神でとれた椿油はいかがですか？」

「純度100パーセントの椿油です」

「髪の毛だけでなく、お肌にも、料理にも使えます」などと、生徒たちは道行く人に思い思いの宣伝文句を投げかける。椿油販売の様子はテレビや新聞などで取り上げられた。それらを見て、わざわざ遠方から購入にきてくださる方や毎年購入を楽しみにしてくださる方、さまざまな人がワゴン前に足を止めてくださる。「ありがとうございました」と椿油を手渡ししながら、客との会話が交わされる。販売当初はぎこちなく、す

ぐに大人に頼ろうとしていた子どもたちの表情も態度も、年を重ねるごとに堂々としてきた。手作りのたれ幕や幟旗を掲げ、生徒自身が工夫をする。相手からの会話への対応をするだけでなく、自分から自然と話しかけられるようになってきた。

生徒の変容は、なにより「自分たちで作った商品なのだ」という思いが自信となって表れているからだと考えられる。

先輩が後輩をリードし、作業や販売の仕方を教えていく。1年ごとに反省をし、どのような工夫が必要かを考え、互いにアイデアを出し合いながら、生徒たちも販売を楽しみにしているようである。



販売にも、ひと工夫

【生徒の感想】

・販売を続けていくことで、話し方がうまくなったと思う。お金の渡し方や対応を考えてできるようになってきた。小学校と違って、活動が多く大変なこともあるけれど、先生たちも一緒に楽しく取り組めた。環境学習で、椿の殻を使って、ろうそくやオガライト、肥料などを作ることができて楽しかった。

・瓶詰めまですることで、「やり通す力」がついたと思う。初めて販売したときはとても緊張したが、声掛けができたし、お客さんとのやり取りができるようになって、やればできるという気持ちになった。おばあさんに「前買ったときに使い心地がよかったからまた買いに来たよ」といわれて、喜んでもらえるものを作ってよかった。今年もたくさん声掛けをして、売りたいと思う。

・椿の実拾いだけよりも販売まで行う方がよい。自分たちで作ったものを売る喜びが感じられる。販売で学んだことは社会に出たときに役立つと思う。

・小学生のときの「拾う→売る」よりも「拾う→準備→売る」を経験してお金の大切さが分かった。販売まで行くと、活動することが多くなり大変になったけれども、売れたときのうれしさが何倍にもなる。販売はコミュニケーションの力を育ててくれたと思う。

・小学校では、実拾いだけだったけれど、中学校では実を割ったり、干したりして大変だ。でもこれが自分たちの学習に使うお金になると思うとやる気が出る。売れたときは充実感、やりきったぞという気持ちになる。接客の仕方がみんな年々上手になってきている。

・油ができるまでの過程を通して商品作成の手順を知ることができた。売るときに買ってもらえないと販売のつらさも実感した。将来、自分が実際にサービス業や商売の仕事につかなくても、どの仕事でも人と関わることになるので、この経験は生かせると思う。

・小1～中3まで続けることで、地域のことにより詳しくなった。地域の方々との会話が増え、つながりを感じられるようになった。自分たちで黒神の特産物を作る経験ができたことがありがたい。買ってくれる人たちに感謝している。売るときにいろんな人としゃべって交流ができるので自信がついた。

【保護者の感想】

学校とPTAが一緒になって、十数年続いてきた桐油作り。小学校のときは、地面に落ちた椿の実しか拾えなかった子どもたちも、成長とともに、木に登ったり、行動範囲を広げたりしながら、より多くの実を集められるようになり、わが子の成長を感じました。



師走の町で販売を行う生徒たち

6 成果と課題 ○=成果、●=課題

生徒たちが椿の実拾いから販売までの全ての行程に関わることで、次の点に気づくことができた。

○販売を通して他者との関わりを持ち、その中で自分で対話の際の態度や表現を考え、コミュニケーションをとることができるようになった。

○生徒自身が実感を持って体験することで、本当の意味での「椿の種一粒の重さ」を知ることができ、地域や保護者に対する感謝の心が育まれた。

○生徒の活動の領域を広げるとともに、製造の工程を自ら体験することで、地元の産業を知り、販売する日への期待、やる気も高まってきた。

●行事だけでなく、生活のあらゆる場面で自ら「積極的に」コミュニケーションを図らせていきたい。

これらの活動において保護者・地域の方が「わが子のため、地域の子どもたちのため」と協力をしてくださることに感謝しなければならない。今後もこの活動を通して、生徒たちが自らの課題を探究し、生活の様々な場面に生かせるように、サポートしていきたい。

特別支援教育における「キャリア教育」の実践的研究

－特別支援学級における『ありがとう』株式会社の活動を通して－

徳島県鳴門市林崎小学校

教諭 楠 茂宣

1. はじめに

『ありがとう』株式会社は、鳴門市林崎小学校の特別支援学級（平成18年度当時在籍8名）の子どもたちによってはじめられた活動である。

近年「勝ち組・負け組」といったことが言われるようになった。その基準の一つに経済的な豊かさがある。もちろん社会生活を営む上で経済的な豊かさは大切なものである。しかし、「働く」ということの本質の一つとして、「働くこと＝人や社会の役に立つこと」があり、こうした意義と、その喜びや楽しさを、体験を通して実感することは、すべての子どもたちにとって「働く」という概念を形成していく上で、大切な意味を持つものである。そこで、今年度で五年目を迎える特別支援学級における『ありがとう』株式会社の意義についてキャリア教育の観点から明らかにしたい。

2. 研究仮説

特別支援教育におけるキャリア教育について考えるとき、『ありがとう』株式会社の活動は、「働く」という概念を形成していく上で、大切な意味を持つものではないか。

3. 『ありがとう』株式会社とはなにか

○『ありがとう』株式会社の企業理念（教育的な目標）

- ・「ありがとう」がいっぱいの学校・家庭・地域にしよう

○主な活動（学習活動）

- ・自分たちの手で自分たちの周りの環境をよくすることや、すすんで人の役に立つことをする活動

○活動により得られる報酬

- ・「ありがとう」のことば
- ・（働くこと＝人や社会の役に立つこと）の喜びや楽しさ

4. 『ありがとう』株式会社設立

平成18年度後半、子どもたちは、社会生活が多くの人の支え合いによって成り立っていること、そして自分の生活には、家族をはじめたくさんの支えてくれる人や友達、さらには見守ってくれる人がいることについて考えた。こうした感謝の気持ちを表現し、伝える



（詩「ありがとうがいっぱい」）

ために、「ありがとうがいっぱい」の詩をつくり、毛筆で12mの掲示作品として仕上げた。

平成19年度になり、前年度の活動をもとに「支えられ見守られるだけではなく、自分たちが周りの人の役に立つことはないだろうか」ということについてディスカッションし、まず次のような学校全体に関わるみんなの役に立つ活動に取り組んだ。

- ・校舎から講堂への通路作り
- ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認・仕分け・配本



- ・全校児童の靴箱と傘立ての整頓
- このような活動の中で、自分たちの手で自分たちの周りの環境をよくす



ることや、すすんで人の役に立つことの大切さ、そして自分たちにもそうした活動が出来るのだということに気づいたこと、さらにはこうした活動を通して友達に認められることや「ありがとう」と感謝されることを「とても嬉しい」と実感したことなどをもとに何度もディスカッションし、次のような話し合いを重ねた。

- ・「働く」ということについて
- ・働くことで得られるものについて

- ・「ありがとう」という言葉にこめられた気持ちについて

こうしたディスカッションや話し合いを経て、子どもたちからは、「ぼくらが、学校の花の水やりをしよう」「普段できていないところのそうじをしよう」「お世話になっている人に『ありがとう』を届けよう」と、次々と新しい活動が考え出された。

そして、言われて一番うれしい言葉「ありがとう」を合い言葉にして活動を続けていくことになり、子どもたちは、学校・家庭・地域を「ありがとう」でいっぱいにするための会社、『『ありがとう』株式会社』を設立したのである。

会社であるため、それぞれの活動の際には、子どもたちは、全体をまとめリーダーシップをとる「社長」・中心になって計画を立てる「企画部長」



といった会社としての責任者を決めたり、それぞれの活動場面で役割を分担したりしながら、活動に取り組むことになった。さらに、「広報部長」を中心に、その目的や活動を全校や家庭・地域社会に広げる広報活動にも取り組むこととした。

5. 『『ありがとう』株式会社』のあゆみ

【毎月・随時】

- ・全校の靴箱と傘立ての整頓（毎月随時）
全校児童の靴箱と傘立ての整頓を続けている。
- ・エプロンや体操服・学校のタオルの洗濯（毎週）
学級の仲間のエプロンや体操服・保健室や職員室のタオルの洗濯を続けている。

【平成19年度の活動】

- 5月・講堂への通路（約25m）作り
 - ・図書室の本の補修作業の手伝い
 - ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認仕分け・配本
- 6月・教育実習生へのお礼
 - ・「ありがとううどん」づくり
- 7月・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の回収後の確認
 - ・『『ありがとう』株式会社』の広報活動
 - ・お世話になっている人に収穫したジャガイモのプレゼント
- 8月・夏休み期間の家庭での『『ありがとう』株式会社』の活動

- 9月・運動会に向けてトイレ掃除・全校に向けての傘立てや靴箱の整頓を中心とする啓発活動



- 10月・運動会で、全校児童が使ったはちまきや旗の洗濯・アイロンがけ・かたづけ
 - ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認・仕分け・配本
 - ・教育実践研究生へのお礼
 - ・『『ありがとう』株式会社』の活動を全校に向けて説明
 - ・「ありがとうの木」の活動への全校での取り組み・広報を通じて全校家庭への広報・啓発活動
- 11月・環境作品「やさしいことば」の発表・掲示



- ・『『ありがとう』株式会社』を他校へ広げる
- ・作品出品による「ふれあい人権祭」での広報啓発活動

12月・「やさしいことば」を制作発表

- 1月・『『ありがとう』株式会社』の社員を鳴門市内に広げる
- 2月・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の回収後の確認
 - ・全校児童が『『ありがとう』株式会社』の社員となる
- 3月・卒業する6年生に「六年生へありがとう」の詩を贈る

【平成20年度の活動】

- 毎月・随時の活動に加えて
- 4月・学校図書館サポーターの開始に伴う図書室の環境整備
- 5月・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認・仕

分け・配本

- 6月・「ありがとうをふや草」の植え付け・栽培
- 7月・「ありがとうをふや草」を全校児童に贈る
 - ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の回収後の確認
- 9月・運動会で、全校児童が使ったはちまきや旗の洗濯アイロンがけ・かたづけ
- 8月・夏休み期間の家庭での「『ありがとう』株式会社」の活動
- 10月・6年生と共に活動
 - ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認・仕分け・配本
- 11月・作品出品による「ふれあい人権祭」での広報・啓発活動
 - ・徳島県小学校教育研究統一大会（総合）に向けての環境整備
- 12月・作品出品による「ひまわり作品展」での広報・啓発活動
- 1月・第1回 ふじ・たんぼぼ学級「ありがとう」株式会社 こころの作品展開催（会場：キョーエイ4Fギャラリー）



「ありがとう」書画展示 鳴門市林崎小学校の「ヨーエイ鳴門駅前店で開かれた『ありがとう』株式会社」の活動を伝える作品展が、鳴門市撫順のキョーエイ4Fギャラリーで開催された。写真：キョーエイ

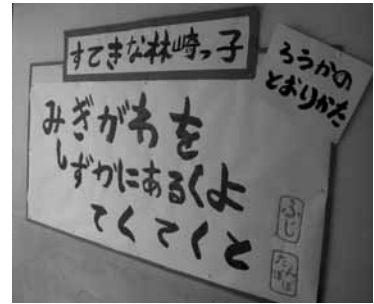
- 2月・第2回 ふじ・たんぼぼ学級「ありがとう」株式会社 こころの作品展（会場：林崎小学校）
- 3月・第3回 ふじ・たんぼぼ学級「ありがとう」株式会社 こころの作品展（会場：鳴門山上病院）

【平成21年度の活動】

毎月・随時の活動に加えて

- 5月・学校図書館サポーターへのお礼
 - ・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の確認・仕分け・配本

- 6月・「すてきな林崎っ子」環境作品製作（毎月）
- 7月・鳴門市立図書館からの借り入れ図書の回収後の確認



・鳴板国語授業用パネルの点検と補修

- 9月・運動会で、全校児童が使ったはちまきや旗の洗濯・アイロンがけ・かたづけ

- 11月・作品出品による「ふれあい人権祭」での広報・啓発活動



・トイレのスリッパを並べたり使った後に水を流したりすることを全校のみんなに心がけてもらうためにT君が書いた作品をカードにし、学校中のトイレへ取り付ける



- 12月・作品出品による「ひまわり作品展」での広報・啓発活動

（平成22年度現在も引き続き活動中）

6. 『『ありがとう』株式会社』の広がり

平成19年度、「ありがとう」株式会社の広報活動では、まず、各学級担任に「ありがとう」株式会社の目的と活動を知ってもらうために授業公開を行ない、子どもたちがプロジェクターを使って「ありがとう」株式会社の目的と活動を報告し、あわせて各学級の子どもたちにも知ってもらい、常時の活動である靴箱と傘立ての整頓への協力を呼びかけるためのポスターを作



成し各学級に届けた。各学級では、道徳の時間をはじめとする教育活動の中で、特別支援学級の子どもたちによる今までの活動の紹介と靴箱と傘立ての整頓への協力を呼びかけるためのポスターを題材に、子どもたちと共に一人一人が主体的な規範意識をもつことの大切さについて考えてもらった。その結果、「今まで、だれが靴箱や傘立てを整頓してくれているのか知らなかった」「黙々と活動を続けてくれていたことを初めて知った」という驚きの声や「いっしょにやりたい」という個人や学級での協力の申し出が届けられ、また率先して行動に移す子どもたちが目に見えて増えてきた。こうして『『ありがとう』株式会社』の活動が知られるにしたがい、他の学級の子どもたちの中にも「注意されてする」「注意されるからする」といったものから、自分から進んで、自分だけでなく友だちの靴をそろえたり傘立てを整頓したりといった主体的な行動をとることへと規範意識の変化が見られるようになり、全校児童がよい行いができた証として「社員証」をもらい、『『ありがとう』株式会社』の社員となった。こうした学校全体の意識の変化が、特別支援学級の子どもたちにとって『『ありがとう』株式会社』の活動を他の学校や地域へも広げるといった次の活動への大きな意欲づけとなったのである。平成20年度には、『『ありがとう』株式会社』の活動について広く県内外に知ってもらい、企業理念である「ありがとう」がいっぱいの社会にするために、『『ありがとう』株式会社』のあゆみとそれまでに作成した作品展を企画し、「第1回 ふじ・たんぼ学級『ありがとう』株式会社こころの作品展」(会場：キョーエイ4Fギャラリー)を10日間の会期で開催し、約千名の来場者を記録した。そして、ありがとう株式会社の活動に共感して下さった来場者には、「株券」を進呈し、『『ありがとう』株式会社』の理念を広げること協力していただくこととした。なおその後作品展は、会場を変えながら、第2回、第3回と続けて開催することができた。

7. 考察

特別支援教育におけるキャリア教育について考えるとき、『『ありがとう』株式会社』での自分たちの手で自分たちの周りの環境をよくすることや、進んで人の役に立つことをするといった活動は、特別支援学級の子どもたちにとって、(働くこと＝人や社会の役に立つこと)の喜びや楽しさを実感し、「ありがとう」の言葉にこめられた感謝の心を感じ取ることができる貴重な体験となっている。こうした体験を重ねることは、人や社会の役に立とうとする自己の生き方にかかわる

考えを深め、実際に人や社会の役に立つことと、それによって得られる喜びや楽しさといった「働く」ということの大切な意義を実感し、「働く」という概念を形成することに資するものである。

さらにこうしたキャリア教育の基礎を培う『『ありがとう』株式会社』学習活動や体験活動は、次のように道徳教育・各教科・総合的な学習の時間・特別活動の視点から考えても子どもたちの成長や将来の自立にむけて「よりよく生きる力」を養う上で大切な意味を持ち、支え合いながら共に生きる仲間づくりに大きく役立つものであることが明らかになった。

(『『ありがとう』株式会社』の教育的な意義) 道徳教育の視点から考えると

- ・人間としてよりよく生きるための基礎・基本となる規範意識・基本的な生活習慣・人間関係を形成する力・自己有能感や自尊感情をはじめとする道徳性を育て、道徳的価値の自覚や自己の生き方についての考えを深め道徳的実践力を育てる。

各教科の視点から考えると

- ・日常生活に必要な(読む・書く・話す)ことや計算といった基礎・基本の学力を身に付け、それを発揮することにより思考力・判断力・表現力を高め、定着をはかる。

総合的な学習の時間の視点から考えると

- ・生涯にわたって自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力を育て、よりよく生きる自己の生き方について考えることをすすめる。

特別活動の視点から考えると

- ・学校や地域社会における生活範囲を広げ、集団の一員として自主的で実践的な社会性や生活力を育て自己を生かす能力を養う。

8. おわりに

キャリア教育の基礎を培う『『ありがとう』株式会社』の活動によって、私は通常の学習活動では発揮されにくい、しかし社会的な自立に向けては大切であると考えられるたくさんの能力が子どもたちの中に秘められていることにあらためて気づかされた。子どもたちが、将来どのような仕事につくのかはわからない。しかし『『ありがとう』株式会社』での子どもたちのいきいきとした活動の様子を目の当たりにするとき、たとえどのような仕事についてとしても、一人一人が「自分も社会を支えているのだ」「自分も人の役に立っているのだ」という自信と誇りを胸に、そして感謝の心を忘れずに働き自立してほしいと願ってやまない。

地域と共に教材開発「生きる力」を育む教育活動

～坂本龍馬の生き方に学ぶ～

高知県高知市立昭和小学校

教諭 小川 晶子

1. はじめに

幕末から明治にかけて、日本の変遷にかかわるたくさん的人物を輩出した高知県、南国土佐。その中に、桂浜から広く真っ青な太平洋を、いや、海の向こうの世界を見渡している一人の人物がいる。新しい時代の礎を築き幕末を駆け抜けた風雲の志士、坂本龍馬である。今年「龍馬伝」の影響もあり、空前の龍馬ブームである。桂浜や上町にある龍馬の記念館には、毎日のようにたくさんの観光客が訪れている。坂本龍馬の生まれた町、上町1丁目（本町筋）は私の本籍地でもあり、子どもの頃から慣れ親しみよく遊んだ町でもある。160年前、龍馬も歩きながらこの道を通り、日根野道場に通ったのであろうか。日本人が憧れる歴史上の人物でいつも上位を占める龍馬も、実はごくふつうの男子だったと言われている。むしろ、泣いてばかりのいじめられっ子で「ねしょんべんたれ」だったと、後に龍馬が乙女に送った手紙には書かれている。そんな弱くて泣き虫だった龍馬が、なぜあれほどの偉業を成し遂げることができたのか。それは彼の探究心の強さ、行動力、コミュニケーション能力の高さ、そしてなにより他者を考え思いやる愛情の深さであると私は考えている。龍馬には近藤長次郎や武市半平太など、たくさんの仲間がいた。勝海舟をはじめ、時代を代表する様々な人物たちとの出逢いもあった。人の話をよく聞く龍馬は、コミュニケーション能力に長けていた。また柔軟な思考力と適切な判断力、いろんな方向から物事を考える力、そしてそれを自分のものとして取り入れる力があつた。あの封建的な時代に「平等」と「自由」を掲げ、自我を捨て命をかけて脱藩し、日本を洗濯しようと駆け巡り、世界情勢にまで目を向けていた龍馬の思考力、行動力には驚きとともに感動する。様々な諸問題について対応できる幅広い知識と柔軟な思考力や判断力は、今の子ども達に求められている力そのものであり、これはまさに「生きる力」である。龍馬の生き方を真似ることはできないが、彼の生き方から学ぶことはできるかもしれない。龍馬で授業をしたい！切なる思いから教材開発に踏み切った。

2. 研究の目的

本校は社会科の研究校であり、新教育課程研究校でもある。これまで、子どもたちが興味・関心を持ち、自ら考え課題解決ができる授業を試行錯誤しながら行ってきた。しかし、計画的に坂本龍馬を扱った指導案や教具は、過去を調べても残っていない。新学習指導要領では「確かな学力」が重視されている。この「確かな学力」とは、その場限りの学力ではなく、「生きる力」の土台となるものである。

本校6年生の児童は明るく素直な子どもが多い。しかし、どの教科でも自ら考え判断することが苦手であり、思考力に課題が残る。また困難なことに立ち向かう力が弱いと感じる。全国学力学習状況調査質問紙でも、項目「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦しているか」では、全国平均を6%も下回り、「挑戦している」という子どもは一人もいなかった。主体的な判断力、行動力を身につけ、よりよく問題を解決できる力を育てる必要がある。そこで、子ども達になじみが深い郷土の先人、坂本龍馬を社会科や道徳教育で教材として取り上げ、彼の生き方から学ぶ授業を試みた。社会科授業では、彼の成し遂げた業績を幕末の歴史の中心に据え、新学習指導要領改訂の具体的事項にもあるように問題解決的な学習を充実させ、思考力・表現力を育てるために多様な考えが出る授業展開を考えた。さらに道徳教育では、新たに目標として付加された「自己の生き方についての考えを深める」ためにも、龍馬の生き方に学び自分を振り返り、「希望・勇気・努力・思いやり・克己心」等、生活に根ざした生きる力を育成することを目指して授業実践を行った。

3. 研究仮説

6年生の歴史学習（幕末から明治維新）や道徳教育において、児童の興味関心が深い郷土の先人坂本龍馬を教材化し、中心に据えた授業展開をする。思考力、判断力、言語活動を充実させる授業展開を行うことで、確かな学力を身につけるとともに、龍馬の生き方に学び、今後の生きる力の育成につながるであろう。

4. 研究内容

- (1) 坂本龍馬の教材分析・指導案作成
- (2) 思考・判断・表現力をつける授業、自己の生き方に問かける授業の工夫
- (3) 授業による児童の変容を分析

5. 研究の実際

(1) 教材分析・指導案作成

教材分析や指導案作成に当たっては、地域の龍馬記念館の森健志郎館長や前田由紀枝学芸主任など専門家の協力をいただいた。多大な資料の中で、6年生の児童にとって有効性を見いだせる物を選択することが非常に難しく多くの時間を要した。しかし、龍馬の数ある業績の中でも、船中八策や海援隊約規、龍馬の残されている手紙等の教材は大変価値ある物と判断し、授業に取り入れることとした。以下、授業実践を述べる。

(2) 授業実践

①問題解決型学習の充実

本校における問題解決型学習の流れを、龍馬授業に生かし学習の流れ（単元構想図）を作成した。



②授業の実践[全13時間]

(1) 課題を導く導入の工夫[1時間目]

問題把握の導入段階は、単元全体の共通課題を導き出す大切な授業となる。児童の興味関心を引き、さらに核心部分につながる展開を考えなければならない。結果、坂本龍馬と近江屋で暗殺された中岡慎太郎を扱うこととした。海に向かって建てられている二人の銅像から発問を考えた。結果、児童の疑問はふくらんだ。

- 龍馬は太平洋の海の向こう、世界を見渡している。世界まで見渡して日本を変えたかったのだろうか。
- 二人は何をしていて暗殺されたのだろうか。龍馬の33年を調べて考えてみたい。
- 龍馬が伝えたかったメッセージは何だろう？



「探ろう！龍馬の33年間！龍馬からのメッセージ」という共通課題を出した子どもたちから「見学に行って確かめてきたい！」という提案があり、さっそく見学に行くこととなった。

(2) 龍馬の生まれた町を歩こう！[2～3時間目]

「龍馬記念館で龍馬の名前の由来を聞いた！」朝一番に子どもが報告してくれた。龍馬の授業が楽しみでたまらないようで、関心・意欲の高さが伺えた。見学地は龍馬の生まれた町記念館、龍馬の生誕地から龍馬が歩いたであろう本町筋（上町）をボランティアの方と歩いた。近藤長次郎や河田小龍家跡では、説明を必死にメモを取りながら歩いていた。



実際に見聞きした情報をノートや新聞に整理しながら自分の考えをまとめ、学習内容を再構成し、さらに

未解決な疑問や課題を次時へつなげた。

(3) 出会い①乙女姉さんと龍馬[4時間目]

龍馬の人格形成になくなくてはならない存在が姉の乙女である。弱くて泣き虫で勉強嫌いだった龍馬を、時にはお仁王様のような怖さで叱り、時には母親のような愛情で励ます乙女。子どもたちは同年代の龍馬をとて身近に感じ、自分と比較しながら学んでいた。

(4) 土佐藩の武士の仕組み[5時間目]

「下士は武士であって武士でならず」。江戸時代の土佐藩は、他藩と違い特に武士の上下関係や差別が厳しかった。龍馬のおかれた地域や環境を抜きにして龍馬の授業はできないと感じ、土佐勤王党にも影響を与えた井口村刃傷事件を授業で扱った。上士が下士を斬りつけ、仇討ちをした池田寅之進が自害に追い込まれた事件を知り、子どもたちは江戸時代の身分差別を龍馬に重ね、いっそう不合理を感じていたようだった。また、思考力や表現力を育てるために、友だちの考えに対して自分はどう思うのかを語らせたり、毎時間「今日の学び」として自分のことばで記述させたりもした。

- 土佐藩は他の藩と少し違って、武士の中でも厳しい身分差別があったことがわかった。もしかしたら龍馬は自分の経験から「差別はいかん」と思っていたのかもしれない。
- Aさんの「龍馬は悔しくて強くなって見返そうと思った」の意見になるほどと思った。上士と下士では服装も差別されていた。山内家は政策のために行っていたけれど、やっぱり差別は間違っていると思う。龍馬もきっとそう感じていたはずだ。

(5) 開国～黒船と龍馬～[6時間目]

江戸幕府が開国する際によく使われるのが黒船の絵図である。今回、この黒船に龍馬と民衆を加え、二つの立場を比較しながら開国の授業を行った。立場を変えて考えることにより思考が深まり歴史的背景の理解にもつながる。また、比較後は、「あなたなら開国に賛成?反対?」の課題で討論を行った。龍馬の吹き出しには、「まっことでっかい船じゃ! どうやって造っちゃうがぜよ?」「のってみたいぜよ!」など龍馬らしい吹き出しを考え、龍馬の行動を予想し自ら調べる姿が見られた。



(6) 命をかけた龍馬の脱藩[8時間目]

身分の差が激しい土佐藩で、自分のしたいことがで

きななかった龍馬は命をかけて、家族を捨てて脱藩する。「罪人になるのになぜ?」みんなで話し合う授業になった。「龍馬は日本を変えるため、自分に挑戦するために脱藩した。」「差別のない世の中を作りたかった。土佐藩ではできない。」「けれど、私やったらようせん。命かけてまで…。」龍馬の脱藩には賛否両論だったが、「自分を信じて挑戦していく龍馬はやっぱりすごい!」脱藩の道を地図上で記しながらつぶやいていた。



この頃から、日常生活の中で子どもたちに変化が出てきた。からかっている友達に勇気を出して「それはだめで!」と注意をする姿、発表が苦手な子どもが一生懸命発言しようとする姿などが見られた。

(7) 思考力・判断力・表現力を育て深める授業
龍馬の作った海援隊約規(簡単にした物)を取り上げ、歴史的な背景をもとに約規に込められている龍馬の考えを思考する授業を行った。【9時間目】

【本時の目標】	
○海援隊約規を作ることで、約規に込められている龍馬の願いを考え思考を深める。	
○「平等」「話し合い」など、海援隊約規が進んだ考えを取り入れていることを知る。	
【本時の工夫点】 龍馬の立場に立って、海援隊約規の内容を考える活動を行った。考えやすいように5条の内容をまとめたキーワードを与えた。(①入隊条件②隊長③約束事④学習内容⑤給料) 歴史的な事実をふまえて龍馬の考えを予想する。個人思考から小集団思考、全体思考へと活動をつなげる。最後は海援隊約規を簡単にしたもののみながら龍馬の考えをまとめた。キーワードのことばから、当時の歴史的な事象を考えながら思考する授業展開となった。	
【授業の展開】	
課題把握	1. 海援隊約規についておさえる。 2. 海援隊約規をキーワードを手がかりに作成する。 龍馬になって、海援隊約規を作ろう! ※必ず根拠を記述させる。
思考場面	3. 考えを伝え話し合う。 ①個人思考 ②小集団思考(かかわり) ③全体思考(深める)
検証	4. 海援隊約規の資料やDVDを視聴して約規を確認する。 5. 龍馬の願いについて考える。 6. 今日の学びを振り返る。
【授業の考察】 龍馬の立場になって約規を作ることは、前時までを振り返る学習にもつながる。①の入隊条件では「日本を変える意志の強い人」や「誰でも身分関係なく入れる。龍馬は身分差別はおかしいと感じていたから」等の意見が出された。また、「誰でも入れるのは、スパイのような人も入るかもしれないので危険。だから面接をするべきだ」等の裏を読む意見も出された。③の約束事では、「みんな差別なく公平に話し合っただけで必要だ」等、協力や助け合い、平等の意見が出され龍馬の約規に込められている「自由」「平等」の願いを感じることができていた。初めて挑戦した授業であるが、子ども達は歴史的事実を絡めながら思考し表現することができていた。楽しい授業となった。	



【海援隊約規】(高知県立坂本龍馬記念館提供)

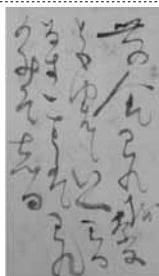
単元構想の終盤「学びを深める」授業（12時間目）は船中八策を扱った。以下、授業の流れと考察である。

【本時の目標】	
○船中八策から龍馬の新しい政治の考え方を探る。 ○歴史的事実や背景をもとに策が作られている理由を考え伝える。	
【本時の工夫点】龍馬が新時代を築くために提案した船中八策について、なぜその策を作ったのか根拠をふまえながら考える授業展開になった。学びを深めるため、個人思考から小集団思考、全体思考へと活動をつなげた。自分が考えたい策を選んで理由を記述させ、龍馬の目指していた日本について全体の場で意見を交流し深め合った。	
【授業の展開】	
課題把握	1. 船中八策についておさえる。
思考場面	2. 船中八策にこめられた龍馬の願いを考える。 船中八策にこめられた龍馬の願いや思いを考えよう。 ※必ず根拠を記述させる。
	3. 考えを伝え話し合う。 ①個人思考 ②小集団思考（かかわり） ③全体思考（深める）
まとめ	4. 龍馬が目指していた日本について考える。 5. 次時の学習を知る。 (船中八策がどのようにつながっているのか考えてみよう)
【授業の考察】子ども達は「不平等条約」「土佐藩の差別」「民衆の生活」「身分制度の廃止」等を挙げ、江戸時代の不合理さを根拠にあげていた。そして、龍馬はみんなに自由・平等で話し合いを大切にする、思いやりのある日本にしたかったのだと話し合った。子どもから「龍馬は33歳で暗殺されている。その後、この龍馬の願いがどのようになっていたのか考えてみたい」という次の課題が出された。明治時代の政策を学習しながら追究していきたい。	

(8) 道徳の授業より

龍馬の手紙からも生き方を学び、自己を振り返る授業を行った。子ども達は手紙から龍馬の多様な面を読み取っていた。特に「世の人は われをなにとも ゆはばいへ わがなすことは われのみぞしる」の和歌では、龍馬の芯の強さを発見し心に響いたようだった。

・この和歌から、龍馬はやさしくて思いやりがあるだけでなく、本当に強い心を持っていた人だとわかった。「われのみぞしる」の部分から、誰に何を言われようと自分の意思で動く龍馬の姿を感じた。私はすぐ人にながされるところがある。ながされない強さをこれからは持ちたい。



・龍馬には、私にはない「素直さ」「意志の強さ」がある。私は自分に自信がなく、「それ違うんじゃない？」と言われたらすぐ不安になってしまう。もっと強い心を持って何を言われても自分を信じてチャレンジしていきたいと思う。

また、龍馬記念館森館長の話聞く時間を設定した。史実を基にした龍馬の話は、意志が強く真っすぐな「いごっそう龍馬」の姿が垣間見えた。



6. 子どもの変容

坂本龍馬を学習してから変化が見られた子ども達。龍馬学習を振り返り、龍馬と自分を見つめながらそれぞれが受け取った「龍馬からのメッセージ」を文

章に記した。以下、子どもの文章を紹介する。

○僕が龍馬から教わったこと、それは差別をしないことと平和を貫くこと、そして勇気だ。僕は塾に行くのがとても嫌で行きたくない時、龍馬のことを思い出して龍馬のように最後まであきらめない！と思っている。龍馬の学習をするまで、自分には自信というものがなかった。でも龍馬を知って少し変わることができたと思う。龍馬は僕の「自信の恩人」だ。これからは、龍馬を借りずとも自分に自信を持ち心の強い平成の龍馬になりたいと思う。

○龍馬さんは差別のない争いのない日本にしたかった。私は以前、人を差別したことがあるような気がします。苦手な友だちをさけていました。龍馬さんや土佐藩を学習しながら、差別とはそんなに苦しいものなのかとやっと気付きました。だから最近は人を差別しないように気をつけています。みんなと助け合えるようにがんばっています。龍馬さんは日本を変えるだけでなく人も変えていく存在だなと感じました。私も龍馬さんのようにこれから人を大切にしていきたい。

○私は龍馬の勉強を始めて、少しずつ変わっているような気がする。それは人と平等に接すること、今やるべきことをやること。私が「龍馬が一番に伝えたい」ということ、それは「おまんらあの中で、だれか一人が悲しみゆうかもしれん。まず身の回りの友だちから大事にできないかん。そのためには助け合いが大切やきね！」

7. 成果と今後の課題

龍馬が子ども達の日常生活にこれほど影響を与えるとは私自身も思わなかった。子どもの価値観を変えるほど、龍馬学習はインパクトが強い教材であった。社会科と道徳の両面から龍馬の生き方に迫り、授業を展開することで大きな成果があったように感じている。今後社会科では、龍馬の業績をその時々に取り上げ、龍馬の願いや考えと比較させながら思考できる授業を追究していきたいと思う。

8. 終わりに

最後に、龍馬学習の前後で比較したイメージアンケートを紹介する。坂本龍馬は単なる「カッコいい人！」ではなかった。龍馬は本当に奥が深い人物である。

【質問】あなたにとって坂本龍馬はどんな人物？どんなイメージ	
A児 (前)カッコいい！	(後)強くやさしくて物事を公平にする人
B児 (前)仲間思い	(後)やさしくて相手の気持ちが分かる人。平和を好み仲間や家族を大切にする人。
C児 (前)時代の先端を行く人	(後)「平等」の実現のために命をかけた人物
D児 (前)思ったことをする人	(後)平和を願い差別をなくそうと思っていた人

〈参考文献〉「坂本龍馬を知っちゃう？」2009
資料提供：高知県立龍馬記念館

実生活に「数学を活用する力」を育む数学指導法

～観光ガイドを兼ねた問題集「高知☉数学旅日記」作成の取り組み～

高知県立高岡高等学校

教諭 島田 佳幸

1. はじめに

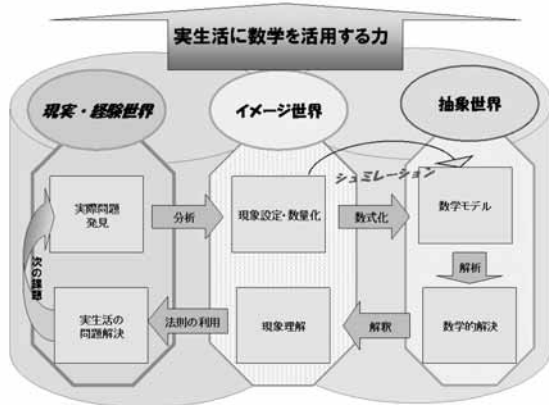
数学が苦手な教科と言われるようになって久しい。「算数・数学がいつからわからなくなったか」という質問に関して中学校からというのが80.6%でトップで、以下、小学校5・6年(13.4%)、小学校3・4年(4.5%)、小学校1・2年(1.5%)と続く。

今春まで6年間勤務していた安芸桜ヶ丘高校では「わかる授業」を追及していった。そして、数学がより身近なものになるよう、また、数学と生活との結びつきを生徒の中に取り戻すために、「自分たちの住んでいる町」の名物、名所、史跡などを題材にして、数学の「問題づくり」という手法を通じて数学に興味を持たせ、数学を好きにさせていった。

2. 主題設定の理由

この間の授業目標は、PISAの「数学化サイクル」に見られるような、「現実世界の問題」から「数学的問題」へと変化させ、またその逆をも理解する力を育成することを主眼に置いた。

具体的には、下図「授業イメージ図」のように、「現実・経験世界」から「イメージ世界」を経過し



授業イメージ図

「抽象世界」へと移行していく中で、現実的な課題を見つけ出し、数学的概念によって現象を設定し、そして数式化し、数学モデルを形成していく。そして数学的解決を模索し、その中で現実の問題解決へと進んで

いくのである。

このサイクルを積極的に実行することによって、数学に興味を持ち、自ら学び課題を解決する能力が育つと考える。

しかし、多くの研究者から実践が難しいといわれている部分が、最初と最後の“現実から問題を見つけ出す”（実際問題発見）部分と“現実の問題解決へ”（実生活の問題解決）の部分である。つまり数学学習への入り口と数学学習からの出口における日常の事象と結びつけた指導の工夫が必要であることがわかる。その指導の工夫として数学的な活動を位置づけることが大切だと考える。

こういった過程を経験することで、実生活に数学を活用する力が身に付いてくると考える。

3. 研究の仮説

〈仮説1〉

地域を教材に使うことで、現実から問題を見つけ出し、最終的には現実の問題解決へとつながるような日常の事象と結びつけた指導ができるであろう。

〈仮説2〉

問題づくりをすることで、課題解決の方法を知り、自ら学び課題を解決する力が育ち、最終的に数学を活用する力が身に付くであろう。

4. 研究の実際

「仮説1：地域を教材に使うことについて」

(1) 地域を題材にする

数学の問題をより身近なものとするために、問題の中に地域を題材として取り入れた。たとえば教科書の問題では、『木の根元Pから20m離れた地点Qに立って木の先端を見上げると、見上げる角度は 35° であった。木の高さは何mか。』という風に書かれている。ここでは無味乾燥な数学の問題を解いているという認識を持つ生徒が多い。そこで、地域



あかのカモメちゃん像

を題材にした問題にすると、『ごめん・なはり線の赤岡駅には、あかのカモメちゃんが立っています。このあかのカモメちゃんから3m離れたところから、〇〇さんが1番上を見上げると34°ありました。カモメちゃんの高さを求めなさい。』という風にし、あかのカモメちゃんの写真も提示しながら、生徒に問題を出す。そうすることによって、より身近な問題になる。

生徒は、「毎日通っているところにあるものが授業に出てきたら、何だか数学が自分の問題のように感じて、変な感じだった。けれどいつもよりよくわかった。」と感想を述べている。アンケート結果からも同様の反応で、地域を題材にすることで授業に親しみを感じたという生徒がクラスで9割強いた。

地域を題材にすることによって、授業に取っつきやすく、理解しやすくなっていく。その結果、数学学習と実生活との遊離感が払拭され、数学嫌いの減少へと繋がっていった。

(2) 身の回りの物で問題をつくる

通学路にある建物が授業で扱われると、生徒は「数学を勉強しなければいけない」という一種のストレスが解消され、スムーズに授業に入っていける。

その中で、“地域から数学を考えようプロジェクト”を企画し、授業を編成した。“数学と現実生活との結びつき”を目に見えるものへと変換していく過程で、生徒が自分たちの住んでいる町を調査し、地域を題材にした問題集づくりに取り組んだ。

この間の問題づくりのテーマは以下のとおりである。

年度	問題づくりの題材	単元	科目
2005	学校内で興味をもったもの	三角比	数学 I
2006	自分たちの住んでいる町	三角比	数学 I
2007	高知全般の建物及びお店等	確率	数学 A
2008	本校生徒の通学の足である“ごめん・なはり線”	三角比	数学 I
2009	高知の特産品	不等式	数学 I
2009	高知県全体に散らばっている土佐幕末の志士めぐり	三角比	数学 I

2005年は、学校内にある建造物を対象にした。2006年は、学校内から行動範囲をすこし広げ、自分たちの住んでいる町とした。2007年は、高知市から東部を中心に生徒のお気に入りのお店の商品等を対象にし、確率の問題を作成した。2008年は、生徒の通学の足である“ごめん・なはり線”の各駅のモニュメントを中心に駅近辺の名所、史跡等を対象にした。2009年は、行動範囲を高知県全体とし、土佐幕末の志士を対象にし

た。また高知の特産品を題材に取り上げ、不等式の問題を作成した。

(3) フィールドワークの実施

上記のテーマで問題づくりを行う一つの過程（基礎資料づくり）として、フィールドワークを取り入れた。



測角器で野良時計の角度を測っている様子

生徒は、携帯電話の写真機能を使って映像を記録し、メジャーで対象物との距離を測定していった。そして、「お国自慢レポート」としてまとめた。フィールドワークは、現場に立つことによって、学習における豊かな想像力を引き出させ、観察力や知識欲を高めることができる。自分の住んでいる町に「こんなものがあったのか」と興味を持ち、もっと知りたいと学習意欲を高める。

「仮説2：問題づくりについて」

(1) 問題作成の手順

[No. 1] パソコン及び資料等でテーマの調査作業



自分の作問のテーマについてインターネットや図書室で歴史的な背景等を調べる。

[No. 2] 実測作業



実際の対象物のところへ行き、自作の測角器を使い角度を求めたり、影を測り、比を利用して対象物の高さを求める。

[No. 3] 問題作成



調査したデータをもとに、問題を作成していく。この時に対象物の実際の高さと違わないように、問題文の数値を合わせていくように指導した。

[No. 4] 編集し、完成



生徒に問題文に対応する絵も描かせて独自性のあるものにした。そして、最後に問題文・解答、写真、生徒の絵をパソコンに取り込み編集し、提出させる。その後、数回の添削を経て問題が完成した。

(4) 観光ガイドを兼ねた問題集「高知☉数学旅日記」作成

6年間の各年の問題づくりのテーマを再構成し、生徒の通学の足である「ごめん・なはり線」を基本に、自分の住んでいる地域の身近な建物や史跡、高知の特産品、また、今話題になっているNHK大河ドラマ「龍馬伝」ゆかりの地にもスポットを当て、数学と現実社会を融合した問題集「高知☉数学旅日記」を作成した。



問題集の表紙

この問題集「高知☉数学旅日記」のポイントは、「ごめん・なはり線」の各駅から名所がまわれるように設定されており、また高知県の各地に散らばっている本県出身の幕末の志士たちの足跡を追跡できるように設定されている。ちなみに問題集にある志士たちの足跡の写真は、実際に現地に行きカメラに収めてきたものであり、NHK大河ドラマ「龍馬伝」に出てくる人物もたくさん掲載されている。数学の問題を解くのもよし、名所めぐりとして問題を読むのもよしと、数学嫌いの生徒でも興味を引くものとなっている。

この問題集「高知☉数学旅日記」は三部構成になっている。

- 第一部は、数学Ⅰの「三角比」の問題である。
- 第二部は、数学Ⅰの「不等式」で高知の特産品を扱う。
- 第三部は、数学Ⅰの「確率」で高知全般を扱った。

また、第一部に関しては、その中に以下の3つのテーマを設けた。

- (i) 高知県全体に点在している土佐幕末の志士めぐり
 - (ii) 本校生徒の通学の足である「ごめん・なはり線」
 - (iii) 自分たちの住んでいる町（高知県東部）
- 以下、生徒の作った問題を紹介する。

—生徒作品①—

土佐・志士めぐり (三角比編)
近藤長次郎邸跡の碑の高さを調べよう!

近藤長次郎は、天保9年3月7日高知城下水道町2丁目に餅菓子商「大里屋」次女の長男として生まれて、名は長次郎です。長次郎はここで家業の饅頭行商を手伝っていました。字間が好きであった叔父門田兼五郎の指導を受けて字間を始めたそうです。幼少期から聡明で江戸に出て字間と砲術を学び、その才能を山内容堂に認められて、文永3年(1863)に名字帯刀を許され、神戸海軍操練所に入っていました。しかし長次郎は龍馬と同じ狭い日本にいるよりも世界を羽ばたく国際人になりたかった為、ユニオン号引渡して長州藩から得た謝礼金を、イギリス商人のトーマス・グラバーに渡した上でイギリスに留学しようとした。しかし、悪天候により出港が遅れた為その計画が露見しました。その行為は龜山社中の社規に反するものであったため、慶応2(1866)年1月14日に切腹しました。29歳でした。現在は上町2丁目8-20に近藤長次郎邸跡の碑があります。

さてここで問題です。猫が散歩をしていて、長次郎邸跡の碑の3m手前で止まって見上げています。猫の目の高さは10cmで、碑の一番高いところを見たら角度が25°ありました。長次郎邸跡の碑の高さを求めなさい。

【解答】 $3 \tan 25^\circ + 0.1 = 3 \times 0.4663 + 0.1 = 1.4989$
 $\approx 1.50 \text{ m}$

—生徒作品②—

自分たちの住んでいる町 (三角比編)
岩崎弥太郎生家の高さを測ろう!

1834年(天保5)に生まれた三菱財閥の創立者である岩崎弥太郎の生家が安芸市の土居にあります。生垣を巡らした屋敷内に茅葺(かやぶき)の母屋や、2階建て土蔵が残る当時の代表的な中農の造りです。土蔵の鬼瓦には、岩崎家の紋で後の三菱のマークの原型といわれる三階差が見られます。また庭には少年時代に弥太郎が造ったという日本列島の形をした石組みの石庭があり、土用竹の垣根に囲まれた温かい雰囲気の家です。

この岩崎弥太郎生家からの問題です。岩崎弥太郎生家から8m離れた地点にウサギのラビ君が立っています。ラビ君の目の高さは10cmです。ラビ君が岩崎弥太郎生家のでっぺんを見上げた角度は41°でした。

岩崎弥太郎生家の高さを求めましょう。

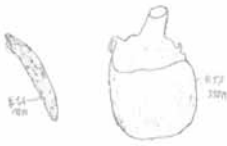
【解答】 $8 \tan 41^\circ + 0.1 = 8 \times 0.8693 + 0.1 = 7.0544$
 $\approx 7.05 \text{ m}$

—生徒作品③—

高知の特産品(不設式編)

安芸市の長ナスと丸ナスはいかがですか？

安芸市は広田龍太郎の生まれた町で、懐かしい童謡のメロディーが聞こえてくるような街です。
この安芸市では、ナスの生産が県内一で、総生産額 82 億円です。竜馬、はやぶさ、米ナスのほか、千両ナス、長ナス、丸ナスなどが栽培され、一年の内 10 月から 6 月まで出荷されています。美しい濃紺色と淡泊で癖のない柔らかな味わいが高い評価を受けています。
この安芸市が生産している作物からの問題です。
3,500 円以内で、1 個 350 円の丸なすと 1 個 170 円の長なすを合わせて、18 個買いたい。丸なすをなるべく多く買うには、丸なすと長なすをそれぞれ何個買えばよいでしょうか。



【解答】丸なすを x 個買うとすると、長なすは $(18-x)$ 個と表せる。
 $350x + 170(18-x) = 350x + 3060 - 170x = 180x + 3060$
 $180x + 3060 \leq 3500$
 $180x \leq 3500 - 3060$
 $180x \leq 440$
 $x \leq 2.4 \therefore x = 2$
 丸なすを 2 個、長なすを 16 個買える。

5. 研究の成果

(1)「仮説 1」に関して・・・
 ○生徒を対象にした質問紙調査を行ったところ、「中学の時、数学が好きか」という質問に関して「すこし・とても好き」と答えた生徒が 32.3%であったが、地域を題材にした問題で授業を行った後では 100%になった。これらの平均値の差の検定を行ったところ、有意水準 1% で有意な差が認められた。これらのことから、数学への興味・関心が高まったといえる。また、日ごろ目にしているものが数学の問題になっているので、取っつきやすく親しみやすいという感想が多かった。
 ○定期考査前に行った質問紙調査で、「授業中の内容は、授業中にわかっていただか」という質問に対して 97.1%の生徒がわかっていたと答えている。また、「テスト前の自信度」を聞いた項目では、85.3%の生徒が自信があったと答えている。定期考査の学習が事前のチェック程度で済み、かつ点数も良いという結果が生まれた。このことにより、数学を得意教科の一つに入れる生徒が増えた。
 ○地域教材を使ったクラスと使わなかったクラスを定期考査の点で平均値の差の検定を行ったところ、有意水準 1% で有意な差が認められた。点数的にも、相当の開きがあり、成績も良かった。

以上のことから、地域教材を使うことで数学に興味を持ち、数学の理解度も上がったといえる。

(2)「仮説 2」に関して・・・

○問題づくりを行ったクラスと行わなかったクラスを成績において平均値の差の検定を行ったところ、有意水準 1% で有意な差が認められた。

このことにより、数学学習への積極的参加やそれぞ

れの学力に応じた意欲的な学習活動を行うことが出来た。また、学習の定着も図れた。

○生徒の感想『問題づくりで大変だったことは、答えを出してみたら、大きすぎたり小さすぎたりと、数を合わせるのがすごく大変でした。まず自分で答えを出しておかないといけないというのがわかりました。』試行錯誤をしながら問題解決を行った様子がわかる。ここでは、自ら学び課題を解決する力が確実に育っている。

○生徒自身に問題を作らせることで、学習に対する興味・関心を高めることができた。文章問題の構成要素や場面設定、解決する方法、解くための必要な条件、解いた後の解の吟味など、学習をより深く理解させることができた。

○問題づくりという手法は、生徒の中で根強かった数学と実生活との遊離感を払拭することに大変効果があった。じっくり考え、先の見通しを立てることなど思考力や判断力の育成にもつながった。

また、「数学が社会生活をする上で必要か」という質問に関しても 98%の生徒が必要と感じると答えている。実生活と数学の繋がりが見え、数学を活用しているという傾向が見えてきた現われだと考える。

6. おわりに

数学教師として教壇にたってから「わかる授業」を追求してきた。その中で、PISAの「数学化サイクル」の概念を「授業イメージ図」として再構築し、今回取り上げた観光ガイドを兼ねた問題集「高知数学旅日記」の作成は、生徒から数学嫌いをなくし、地域を知ることによって自尊心も養われた。また、現実の問題を、自ら学び解決しようとする力が育ってきた。そして、現実から学んだ生徒は、学習は教え込まれ、覚えるものではなく“自分の力で学び取ろう”とする姿勢がなければ成立しないものだということも認識していく。今後も、更なる向上を目指して数学教育の向上に努めていきたい。

執筆責任者 島田佳幸

所属校 高知県立高岡高等学校

所在地 土佐市高岡町甲2200

電話番号 088-852-1168

第16回 日教弘教育賞

教育研究集録 第22集

平成23年 3 月29日発行

編集・発行 財団法人 日本教育公務員弘済会

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp>

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6
教弘会館内

TEL 03-3354-4001

FAX 03-3354-4068

印 刷 株式会社 篠原印刷所

〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL 054-286-5141
